

「教科等の構成と開発に関する  
調査研究」研究成果報告書(1)

昭和62～平成10年度

# 文部省研究開発学校における研究開発の 内容に関する分析的検討(1)

—教育課程の全体的な再編、情報教育、「総合学科」高校、  
英会話をめぐる研究開発—

平成12(2000)年3月

国立教育研究所

## は し が き

21世紀への入り口に立つ今日、これまでの学校教育の成果を引き継ぎながら、きたるべき時代と社会における学校教育の在り方を展望することが緊要の課題となっている。また、変化する社会を生きる子供たちに求められる資質や能力を明確にし、それを具現化する教育内容の在り方について、中長期的な視野から検討することも重要な課題といえる。

本調査研究はこのような問題関心から、教育内容編成の具体的な形態としての教科等の構成や開発について、本研究所の共同研究として平成9年度から進めてきた研究である。

本調査研究のねらいは、我が国における教育課程の研究開発動向やその歴史の変遷、諸外国における教育課程の動向、及び各教科等のカリキュラムの改善等について調査研究を行うことにより、将来における教科等の構成の在り方を検討するための基礎的な資料を得ることにある。このねらいを実現するため、(1)教育課程の改善と開発に関する研究、(2)各教科等のカリキュラムの改善に関する研究、(3)教育課程の開発動向や実施状況等の調査分析の三つの研究課題を設けて、研究を行ってきた。

この報告書は、研究課題(1)における教育課程の改善と開発に関する研究のうち、文部省研究開発学校における研究開発の内容について調査分析したものである。

本研究の成果が、将来における教科等の構成の在り方及び各教科のカリキュラムの改善のための基礎資料として生かされることを願うものである。

平成12年3月

国立教育研究所長

吉 田 茂

# 「教科等の構成と開発に関する調査研究」の概要

## 1. 研究の目的

小学校・中学校及び高等学校における教科等の構成や各教科等のカリキュラムの課題を把握するとともに、我が国における教科構成の歴史的変遷や諸外国のカリキュラム構成の動向等について調査・分析することによって、今後における教育課程の改善並びに将来における教科等の構成の在り方に関する基礎資料を得ることを目的とする。

## 2. 研究課題

### ア. 教育課程の改善と開発に関する研究

幼稚園、小学校、中学校、高等学校の教育課程の接続と構成の在り方、及び教育内容の「総合」的編成の原理と意義、その特質等について検討するため、我が国及び諸外国における教育課程の歴史的変遷と現状、文部省研究開発学校における研究開発内容などに関する調査・分析を行う。

### イ. 各教科等のカリキュラムの改善に関する研究

教育課程における各教科等の役割やその内容構成の在り方等について検討するため、我が国及び諸外国における各教科等のカリキュラムの歴史的変遷及び動向等に関する調査・分析を行う。

### ウ. 教育課程の開発動向や実施状況等の調査分析

教育課程の開発動向や教育課程の実施上の課題を把握するため、小・中・高等学校における教育課程編成に関する資料を収集し分析する。

## 3. 調査研究に関わる組織

(1) 研究代表者 牧 昌見 (次長)

(2) 研究企画委員

牧 昌見 (次長)

相良 憲昭 (企画調整部長)

坂本 孝徳 (企画調整部企画調整官)

高浦 勝義 (教育指導研究部長)

中野 重人 (教科教育研究部長)

下野 洋 (科学教育研究センター長)

長崎 榮三 (科学教育研究センター科学教育研究室長)

工藤 文三 (教科教育研究部教科教育開発研究室長)

谷田部玲生 (教科教育研究部公民教育研究室主任研究官)

(3) 事務局 教科教育研究部内

#### (4) 各研究班担当研究員

##### ア. 教育課程の改善と開発に関する研究

- 高浦 勝義 (教育指導研究部長)
- 山田 兼尚 (生涯学習研究部長)
- 清水 克彦 (教育指導研究部教材研究室長)
- 奈須 正裕 (教育指導研究部教育方法研究室主任研究官)
- 黒井 圭子 (教育指導研究部教育課程研究室研究員)
- 堀口 秀嗣 (教育情報・資料センター教育ソフト開発研究室長)
- 菊地 栄治 (教育経営研究部選抜方法研究室主任研究官)
- 渡邊 寛治 (教科教育研究部外国語教育研究室長)
- 小松 郁夫 (教育経営研究部学校経営研究室長)
- 坂野 慎二 (教育経営研究部学校経営研究室主任研究官)
- 澤野由紀子 (生涯学習研究部生涯学習体系研究室主任研究官)
- 鏡屋真理子 (国際研究・協力部国際教育協力室長)
- 鬼頭 尚子 (生涯学習研究部社会教育研究室研究員)

##### イ. 各教科等のカリキュラムの改善に関する研究

- 中野 重人 (教科教育研究部長)
- 有元 秀文 (教科教育研究部国語教育研究室長)
- 工藤 文三 (教科教育研究部教科教育開発研究室長)
- 谷田部玲生 (教科教育研究部公民教育研究室主任研究官)
- 永田 忠道 (教科教育研究部地理・歴史教育研究室研究員)
- 名取 一好 (教科教育研究部職業教育研究室長)
- 西野真由美 (教科教育研究部道德教育・特別活動研究室主任研究官)

##### ウ. 教育課程の開発動向や実施状況等の調査分析

- 工藤 文三 (教科教育研究部教科教育開発研究室長)
- 谷田部玲生 (教科教育研究部公民教育研究室主任研究官)
- 永田 忠道 (教科教育研究部地理・歴史教育研究室研究員)

昭和62～平成10年度

# 文部省研究開発学校における研究開発の 内容に関する分析的検討(1)

—教育課程の全体的な再編、情報教育、「総合学科」高校、  
英会話をめぐる研究開発—

研究領域1 教育課程の改善と開発に関する研究の組織

(2000年3月現在)

<国内班>

| 氏名    | 所 属                        | 職名    |
|-------|----------------------------|-------|
| 高浦 勝義 | 国立教育研究所教育指導研究部             | 部長    |
| 山田 兼尚 | 国立教育研究所生涯学習研究部             | 部長    |
| 清水 克彦 | 国立教育研究所教材研究室               | 室長    |
| 奈須 正裕 | 国立教育研究所教育方法研究室             | 主任研究官 |
| 黒井 圭子 | 国立教育研究所教育課程研究室             | 研究員   |
| 堀口 秀嗣 | 国立教育研究所教材ソフト開発研究室          | 室長    |
| 渡邊 寛治 | 国立教育研究所外国語教育研究室            | 室長    |
| 菊地 栄治 | 国立教育研究所選抜方法研究室             | 主任研究官 |
| 土方 苑子 | 東京大学大学院教育学研究科・教育学部・総合教育科学科 | 教授    |
| 和井田清司 | 千葉県立清水高等学校                 | 教諭    |

<外国班>

| 氏名    | 所 属              | 職名    |
|-------|------------------|-------|
| 高浦 勝義 | 国立教育研究所教育指導研究部   | 部長    |
| 小松 都夫 | 国立教育研究所学校経営研究室   | 室長    |
| 坂野 慎二 | 国立教育研究所学校経営研究室   | 主任研究官 |
| 鑑屋真理子 | 国立教育研究所国際教育協力室   | 室長    |
| 澤野由紀子 | 国立教育研究所生涯学習体系研究室 | 主任研究官 |
| 鬼頭 尚子 | 国立教育研究所社会教育研究室   | 研究員   |
| 金子 忠史 | 青山大学文学部          | 教授    |
| 新井 浅浩 | 西武文理大学           | 講師    |
| 鈴木 正敏 | 兵庫教育大学学校教育研究センター | 講師    |
| 原田 信之 | 九州看護福祉大学         | 助手    |
| 金 泰勲  | 日本大学文理学部         | 非常勤講師 |

# 目 次

|                                     |    |
|-------------------------------------|----|
| <b>I 分析的研究の意義と方法</b>                |    |
| 1 研究プロジェクトの意義 .....                 | 5  |
| 2 分析対象の研究開発学校 .....                 | 5  |
| <b>II 教育課程の全体的な再編に向けた研究開発</b>       |    |
| 1 分析の諸前提 .....                      | 9  |
| 2 研究開発の内容の概括的特質をめぐって .....          | 10 |
| 3 現行の教育課程の問題点の捉え方をめぐって .....        | 11 |
| 4 教育課程の再編の原理をめぐって .....             | 18 |
| 5 再編後の各学年別の年間総授業時数をめぐって .....       | 26 |
| 6 再編後の教育課程の特質をめぐって .....            | 28 |
| 7 運営指導委員会の構成をめぐって .....             | 51 |
| <b>III 情報教育の創造に向けた研究開発</b>          |    |
| 1 研究開発学校の取り組みと現在の状況 .....           | 53 |
| 2 開発学校の研究成果とカリキュラム変化 .....          | 61 |
| 3 現行学習指導要領から次期学習指導要領への情報教育の変化 ..... | 63 |
| <b>IV 「総合学科」高校を中心としたカリキュラム開発研究</b>  |    |
| 1 分析の諸前提 .....                      | 65 |
| 2 岩手県立岩谷堂高等学校の事例 .....              | 65 |
| 3 三重県立昴学園高等学校の事例 .....              | 72 |
| 4 「深い」実践の試みの方へー研究開発の本質ー .....       | 77 |
| <b>V 英会話学習の創造に向けた研究開発</b>           |    |
| 1 はじめに .....                        | 89 |
| 2 研究開発のねらい .....                    | 89 |
| 3 研究開発の実施内容 .....                   | 90 |
| 4 研究の成果 .....                       | 92 |
| 5 課題と考察 .....                       | 92 |

# I 分析的研究の意義と方法

## 1 研究プロジェクトの意義

当研究所においては、調査研究等特別推進経費による研究の一環として、平成9年度からプロジェクト「教科等の構成と開発に関する調査研究」（研究代表者 牧 昌見）に取り組んでいる。

このプロジェクトは、元来、近年における「学校週五日制の実施に伴う授業時数の縮減、環境教育、情報教育、国際理解教育等の新しい教育課題への対応、並びに生涯学習社会への移行等は、これまでの学校教育とそこにおける教育内容の編成の在り方等について再検討を迫るものとなっている。また、子どもを取り巻く生活環境の変化や子どもの自然体験の不足など、子どもの生活と学習の環境は大きく変化しつつある。さらに、いじめ問題や学校不登校等への対応が重要な課題となっており、これらの観点から教育課程の在り方について検討することも重要な課題となっている」、このような問題意識に立ち、「教育課程の改善と開発の在り方や各教科等の内容構成の在り方等を明らかにすることを通して、将来における教科等の構成の在り方に関する基礎的な資料を得ようとする」ことを目的にしている。

そして、この目的遂行のために、内部組織の一つとして「教育課程の改善と開発に関する研究」班（国内、外国）が発足し、その国内班の研究任務の一環として、文部省研究開発学校における研究開発の内容の特質について分析することになった。

## 2 分析対象の研究開発学校

### (1) 研究開発学校の歩み

文部省では、昭和51年度から、我が国の小学校、中学校、高等学校及び幼稚園の教育課程の基準改善に資する実証的資料を得るために、学習指導要領等現行の教育課程の基準によらない教育課程の編成実施を認め、その実践研究を通して新しい教育課程、指導方法を開発する「研究開発学校」（原則として3年）を指定するようになった。

その研究開発課題は計5種、11研究委嘱事項に及ぶほど多岐にわたり、また、その指定校も数多く、発足以来平成10年3月までにおいて、全合計190件、215校の学校が研究開発の指定を受け、その研究開発を終了している（文部省初等中等教育局高等学校課『研究開発学校の手引き』平成11年5月）。

しかしながら、このような研究開発学校の研究開発の内容についての分析は、一その成果が直ちに一般校の研究実践に反映され難いという研究開発制度そのものの特殊性を反映してか一ほとんど皆無の状況にある。しいてあげれば、文部省担当課が毎年、当該年度に終了する研究開発学校の研究開発の内容を、学校ごとに分析・検討する「部内資料」、及び『研究開発学校の研究にみる教育課程改善に関する調査研究』（平成8年度文部省「教



育課程に関する基礎的調査研究」委嘱研究報告書、学校改善研究会（代表 児島邦宏）、平成9年3月）が数えられるくらいである。

このような事情を勘案しつつ、さらに、既述のように、教科の再編・統合を含めた将来の教科等の構成の在り方が問われている今日、そのための基礎的資料を得ることを目的に、今回、研究開発学校における研究開発の内容について分析的検討を加えることにした次第である。

## （２）分析の枠組みと対象校

研究開発学校の研究開発の内容について分析する際、私たちは、その委嘱期間からみて、平成元年度を起点にしながら（すなわち、元年度に終了する学校、元年度にまたがって研究開発する学校、元年度から新たにスタートした学校）、平成10年度までに研究開発を終了することになった学校を対象とすることにした。昭和51年度以来のすべての学校を分析する余裕のないこと、及び現行の学習指導要領が告示され（平成元年3月）、そして今回新たに改訂されることになったこの10年間に及ぶ研究開発の内容を中心に分析することが、今後を考える際により有効ではないかと考えたからである。

他方、分析の枠組みに関していえば、当初、文部省の示す計5種の研究開発課題（11の研究委嘱事項）別及び英会話を考えたが、その後、分析を進める中から、むしろ研究開発の内容の特質を分類し、それを基に分析した方が将来の教科等の構成の在り方を考える際の参考になるのではないかと考えるようになった。このようにして、今回の分析に際して設けた分析の枠組みを示せば下記の6つである。

- ① 教育課程の全体的な再編に向けた研究開発
- ② 新教科の創造に向けた研究開発
- ③ 「総合学習」の創造に向けた研究開発
- ④ 情報教育の創造に向けた研究開発
- ⑤ 「総合学科」高校を中心としたカリキュラム開発
- ⑥ 英会話学習の創造に向けた研究開発

以上のような要領によって、今回の分析においては、計106件/115校（うち、一般指定は59件/68校、英会話指定は47件/47校）の研究開発学校が取り上げられることになった。それらの件/学校を一覧すれば<下表>の通りである。

なお、このうち、英会話の研究開発学校に関して補足すれば、大きく2つの時期区分が認められる。一つは、特別枠が設けられず、一般指定として研究開発した時期（学校でいえば、下表の平成5～7年度に指定の千葉/鶴嶺小、鹿児島大学附属小、大阪/真田山小・味原小・高津中）、二つめは、特別枠が設けられ、各都道府県に1校ずつ指定されるようになった時期（平成6～11年度）である。

分析対象の研究開発学校一覧（昭和62年度～平成10年度）

| 研究開発<br>課題<br>・委嘱 | 学 校 名 | 委 嘱 年 度 |         |        |        |        |        |        |        |        |        |        |         |
|-------------------|-------|---------|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|---------|
|                   |       | 62<br>年 | 63<br>年 | 元<br>年 | 2<br>年 | 3<br>年 | 4<br>年 | 5<br>年 | 6<br>年 | 7<br>年 | 8<br>年 | 9<br>年 | 10<br>年 |
|                   |       |         |         |        |        |        |        |        |        |        |        |        |         |

|     |   |   |   |   |   |   |  |  |  |   |   |   |   |      |
|-----|---|---|---|---|---|---|--|--|--|---|---|---|---|------|
| 一   | 兵庫教育大附小<br>東学大／竹早幼・小<br>福岡・北勢門幼小・中  |   |   | ○ | ○ | ○ |  |  |  |   |   |   |   |      |
| 二・1 | 滋賀大附中<br>長崎大附中<br>愛媛大附中<br>北海道大附属旭川中<br>香川大附属高松中<br>静岡大附属浜松中<br>大阪教育大附平野中<br>富山／福野中<br>千葉館山市立第二中<br>宇都宮大附属中<br>福教大附属福岡中 |   | ○ | ○ | ○ |   |  |  |  |   |   |   |   |      |
| 二・2 | 奈良女子大附属中・高<br>宮崎／五ヶ瀬中・高   |   |   | ○ | ○ | ○ |  |  |  | ○ | ○ | ○ | ○ | ○～11 |
| 三・1 | 埼玉／和光国際高<br>宮城仙台函南萩陵高<br>東京／北高<br>岩手／岩谷堂高<br>三重／昂学園高  |   | ○ | ○ | ○ |   |  |  |  |   |   |   |   |      |
| 三・2 | 東学大附属大泉高<br>金沢大附属高<br>三重／松坂商業高  |   | ○ | ○ | ○ |   |  |  |  |   |   |   |   |      |
| 三・3 | 三重／名張西高   | ○ | ○ | ○ |   |   |  |  |  |   |   |   |   |      |
| 三・4 | 兵庫／城内高<br>名古屋大附属高   |   |   |   |   |   |  |  |  |   |   | ○ | ○ | ○    |
| 四   | 愛知／西尾実業高<br>筑波大附属坂戸高<br>兵庫／相生産業高<br>大分／情報科学高<br>福岡／八女工業高<br>埼玉／不動岡誠和高   | ○ | ○ | ○ |   |   |  |  |  |   |   |   |   |      |

|         |  |  |   |   |   |   |   |  |  |           |   |           |   |
|---------|--|--|---|---|---|---|---|--|--|-----------|---|-----------|---|
|         | 東工大附属工業高<br>新潟／加茂農林高   |  |   |   |   |   |   |  |  | ○         | ○ | ○         | ○ |
| 五・1     | 滋賀／治田東小<br>東京／錦華小<br>お茶の水女子附小<br>大阪／滝川小<br>香川大附属高松小<br>福島大附属小<br>千葉／鶴嶺小<br>鹿児島大附属小<br>愛媛大附属小<br>福教育大附属福岡小<br>東学大附属大泉小<br>新潟／大手町小<br>横浜国大附属横浜小<br>滋賀／春照小<br>北九州／祝町小 |  |   | ○ | ○ | ○ |   |  |  |           |   |           |   |
| 五・2     | 長崎／鶏知中<br>兵庫教育大附属中<br>宮城教育大附属中<br>鳴門教育大附属中<br>福岡／筑紫野南中   |  |   |   | ○ | ○ | ○ |  |  |           |   |           |   |
| 五・3     | 静岡函南町立東小・中<br>北勢門小・篠栗北中<br>真田山/味原小/高津中<br>神戸大附明石小・中  |  | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |  |  |           |   |           |   |
| 英会<br>話 | 各都道府県に1校指定<br>各都道府県に1校指定   |  |   |   |   |   |   |  |  | ← 1 2 校 → |   |           |   |
|         |  |  |   |   |   |   |   |  |  |           |   | ← 3 5 校 → |   |

なお、これらの研究開発学校における研究開発の内容の特質に関する分析結果に関しては、本報告書においては、既述の6つの分析的枠組みのうち、①、④、⑤、⑥の分析結果について報告することにする。残る②、③に関しては他日を期すことにした。

(高浦 勝義)

## II 教育課程の全体的な再編に向けた研究開発

### 1 分析の諸前提

#### (1) 分析対象の研究開発学校

英会話を除く計59件、68校にのぼる研究開発学校（昭和62～平成10年度）のうち、本稿の課題である、教科、道徳、特別活動より成る現行の教育課程の全体的な再編を意図したと考えられる学校は、以下の〈表1〉の通りであった。

表1 教育課程の全体的な再編を目指した研究開発学校

| 研究開発課題・委嘱 | 学校名        | 委 嘱 年 度 |     |    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |
|-----------|------------|---------|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
|           |            | 62年     | 63年 | 元年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 | 7年 | 8年 | 9年 | 10年 |
| 五・1       | 東京／錦華小     |         |     |    |    | ○  | ○  |    |    |    |    |    |     |
|           | 福島大附属小     |         |     |    |    |    |    | ○  | ○  | ○  |    |    |     |
|           | 愛媛大附属小     |         |     |    |    |    |    |    | ○  | ○  | ○  |    |     |
|           | 福教育大附属福岡小  |         |     |    |    |    |    |    | ○  | ○  | ○  |    |     |
|           | 新潟／大手町小    |         |     |    |    |    |    |    |    | ○  | ○  | ○  |     |
|           | 横浜国大附属横浜小  |         |     |    |    |    |    |    |    | ○  | ○  | ○  |     |
| 五・3       | 静岡函南町立東小・中 |         |     | ○  | ○  | ○  |    |    |    |    |    |    |     |
|           | 神戸大附属明石小・中 |         |     |    |    |    |    | ○  | ○  | ○  |    |    |     |

すなわち、計8件、10校であった。前章で明らかにされたように、昭和62年度から平成10年度までに、英会話を除き、委嘱された研究開発学校の総数が計59件、68校であったことからすれば、件数で13.6%、学校でいえば14.7%ということになり、数からいえばそんなに多くはないといえよう。

#### (2) 分析の資料及び枠組み

各研究開発学校は、その期間中、毎年度ごとに研究開発に関する実施報告書の提出が求められている。委嘱期間は原則として3年間である。このため、各学校は、研究期間中に、第一次～第三次にわたる研究開発に関する実施報告書を作成し、文部省に提出することになるわけである。

そこで、本研究においては、これらの報告書を基に、その研究開発内容の特質を分析することが目的になるわけであるが、上記8つの学校から提出された第一次～第三次にわたる各実施報告書をみると、研究開発内容のほとんどすべての特質は、最終報告書とでもいふべき第三次報告書に収められていることが分かる（但し、錦華小学校の研究開発委嘱期間は2年）。このため、以下の分析は、第三次報告書を中心に行うことにし、必要に応じて第二次及び第一次報告書を参照するというようにする。

次に、これらの実施報告書から、その研究開発の内容の特質を分析する際の枠組みに関してであるが、以下の6つの分析的枠組みを設けることにした。

- ① 研究開発の内容の概括的特質をめぐって
- ② 現行の教育課程の問題点の捉え方をめぐって
- ③ 教育課程の再編の原理をめぐって
- ④ 再編後の各学年別の年間総授業時数をめぐって
- ⑤ 再編後の教育課程の特質をめぐって
- ⑥ 運営指導委員会の構成をめぐって

## 2 研究開発の内容の概括的特質をめぐって

まず最初に、上記各研究開発学校において研究開発された内容（教育課程）がどのような特質をもつものであるか、その概括的特質を紹介すると、下記の〈表2〉の通りである。

表2 研究開発内容の特質

| 学 校 名      | 研究開発の内容の概括   |
|------------|--|
| 東京／錦華小     | <ul style="list-style-type: none"> <li>・国語科、算数科、体育科、特別活動は現行のまま</li> <li>・教科として生活、表現、人間、環境を新設</li> </ul>  |
| 福島大附属小     | <ul style="list-style-type: none"> <li>・低学年（1・2学年）の教育課程を生活科、表現科、体育科、国語科、算数科及び道徳より編成</li> <li>・中・高学年の教育課程を人間科、地球科、表現科、体育科、国語科、算数科及び道徳より編成</li> </ul>            |
| 愛媛大附属小     | <ul style="list-style-type: none"> <li>・教育課程を8つの「学習領域」（冒険の学習、調査・研究の学習、育ての学習、創造の学習、習いの学習、運動の学習、交流の学習、働く学習）及び「みんなの時間」より編成</li> </ul>                             |
| 福教育大附属福岡小  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・教科として表現科（1・2学年）、生活環境科（3・4学年）を、領域として「人間」（全学年）を新設</li> <li>・子どもの活動（感覚、思考、表現）から教育内容を作るという立場から、現行の教科内容の見直し</li> </ul>      |
| 新潟／大手町小    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・教育課程を7つの「単元群」（生活・環境、言語、数量・図形、総合科学、創造表現、身体・健康、自分・集団）より編成</li> </ul>   |
| 横浜国大附属横浜小  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・3つの“共に学びをつくり上げる力”（「自己決定力／自己責任能力／かかわり合う力）の育成という立場から、現行の教科、道徳、特別活動の内容の見直し</li> </ul>                                     |
| 静岡函南町立東小/中 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・小5～中1（小中移行期）に領域「生活交流」を新設</li> <li>・表現力と論理的思考力の育成という立場から、国語科と算数・数学科の現行内容の見直し</li> </ul>                                 |
| 神戸大附明石小/中  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・4つの学習領域（身体健康領域、心の表現領域、環境探求領域、数理表現領域）を新設し、前期教育（幼～小3）－後期教育（小4～中3）の一貫教育課程を開発</li> <li>・身体健康領域には保健体育科（小1～中3）を配置</li> </ul> |

- ・心の表現領域には、想像表現（小1～小3）→創造表現（小4・5）→音楽科と美術科（小6～中3）、国語科（小1～中3）、英語科（小6～中3）を配置
- ・環境探求領域には、生活表現（小1～小3）→人間と環境（小4・5）→社会科、理科、技術・家庭科（小6～中3）を配置
- ・数理表現領域には算数・数学科（小1～中3）を配置
- ・幼稚園（3～5歳）には健康、表現、言葉、人間関係、環境を配置

＜表2＞をみると、大きく3つのタイプの研究開発内容の特質が認められることであろう。一つは、教科、道徳、特別活動より成る現行の教育課程を全面的に再編し直そうとする試みである。そして、その過程で新教科や新領域が開発されている。学校でいえば、福島大学附属小、愛媛大学附属小、大手町小、神戸大学附属明石小／中の試みが該当する。なお、以下では、これを＜Aタイプ型＞と仮称することにする。

二つ目は、一方で教科や領域を新設しつつ、他方では、現行の教科等の枠組みを維持しつつ、その内容の見直しを図りながら教育課程の再編を目指そうとする試みである。学校でいえば、錦華小、福岡教育大学附属福岡小、函南町立東小／中の試みが該当しよう。以下では＜Bタイプ型＞と仮称する。

三つ目は、現行の各教科、道徳、特別活動より成る教育課程の枠組みを維持しながらも、それぞれの内容の見直し、再編を目指そうとする試みである。横浜国立大学附属横浜小の試みが該当する。以下では＜Cタイプ型＞と仮称する。

### 3 現行の教育課程の問題点の捉え方をめぐって

それではいったい、各研究開発学校においては、何故に現行の教育課程の改善を求めようとしたのであろうか。何を問題と捉え、どのように解決していこうとしたのであろうか。各タイプ別にみると、何らかの顕著な違いがあるのだろうか。

各学校の実施報告書から、これらの点に関する特質を（1）教育目標レベル、（2）教育課程レベルという2つの視点から抜き出し、各タイプ別に整理して一覧したのが、以下の＜表3～5＞である。

#### （1）Aタイプの研究開発にみられる特質

Aタイプに属する学校にみられる特質を一覧したのが、次の＜表3＞である。

表3 Aタイプにおける教育課程の問題点の捉え方

| （1）教育目標レベル<br>＜問題点＞   | ＜解決の方向＞  |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・現行のカリキュラムは、益々内容が肥大化複雑化し、学校内外の活動時間に余裕がない。</li> <li>・一方、家庭・地域・現代社会が抱える諸問題の増加や社会の要請の変化とともに、教育現場が抱える諸問題が増え</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・対症療法的にはなく、今後の学校教育の役割を一層明確にし、今後の学校のあるべき姿やそこでの学び方の在り方、育成すべき力等を見つめ直していく</li> <li>・学力を、学習によって獲得した「知識・理解や技能」だけでなく、学習過程で駆</li> </ul> |

続けている

- 使される思考力、判断力、表現力などの諸能力に加え、人間として命の尊さやものの大切さ、美しさを感じ取ったり、相手を思いやったりしながら共に生きようとする「心の有り様」をも考えていく
- ・教育目標を「未来の可能性にたちむかって、愛と英知をもち、たくましく前進する創造性豊かな人間の創造」とする
  - ・求める子ども像
  - 人間が生きる環境としての地球（宇宙）そのものの望ましい姿を求める人間
  - 地球に生きる人間として、隣人を愛し、世界の人々を愛する心を持ち、互いに理解を深め合い、共に生きようとする人間
  - 体を鍛え、健康で安全な生活をしようとする人間
  - 人間として、自分なりの思いをしっかりと持ち、豊かに表現することができる人間
  - 言語・数量・図形を理解し、情報を正しく捉え豊かに活用することができる人間

(2) 教育課程レベル

<問題点>

- ・現行の各教科の枠組みは、細分化されすぎており、また、教科の内容は、大人の学問体系から小学校段階にそのまま下りてきておりその量も多い。
- ・これまでの特別活動では、学校行事の拡大、クラブ活動の多様化など、内容が肥大化。また、「子供の自主的・実践的態度を養う」という目標に対して、教師が子供の活動に大きく関与している実態も否めない。さらに、全学年に学級活動を、上学年ではさらにクラブ活動を位置付けた特別活動は、年間の活動内容を管理する上でも、問題を抱えている。

<解決の方向>

- ・教科等の構成を見直し、教育内容や豊かな学びの力・基礎学力の見直しによる日々の充実した授業等の実践
- ①指導内容の精選・重点化を図ること
- ②学習時間の弾力化と日課表の工夫を図ること
- ③子供の立場から学習方法や支援を吟味し日々の授業の充実を図ること

(1) 教育目標レベル

<問題点>

- ・従来の学校は基本的には現在の近代的な産業社会国家に適應するために必要な知識や技能などの、客観的に測定可能な、実体的・獲得的な「見える学力」に目を奪われてきた。
- ・子どもを未熟で大人の未完態であるにとらえ、子どもを一人前の大人にしていく特殊な場所で、教科等に分断された教育的価値を画一的・均質的に教える構図で授業が展開された。
- ・そして、その教育的価値の到達・達成基準をもとに個々の子どもの学習成果を量的に位置づけ、より到達・達成基

<解決の方向>

- ・子どもも教師もともに学び続ける人間同士であり、その関係も「教え合い一学び合う」という相互主体的な関係を中心とした「ともに生きる関係にある
- ・子どもたちの課題意識の連続・発展を保障するためには、子どもたちに総合的な学びの経験が成立する学校にしたい。そうすれば、知識や技能などの質的深化とともに、生活と学習の一体化・総合化が可能になると考えた。
- ・主観的ではあるが、子どもを人間としてトータルにとらえるために、客観的な測定は難しいが学ぼうとする力「学

|            |  |   |
|------------|--|---|
| 校          | <p>準に近づけようとするのが学校教育の構図であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>断片的な知識や技能などが量的に拡大されるにつれ、生活と学習の文節化・分極化が起こってきた。</li> </ul>  | <p>んでいく学力」を含む機能的・生成的な「見えない学力」を特に重視したいそれは環境や他者への感受力、直感（観）力、共感力という感性にかかわる力や理解力、判断力、思考力という理性にかかわる力などを統合したものであり、実践的には「かかわり合う力（相互作用力）」と考えている。なお、これらの学力要素は「身体性」（生理的・意味的身体性）に基づいて発揮され、学習活動を推進する「問題解決力とともに学習活動を制御・強化する「自己評価力」として具体的に機能するものである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>他方、「見える学力」としての知識・技能などの内容は無視するのではなく学習指導の到達目標ではなく、「ガイドライン」的な意味合いで別に「身に付けさせたい内容及び対象」として仮説したい。</li> </ul> |
|            | <p>(2) 教育課程レベル<br/>＜問題点＞</p>   | <p>＜解決の方向＞</p>  |
| 上越市立大手町小学校 | <p>(1) 教育目標レベル<br/>＜問題点＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自分の考えで選択し進んで活動する姿が、なかなか見られない。</li> <li>教師から指示されたり方向を示されたりしないと活動を始められない。</li> <li>学習することが増え、時間のない多忙な学校生活を送っている。</li> <li>様々な行事や活動の企画・運営に当たり、高学年の子どもの負担が大きい。</li> <li>人間的なふれあいが不足していて、いじめや不登校の子どもがいる。</li> <li>同級生との交流は見られるが、異学年の子どもなど学級以外の人との交流はとて少ない。</li> </ul> | <p>＜解決の方向＞<br/>＜自分を開発し続ける子ども＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自立：自分自身を取り巻く環境を知り、自分の思いや願い、考えを自らの力で実現する資質・能力</li> <li>創造：自らの感性を磨き、獲得した知識・技能を活用したり体系付けたりして、自分のもつ可能性を高める資質・能力</li> <li>共生：ものや人と相互にかかわり、それらを受け入れるとともに、自分を鍛え伸ばしながら互いの調和を保ち生きる資質・能力</li> </ul>  |
|            | <p>(2) 教育課程レベル<br/>＜問題点＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>子どもが主体的に取り組む指導過程となりにくい内容がある。</li> <li>内容が多く、個を生かす十分な時間や場の確保ができない状況にある。</li> <li>様々な社会的な要請を受けて、内容が肥大化してきている。</li> <li>行事を企画運営する高学年の負担が増え、高学年の活動の保証が難しい。</li> <li>異学年との人間関係対応能力を育てる</li> </ul>   | <p>＜解決の方向＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>問題解決能力の育成</li> <li>人間関係対応能力の育成</li> <li>道徳的な実践力の向上<br/>そして、この方向の過程で</li> <li>体験的な活動の重視</li> <li>内容の厳選</li> <li>教科等の見直し</li> <li>様々な評価に基づく検討</li> </ul>  |



|              |   |   |
|--------------|---|---|
|              | 場が不足している。<br>・心の教育が具体的な実践力にまで結び付いていない。  |   |
| 神戸大学附属明石小中学校 | (1) 教育目標レベル<br>＜問題点＞<br>・今日の社会環境の急激な変動や子どもの心身の発達の高さ、家庭や社会における教育の価値観の変化などに対応できない | ＜解決の方向＞<br>・子ども自らが進んで考え、判断し、表現・行動していきける豊かで創造的な能力や資質→「自己形成力」の育成        |
|              | (2) 教育課程レベル<br>＜問題点＞  | ＜解決の方向＞<br>・現在の幼稚園3か年→小学校6か年→中学校3か年という既成の校種枠や教科・領域枠を越えた12か年一貫の教育課程の構想 |

4校の指摘をみると、教育目標レベル、教育課程レベルにおいて、それぞれにニュアンスの若干の違いがあるものの、そこには比較的共通な問題意識なり、解決方向が示されているように思われることであろう。

すなわち、教育目標レベルでは、従来の学校教育が果たしてきた任務が飽和、ないし行き詰まり状態にあるといった共通の問題意識が提出されているように思われる。従来の学校は近代化の要請から測定可能な、より多くの知識・技能の量的獲得をめざし（愛媛大学附属小）、このため、内容がますます肥大化・複雑化し、ゆとりがなくなり、様々な教育問題や家庭・社会問題が続出している（福島大学附属小）。これを子どもサイドからみれば、生活と学習とが乖離し（愛媛大学附属小）、さらには、自分で物事を選べず、被指示的行動しかできない受動的な学校生活、おまけに時間的に余裕のない多忙な、また、人間的なふれあいの不足する学校生活をやむなくされている（大手町小）。そして、このようでは今後の社会・時代に備えた教育は期待できないのではないかという懸念を、神戸大学附属明石小・中は提出しているように思われる。

これを教育課程レベルでみると、福島大学附属小は、その大きな問題点として、現行の教科が学問体系を基に細分化されている点をあげている。他方、大手町小は、だからといわんばかりに、それらの内容が、子どもが学習する過程や時間を保証できるように編成されていないのではないかといった問題点を指摘している。

このため、解決の方向をみると、同様に、共通の傾向がみられる。すなわち、福島大学附属小では、子どもが知識・理解のみならず、思考力・判断力といった高次知的技能及び情操面において豊かに調和的に発達できるような学校のあり方—そのために、現行の教科等の構成を全面的に見直す構想を提出している。愛媛大学附属小は、このような子どもの統合的な姿を「見えない学力」と呼び、大手町小は「自分を開発し続ける子ども」と呼び、神戸大学附属明石小・中は「自己形成力」と呼び、その実現に向け、現行教育課程の全面的再編の方向を提出している。

## (2) Bタイプの研究開発にみられる特質

次に、Bタイプに属する学校にみられる特質を一覧したのが、次の<表4>である。

表4 Bタイプにおける教育課程の問題点の捉え方

|       |   |   |                               |   |
|-------|---|---|-------------------------------|---|
| 錦華小学校 | <p>(1) 教育目標レベル<br/>         &lt;問題点&gt;</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>知識を記憶させ技能を身に付けさせようとするだけの学習では、生涯を通しての基礎となる学力を養うことはできない。従って基礎的な学力の捉えかたも、基本からの見直しが必要になってくる。</li> <li>未来の社会は自国の営利を求めることのみでは成り立たず、現在以上に、いろいろな面で国々の交流は盛んになり、人々は自国に誇りを持ちながら他国を認めていくことが大切になってくる</li> </ul> | <p>&lt;解決の方向&gt;</p>          | <ul style="list-style-type: none"> <li>そのような社会にあって、人が常に忘れてはならないのは、他人を認め、他人と協調しながら生活を築いていこうとする態度である。その上で児童一人一人が自己の能力と特性を発揮し、主体的に社会に貢献しながら自らの生活を切り開き、豊かで価値ある生涯を送る。更に、自分たちの生活の基盤である地域を、国を愛する心を持ち、その上に立って国どうしの理解を深めていこうとする態度を身に付けさせる必要がある。そのためには、小学校、中学校を通して、先ず、児童に、目的と場に即した豊かで確かな判断力・思考力を養い、次には、相手を尊重しながら自分の気持ちや考えを伝えることのできる的確な表現力と、意欲的な実践力を育てることが大切である。</li> <li>基礎的な学力を「課題を解決することによって身に付けた知識や技能」に留まらず、「国際社会の中で、人間として豊かに生きるために必要な力」と捉える。</li> </ul> |
|       | <p>(2) 教育課程レベル<br/>         &lt;問題点&gt;</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>現行の教科による指導では、現在、問題点として捉えている「机上の学習」の域を出ず、真に「生きる力」としての学力は育成できない。「人間が豊かに生きるためには、今後どのような力が必要であるか」ということや、「何を目標に学習し、生活とどのようなつながりがあるか」ということが学ぶ側の児童に明確に把握されにくいからである。</li> </ul>                            | <p>&lt;解決の方向&gt;</p>          | <ul style="list-style-type: none"> <li>そこで、既存の教科、領域を見直し7教科1領域の設定を試みる。</li> <li>「自己を高め、豊かな生活を築くための力を培い」意欲的に学習を進めるためには、日常の生活に近い教科で学習させることが有効であると考え。教科設定の視点は、あくまで「学習の主体者である児童を中心とした学習の体系」でありたいと考えた。</li> </ul>   |
| 福岡教育大 | <p>(1) 教育目標レベル<br/>         &lt;問題点&gt;</p> | <p>&lt;解決の方向&gt;</p>  | <p>&lt;21世紀社会と望まれる人間像&gt;</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>社会や自然に積極的に働きかけ、地球市民として考え、行動できる人間</li> <li>自分自身の価値観を確かにし、自分らしい生きかたを創りだしていく人間</li> <li>目標に向かって、自分の考えや働きかけ方を、共に創造できる人間</li> <li>情報を的確に処理、判断し、活用できる人間</li> </ul>   |

|  |  |   |
|--|--|---|
| 学<br>附<br>属<br>福<br>岡<br>小<br>学<br>校                     |  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・心身ともに健康で、生涯学び続けていこうとする人間</li> <li>＜豊かな学力の構造＞</li> <li>・「豊かな心」：中核をなす内層</li> <li>・中層としての「鋭い感受性」「柔軟な思考力」「的確な判断力」「豊かな表現力」「積極的な行動力・実践力」</li> <li>・外層としての「生きて働く知識・技能」</li> </ul>  |
|  | <p>(2) 教育課程レベル</p> <p>＜問題点＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「子供主体の活動からみる教育課程の編成」という副主題からみると、具体的な活動や体験は方法論的な取り入れ方にとどまっている。体験を組み込むには、子供の活動において、ゆとりが必要で学習の時間が保証されていない。指導内容を新しく組織し、具体的な活動や体験を保證できる教育課程編成を行う事が大切</li> </ul> | <p>＜解決の方向＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現行教育課程における教育目標や指導内容を見直し、新しい目標をもった新教科、新設教科（生活環境科、表現科）、新設領域（領域「人間」）を設定していく</li> <li>・子供の能力差や個性、価値観の多様さに応じて、一人一人の子供が自己表現を図っていくための教育課程及びそれを具体化していく指導方法を研究する</li> <li>・学校週5日制を想定し、指導内容を組織していく観点を独自の設定し、年間授業時数の削減を図っていく観点（教科編成の見直し、関連指導の在り方）を検討する</li> </ul>   |
| 静<br>岡<br>函<br>南<br>町<br>立<br>東<br>小<br>・<br>中<br>学<br>校 | <p>(1) 教育目標レベル</p> <p>＜問題点＞</p>  | <p>＜解決の方向＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・＜独り立ちのできる子＞：他者との関わりほ中で「自ら課題をつかみ、それを自らの方法で意欲的、継続的にやりぬく力と、他を思いやり、ともによりよく高め合おうとする態度」を身につけた子の育成</li> <li>・＜独り立ちのできる力＞</li> <li>①自ら学ぶ意欲を育て、主体的な学習が進められるようにすること（自ら学ぶ意欲）</li> <li>②他者と積極的な交流を通して思いやりの心を育て、充実した集団生活が過ごせるようになること（思いやり）</li> <li>③相手の気持ちを考えながら、豊かな心情に支えられ、的確に自己表現する力を育て、積極的なコミュニケーションが図れるようにすること（表現力）</li> <li>④道を立てて考える力を育て、子供なりの論理を大切にさせ、創造性の基礎を養えるようにすること（論理的な思考力）</li> <li>⑤自己のよさを生かし、自分の力で学習し続ける力を育てること（課題追求力）</li> </ul> |
|  | <p>(2) 教育課程レベル</p> <p>＜問題点＞</p>  | <p>＜解決の方向＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小・中学校教育の中に、総合的な活動領域として「生活交流」を設定する</li> <li>・独り立ちのできる力を育てる教育課程を各教科、道徳、生活交流の3領域で構成する</li> </ul>  |

教育目標レベルでの問題点の指摘がみられるのは、錦華小である。しかも、内容的には、既述のAタイプの学校に関連して検討されたのとほぼ類似の指摘がみられる。すなわち、同小は、一方では今日の生活から遊離した記憶的な知識・技能中心の学力観の見直しを、

他方では今後の国際化社会への移行を視野に入れた教育の充実の必要を指摘しながら、今後は、両者を満足させるべく、いうなれば“新たな”基礎的な学力として問題解決的な知識・技能及び国際的に生活できる力を育てる必要を提案している。そして、このため、「学ぶ子どもの生活」を基盤として現行の教科、領域を見直すとともに、必要に応じては新たな教科も創造するといった方向を提案している。

他方、福岡教育大学附属福岡小及び東小・中は、教育目標レベルの問題点の指摘はないものの、その解決の方向においては、それぞれ<21世紀社会に向けた人間の育成>、<独り立ちのできる子の育成>を求め、内容的には錦華小とほぼ類似の方向を提出している。

しかし、教育課程の解決方向は、錦華小とはやや異なり、福岡教育大学附属福岡小は「具体的な活動や体験」を保証するという視点から、東小・中は「独り立ちのできる力」の育成という視点から、それぞれ現行の教科、領域を見直すとともに、必要に応じて新たな教科なり領域を創造するという提案をしている。

### (3) Cタイプの研究開発にみられる特質

次に、Cタイプに属する学校、すなわち横浜国立大学教育人間科学部附属横浜小にみられる特質を一覧したのが、次の<表5>である。

表5 Cタイプにおける教育課程の問題点の捉え方

| 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜小学校                          |  |
|---|--|
| <p>(1) 教育目標レベル<br/>           &lt;問題点&gt;</p> | <p style="text-align: center;">&lt;解決の方向&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本校では、「共に学びをつくり上げる力」を「どの子にも共通して育てたい力」＝「学力」として位置づけている。「共に学びをつくり上げる力」は「自己決定力」「自己責任能力」「かかわり合う力」の三つを合わせた力である。</li> <li>*自己決定力：子どもが自分の意思をもって学習を決めていくことのできる力</li> <li>*自己責任能力：一度決定したならば、安易にそれを変えることなく、自分の学習を高めていこうとすることのできる力</li> <li>*かかわり合う力：自他ともによりよく生きようとして、自分から相手の働きかけを受け止めたり、自分から必要として相手に働きかけたりする力であり、さらに、そのよさを共感して自分の中に取り入れたり、教え合ったりしながら学習をすすめる、その過程において、他者を自分と同じような大切な存在として認め、他者からも認められているという実感をもつことができる力</li> </ul> |
| <p>(2) 教育課程レベル<br/>           &lt;問題点&gt;</p> | <p style="text-align: center;">&lt;解決の方向&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現行の学習指導要領の教科・道徳・特別活動の枠、時間の枠を崩さずに、各教科・道徳・特別活動の中で、縦断的な指導内容の見直しに取り組む。したがって、教科の統合・</li> </ul>   |

再編については考えず現行の教科の枠組みの中で児童がどのように学習を広げていくか見定め、児童の自律的な学習を保証するための学習展開のあり方を模索するとともに、それに伴う指導内容と教育課程の検討に取り組む。

このため、当初は、その研究の過程において、教科関連や教科横断的な可能性も探ることもなされたが、しかし、学習における子どもの思考の流れを大切にA教科からB教科へを横断しようとしても「この内容はA教科にはよいが、B教科では違う学年で指導するので横断はできない」または「同じ学年ではあるが、扱う時期が異なる」「横断は可能だが、これではB教科でおさえるべき内容を総て網羅できない場合がある」などの意見が交わされることもあった。また、現行の指導内容を削減する時にも、その根拠を明らかにすることも難しかった。そこで、本校では、学校で育てる力を問い直し、指導内容そのものを子どもの必然性から見直すために、育てたい力を中心としたものにしていく必要があると考えた。

表中からうかがえるように、附属横浜小の問題意識は、これまでの7校の場合とは異なっている。すなわち、同小は、現行の教科、道徳、特別活動の枠、時間の枠を崩さずに、指導内容の見直しを進めるという前提を明らかにしている（教育課程レベルの解決の方向参照）。そして、その見直しの視点を、同校で育てたい力＝すなわち、「共に学びをつくりあげる力」（「自己決定力」「自己責任能力」「かかわり合う力」）に求めようとしたことが指摘されている。この見直しの視点は、内容的には、やや態度面中心に描かれており、既述の7校の場合とは趣を異にしているといえよう。

#### 4 教育課程の再編の原理をめぐって

次に、各研究開発学校においては、現行の教育課程を再編ないし見直しを進めていこうとする際に、いったいどのような再編原理を採用したのであろうか。どのような考え方を基本にしながら新たな教育課程を構想していこうとしたのであろうか。各タイプ別にみて、何らかの顕著な違いがあるだろうか。

これらの点に関する特質を抜き出し、各タイプ別に整理して一覧したのが、以下の<表6～8>である。

##### (1) Aタイプの研究開発学校にみられる特質

Aタイプに属する学校にみられる特質を一覧したのが、次の<表6>である。

表6 Aタイプにおける教育課程再編の原理

##### (1) 各教科と道徳より成る新しい領域の構想

私たちは、「教科の学習の中でこそ、自主的・実践的な態度の育成を図る」という考え方に立ち、特別活動を発展的に解消し、子供自身が自ら活動し体験する新しい教科の学習を通して、「社会の変化に主体的に対応しながら生きていく人間を育成していく新たな教育課程を構想する」ことにした。

また、物が豊かになる一方で、心の貧しさが叫ばれ、心の有り様が問われている時代に子供たちは生きている。だからこそ、学校教育全体を通じた道徳教育を一層

充実させ、各教科の学習を通して養われる道徳性を、補充・深化・統合する道徳の時間を位置付けていく必要があると考えた。

(2) 新しい教科の構成

私たちは、小学校段階においては、もっと子供の学習の筋道や認識の深まりを大切に学習になっていかなければならないと考え、求める人間像をもとにして、教科を構想することにした。

- 人間が生きる環境としての地球(宇宙)そのものの望ましい姿を求める人間 → 低学年では生活科、中・高学では地球科
- 地球に生きる人間として、隣人を愛し、世界の人々を愛する心を持ち、互いに理解を深め合い、共に生きようとする人間 → 低学年では生活科、中・高学では人間科
- 体を鍛え、健康で安全な生活をしようとする人間 → 全学年に表現科
- 人間として、自分なりの思いをしっかりと持ち、豊かに表現することができる人間 → 全学年に体育科
- 言語・数量・図形を理解し、情報を正しく捉え豊かに活用することができる人間 → 全学年に国語科と算数科

(3) 指導内容の精選・重点化

- ①教科でこそ獲得させていきたい知識・技能と心豊かな人間として身に付けさせたい諸能力を一体的に学べるようにする
- ②小一中の連携を図り、「これだけは教えたいたい」という内容を精選する
- ③体験を通して自分なりに問題をゆとりをもって活動できる内容を吟味する

(4) 自主的・実践的な学びの重視

子供たちにとって、教師から一方的に知識や技能を受け取るのではなく、学ぶ意欲をもち、自ら計画し、納得のいくまでたっぷりと学ぶことが大切である。

- ①内面性をより重視した多様な学習展開
  - ・体験的学習の重視
  - ・問題意識の連続化を図る大単元の展開
  - ・学習コースの選択の幅の拡大
  - ・話し合い活動や集団思考の場を取り入れた多様な学習活動の展開
- ②子どもの側に立つ教師の支援と人的・物的環境の充実
  - ・基礎的・基本的な内容の明確化
  - ・個に応じた指示、助言、励まし、方向付け
  - ・大単元構想に基づき、長い目で子供の学習の連続性、発展性を見守る支援の在り方
  - ・子どもの主体的な学習を促す環境づくり

(5) 学習時間の弾力化と日課表の工夫

- ①子供たちがゆとりを持って学べるような学習時間、学習空間を保障する。
- ②1単位時間については、低学年では、各教科の学習時間を45分～90分と幅を持たせると同時に、学習中の子供の意欲の持続や内容の量によっては、25分～40分で終了する。中・高学年でも、必要な学習時間を45分～90分と幅をもたせ、必要に応じて100分として扱うなど弾力化している。
- ③ノーチャーム制の導入
- ④日課表の工夫

(1) とともに生きる〈場〉を報奨する柔軟で弾力的な教育課程

- ・教育課程は単なる教師にとっての「指導計画」というような意味ではなく、あくまで「子どもにとって意味や価値ある学びの経験の総体」という意味でとらえたい。教師側の「指導計画」は、「子どもにとって意味や価値ある学びの経

験」を成立させるためのガイドラインであり作業仮説である。

- ・具体的には、本校が従来より実施してきた「総合学習」（子どもにとって現実的・必然的な課題を問題解決的に追究する学習）の趣旨を生かし、教科等の領域に代わる「教育課程のゆるやかな枠組み」を設定する。

(2) 学ぶ喜びを味わい、創造した文化を共有する学習構造

客観的な知識や技能などを段階的に指導する過程を構成した「内容単元」から従来ともすると手段化されがちであった子どもたちの関心・意欲や問題解決的な動及び直接的な体験などを中核とした学習材や他者とのかかわり合いを構想した「活動単元」への転換を図る。

(3) 「活動単元」を中核とした教育課程の開発

- ①教科等の枠組みを廃し、子どもたちの人間本来の学びである〈自己活動＝自己評価〉がかかわる“対象”と“かかわり方”という点から、〈環境とのかかわり〉〈文化とのかかわり〉〈人間とのかかわり〉の3つの基本的な視点を設定し、ここから、9つの具体的な視点（内容）を設定し、これを縦軸（スコープ）とする

- ・〈環境とのかかわり〉：自然、社会
- ・〈文化とのかかわり〉：ことば、数理、音楽、造形、運動、くらし
- ・〈人間とのかかわり〉：ひと

②「子どもの発達」からのアプローチ

子どもの「かかわり合う活動」を分析・類型化し（活動の類型）、その結果、8つの「学習領域」と「みんなの時間」を設定し、これを横軸（シーケンス）とする。

なお、その際、〈発達〉という概念を、従来のように、未完態の子どもが既成の社会的・文化的適応者、つまり完態としての大人を到達目標として、一つ一つのステップを上がっていく過程と考えずに、個々の子どもたちが見せてくれる発達の状況を大まかに束ね、その学年の発達の傾向を「発達特性」としてとらえ、・・それらを1学年から6学年までの大まかに系統付け、低（1・2）—中（3・4）—高（5・6）の「発達の系列」として表す。

この結果、8つの「学習領域」と「みんなの時間」を次のように設定する

- ・しらべの学習（低）→調べの学習（中）→調査研究の学習（高）
- ・たんけんの学習（低）→冒険の学習（中・高）
- ・そだての学習（低・中）→育ての学習（高）
- ・はたらく学習（低・中）→働く学習（高）
- ・そうぞうの学習（低・中）→創造の学習（高）
- ・ならいの学習（低・中）→習いの学習（高）
- ・うんどうの学習（低）→運動の学習（中・高）
- ・こうりゅうの学習（低・中）→交流の学習（高）
- ・みんなの時間（低・中・高）

- ④どちらかといえば、横軸を優位にしながら、縦軸でその意味を確定していくという原則に基づき、両者の交叉するところに「活動単元」を構想する。

- ⑤「活動単元」の学習活動は、大きく「課題発生・設定」→「課題追究」→「課題解決・発展」と考える。

(4) 「みんなの時間」の設定（上掲）

学校行事や児童会集会活動・委員会活動を可能な限り「活動単元」に組み込み（年間160時間＝月2週の土曜日の70時間＋朝の時間90時間）、そして組み込まれない部分を「みんなの時間」として実施。

(5) 授業時数と時間割の工夫

- ①週5日制を前提  
②ブロック制の採用、及びノーチャイム制、1ヶ月毎の時間割作成委員会で調整

|  |   |
|--|---|
|  | <p>する変動時間割制とする。</p> <p>(6) 多様なT Tの採用</p>  |
| <p>上<br/>越<br/>市<br/>立<br/>大<br/>手<br/>町<br/>小<br/>学<br/>校</p>                   | <p>(1) 「単元群」による教育課程の編成<br/>「教科」とは、教育の目標を達成するために組織された教育内容のまとまりを意味する。これに対して、「単元」とは、子どもが自分の思いや願いの実現を目指し、自ら追求する学習活動のひとまとまりのことである。このような単元の集合体を「単元群」と呼ぶことにした。</p> <p>(2) 現行の内容を、「統合」「関連」「重点化」によって単元群に再編する<br/>①統合：同じ視点からとらえることができるいくつかの内容を、より学習効果を上げるために一つに統合して扱い、新しい活動を組織する。<br/>②関連：内容や性格が異なる教科、領域であっても、さらに学習効果を上げるために、そこに含まれるいくつかの内容を関連させて組織する。<br/>③重点化：系統的な知識や技能の集積が求められるもの、抽象的・科学的な世界の認識を育てる土台となる内容を集約し、構成する。</p> <p>(3) 年間指導計画作成上の手順<br/>①単元群の目標、期待する資質・能力、子どもの発達特性などを考慮し、活動内容と教材を決める。<br/>②子どもの意識の流れや内容の系統性を大切にして、単元の配列と実施時期を決める。この時、他単元群の内容と関連させた単元開発が可能か見極める。<br/>③実施時期と活動内容を基に、授業時間数を決める。<br/>④単元群の特徴を踏まえ、・・・指導過程と扱う教材など、各単元の学習活動を構想する。<br/>⑤実践を基に評価し、指導計画を改善する。</p> |
| <p>神<br/>戸<br/>大<br/>学<br/>附<br/>属<br/>明<br/>石<br/>小<br/>・<br/>中<br/>学<br/>校</p> | <p>(1) 4つの学習領域の設定<br/>「社会及び教育の現代的な課題」という視点に基づき、「身体健康領域」「心の表現領域」「環境探求領域」「数理表現領域」という学習領域を設定。そして、これらの各領域の「目指す能力」、「能力基準表」、活動や内容の指針となる「学習要素一覧表」及び各学年の年間「単元原案一覧表」を作成する。</p> <p>(2) 学年区分の構想<br/>子どもの認識や諸能力の発達的特質から、12か年を大きく「前期」（幼・3年）と「後期」（小・4—中・3年）に二分する教育課程を編成する。</p> <p>(3) 学習指導の展開工夫<br/>①体験活動、主体的活動、問題解決学習の重視<br/>②個に応じた学びのスタイルの重視<br/>③生活のなかに生きて働く知恵の獲得<br/>④生涯学び続けていくための学び方の獲得<br/>⑤地域の人材、施設との交流の促進<br/>⑥生活の場としての学校をめざした時間割、支援体制、学習形態の刷新</p>  |

表中からうかがえるように、現行の教育課程の問題点や解決の方向に共通傾向のみられた4校ではあるが（前節（1）参照）、そのために採用した教育課程再編の原理に関しては、4校4様である。

すなわち、福島大学附属小は、「教科」という概念は使用するものの、従来の学問体系を基にした枠組みを廃し、むしろ“求める人間像”のまとまり（5側面）をベースに新た



な教科を構想しようとしている。そして、現行で問題点が指摘されていた特別活動（前節（1）参照）も、これらの新教科の中に発展的に解消されることになっている。他方、「道徳」は新教科で養われる道徳性を補充・深化・統合する時間として、一層の充実が図られることになっている。

しかも、各新教科の内容は、精選するとともに、子供の問題意識の連続化を図るために「大単元」編成にする。また、低（1・2）→中・高（3～6）の発達特性を考慮して、時間の弾力的運用のできる編成がめざされている。

そして、実際の学習指導においては、体験的な学習、集団的な学習及び個に応じた指導、ノーチャイム制等に努めることが提案されている。

愛媛大学附属小は、教育課程を「子どもの価値ある経験の総体」と考え、この「経験」（子どもと対象とのかかわり）をもとに、スコープとして＜環境＞＜文化＞＜人間＞を設け計9つの視点（内容）が抽出されている。しかも、週5日制に対応できるよう構想することがめざされている。他方、子どもの＜かかわり合う活動＞を基に8つの「学習領域」と「みんなの時間（自由裁量・学校行事等）」を設定し、それぞれの内部を、子どもの発達特性に応じて低（1・2）→中（3・4）→高（5・6）ごとに、上記9つの内容を系統化（シーケンス）していこうとしている。

また、各領域・時間に配置される内容は、従来の「内容単元」ではなく、子どもの問題解決活動を意図する「活動単元」編成にする。そして、学習指導に関連して、時間のブロック制、ノーチャイム制のもとで、TTによる、「課題発生・設定」→「課題追究」→「課題解決・発展」といった学習展開が提案されている。

上越市立大手町小は、現行の教科内容を、「統合」「関連」「重点化」なる方針の基に再編し、これらの内容を、子どもの願い追究活動の一まとまりとしての「単元群」とする教育課程の再構成を提案している。そして、各単元群における年間指導計画作成上の留意事項を5点にわたって提案している。

神戸大学附属明石小・中は、幼一小一中の12ヶ年一貫の新カリキュラムと構想しようとして、12ヶ年を視野に入れたスコープとして、「社会及び教育の現代的な課題」という視点から4つの学習領域（「身体健康」「心の表現」「環境探求」「数理表現」）を提出し、各領域内をそれぞれ、「目指す能力」→「能力基準表」→「（活動や内容の指針としての）学習要素一覧」→「単元原案一覧」の作成をめざしている。

他方では、これらの内容を、子どもの認識や諸能力の発達の研究を進め、12ヶ年を大きく、「前期教育」（幼～小3）→「後期教育」（小4～中3）に二分して編成し配置する構想がみられる。

また、学習指導に関連して、体験活動・問題解決学習の重視、個に応じた指導の重視、地域の人材・施設との交流、時間割の工夫等が提出されている。

## （2）Bタイプの研究開発学校にみられる特質

次に、Bタイプに属する学校にみられる特質を一覧したのが、次の＜表7＞である。

表7 Bタイプにおける教育課程再編の原理

|                 |
|-----------------|
| （1）既存の教科、領域の見直し |
|-----------------|

児童の実態を基に、学習指導要領と本校で加えたいと考えた指導内容を合わせて分析し、系統化した結果、言語、数量、体育の外に「自立する力」「命を大切にしたい」としての人を思いやる人間愛の精神」「自己を適切に表現する力」「環境に対する理解を深め保身に努めようとする態度」が共通理解された。この結果、

- ①国語科、算数科、体育科、特別活動は、ほぼ現行通り。
- ②平成4年度から実施の学習指導要領でも、その指導が協調されている「生活」「表現」「人間」「環境」のねらいや内容を4つの新教科として設定し、発達段階に沿った系統的な指導を行う。

(2) 学習指導上の留意点

- ①児童が、自分の力で課題を設定し、思考の流れを重視した学習過程と内容を工夫しながら課題を追求することのできる指導法の実現。このために、教育課程全体を見通して、指導内容の系統性、関連性を理解しやすいカリキュラムマトリックスを作成し、児童の思考を大切にしたい指導計画と指導方法を工夫する(いわゆる教科間関連指導=筆者註)。  
 その際、特に配慮すべきは
  - ・季節の変化や特徴、地域や学校の行事と指導内容との関連を考えること
  - ・他教科・領域間の関連性のある単元や教材、指導内容を同時期に配列する
- ②児童が意欲をもって発展的に学習を進めていくことができる教材を開発する教科書、副読本、図書、ビデオなどの既成のものだけにたよらず、児童、教師の創作や広く地域の人々にも協力を求め、生きた教材の開発を心がける。
- ③児童の学習に、体験を重視した活動を多く取り入れる。

(1) 蛸谷米司監修『新学力と学習』の教科構成論を基に、子供がもの、人、ことを認知していく活動に対応させて教科を設定。すなわち、

- ①具体的な感覚活動→生活科、理科、生活環境科、社会科、家庭科
- ②抽象的思考活動→算数科、国語科
- ③表現的活動→表現科、図画工作科、音楽科、体育科
- ④教科全体を支え、総合的に人としての在り方、生き方を考える領域としての「人間」

註：

<表現科>

- ・低学年の新設教科。
- ・生活科とともにすべての教科に生きてはたらく心と能力、態度の基礎を養

<生活環境科>

- ・低学年の生活科から、中学年に新設の教科

<領域「人間」>

- ・「人間の生き方・在り方」という心の教育の中核を担う道徳の時間と特別動(特に学級活動)との一体化を図った総合的な学習

(2) 教育的価値ある活動から内容を考える

「活動することによって学ぶ」ことを学習の基本とし「活動することが学習の内容である」ととらえている。自分で活動し、自分で感じたことや考えたことを大切にしながら、働きかけた対象や自分の働きかけそのものに価値を見出し、学習の喜びと自分の成長を自覚していく。このような子供主体の活動から教育課程を編成していく。

(1) 研究対象学年を小学校5、6学年、中学校1学年(小中移行期)とする。

<小・中移行期の発達課題のとらえ>

- ①問題解決能力の育成：論理的思考力、抽象的な関係把握の発達が顕著なので、筋道を立てて考え、論理を構成するための類推的、帰納的、演繹的思考に慣れさせる
- ②内面の強化：情緒の内面化が強まり、社会的存在としての自我に目覚め、共感

能力が高まる。他者（人・自然・社会）とのかかわり、特に、様々な立場の人々との積極的な交流を通し、他人の立場に立って感じ、考え、行動できるような生き方を育てる。

- ③ 自発性の育成：心理的離乳が始まり、自主性が高まってくる時期であり、個人差も拡大されてくるので、自分のもっているよさを発見させるとともに、それを一層伸ばしていける機会と場を設定していくこと。
- ④ 社会性・コミュニケーションの能力の育成：集団意識が高まり、役割意識が強まってくるので、価値ある存在としての自分に気付かせ、他者に対して積極的にかかわっていける基礎的な資質やコミュニケーション能力を育てていくこと

(2) 教育課程の全体像を「学習内容」と「学習形態」の2面から構想する

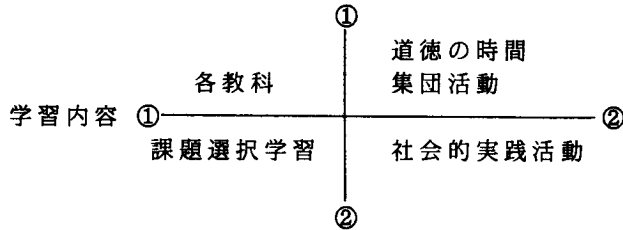
・「学習内容」については、

- ① 論理的な順序をたどって、客観的な知識・概念・法則の習得や発展、科学的な態度の育成を図ろうとする学習内容
- ② 集団的・社会的諸能力、いわば社会性を育成が図られるための、具体的・実践的な活動内容

・「学習形態」については、

- ① 共通の課題を友だちと共に追求していく学習
- ② 個人的な課題をその子なりの方法で追求していく学習

<学習の形態>



(3) 生活交流の構想

・上図における集団活動、社会的実践活動、課題選択学習を統合し、「生活交流」として設定する。

① 生活交流のねらい：

子供自身が、自分を取り巻く様々な人や社会や自然との交流を通して、自分自身を見つめ、より多面的・総合的な見方・考え方を育て、何よりも実生活において実践できる力の育成をねらいとしている。単なる細切れの知識の蓄積ではなく、まさしく知識を統合し、次なる場面へと応用、転移していく力・・・言い換えるならば、人として生きていくために必要な資質を育て、究極的には、自らの生き方を創造していく力の育成を目指す。

② 生活交流の設定要因

ア. 総合的活動の構想

- ・ 道徳的実践の場として
- ・ 各教科で学習された知識や技能が実践化される場として

イ. 体験学習の重視

- ・ 仕事の楽しさ、完成の喜びの体得、勤労観・職業観の育成
- ・ 問題解決の能力や総合的な学習の力の育成
- ・ 学校や社会の集団的な活動への参加や奉仕活動により連帯意識やよりよい社会生活を営む資質の育成
- ・ 地域の文化や社会生活等についての認識を新たにし、生活・文化の発展・向上、創造を志向する意欲や態度を生み出す

ウ. 集団生活の見直し

- ・ 従来の学級集団、学年集団、全校集団のみならず、地域社会にある関係諸機・団体・各集団等における集団活動も取り入れる

エ. 個性化教育の推進

- ・ 課題のみならず、解決の手段や方法までも自分で選択して進める学習

#### の導入

オ. 地域社会や家庭と学校の連携

・連携をより強固にし、地域に根ざし開かれた学校へ

#### (4) 教科指導内容の重点化

- ① 独り立ちできる力を育てるうえから、各教科が担う主要な課題として、表現力と論理的な思考力に着目し、基礎的な教科である〈国語科〉と〈算数・数学科〉を研究対象とする。
- ② 育てたい表現力、論理的な思考力の内容を明らかにし、指導の重点化と系統化を図る
- ③ 教材の精選、重点化を図り、配列教材の検討を加え、指導計画を作成する
- ④ 教材・教具も含め、学習材の開発、研究をすること
- ⑤ 子供一人一人の学びの姿に焦点を当てた授業構想
- ⑥ 問題解決的な学び方の定着を図る授業構想と基礎的な指導過程の研究

表中からうかがえるように、Bタイプの学校においても、Aタイプの場合と同様、その教育課程再編の原理は3校3様である。

すなわち、錦華小は、先の基礎的な学力の育成という観点から、現行の国語、算数、体育の各教科及び特別活動はそのままを踏襲しつつ、他の教科等については全面的に見直し、その結果、4つの側面ないし分野に基づく指導内容＝教科の新設を行うことになったと報告している。すなわち、自立する力を養う→生活科、命を大切にして総ての人を思いやる人間愛の精神を養う→人間科、自己を適切に表現する力を養う→表現科、環境に対する理解を深め保全に努めようとする態度を養う→環境科の新設である。

そして、自ら課題を設定し→追求するという子どもの思考の流れを重視した学習指導を展開するために、これらの各内容を相互に関連づけるカリキュラムマトリックスの作成、及び生きた教材開発の必要に辿り着いたとしている。

また、学習指導においては体験を重視した活動の導入を提出している。

福岡教育大学附属小は、蛭谷氏の教科構成論に着目し、子どもがもの、人、ことを認知していく活動（具体的な感覚活動、抽象的思考活動、表現的活動）をベースに現行教科・内容を見直すとともに、その過程で新教科として〈表現科（1・2年）〉及び〈生活環境科（3・4年）〉を設定する必要にたち至ったこと、さらには、これらの各教科を支え、総合的に人としての在り方生き方を考える「人間」領域を新設する必要を提出している。

東小・中は、研究開発の焦点を小5～中1の移行期3年間に定め、一方では、いくなれば現行の特別活動を、道徳的実践及び各教科での学習成果を実践する場として再編するために「生活交流」を構想し、他方では、現行の国語科、算数・数学科の2教科にしほり、その中で表現力の育成及び論理的な思考力の育成のための内容及び教材・教具を開発していくとの方針を提出している。

また、学習指導に関連して、「生活交流」においては体験学習の重視、集団学習とともに個別学習の採用、地域社会・家庭との連携の必要を、他方、国語科、算数・数学科において開発される内容の問題解決授業の構想を提案している。

#### (3) Cタイプの研究開発学校にみられる特質

次に、Cタイプに属する学校、すなわち横浜国立大学附属横浜小にみられる特質を一覧

したのが、次の〈表8〉である。

表8 Cタイプにおける教育課程再編の原理

(1) 各教科とも「共に学びをつくり上げる力」である「自己決定力・自己責任能力／かかわり合う力」の3つの力につながる力を明らかにし、それぞれの教科でどのような力を大切にしたいのかを考えて本校独自の教育課程（横小プラン）を創造する。

例えば、現行の生活科第1学年内容の2には「近所の公園などの公共施設はみんなのものであることがわかり・・・」という一文があるが、これを、本校では、共通して子どもにわからせていくことよりも、それ以上に、「自分から学習を決めたり、自分の活動を振り返りながら、学習の価値を高めていく」など「共に学びをつくりあげる力」につながる力の育ちを大切にしていきたいと考えた。

他の教科、例えば、理科においても、本校では、空気や光、音などの個々の性質について理解することを目的にするのではなく、3つの力を伸長することを第一に考え、学習の対象とする自然事象は、空気でも光でも音でも、またはそれらに代わるものでも、同じように力を伸長できるものならば、どれでもよいのである。

(2) 各教科の基本構成は次の通り。

①「教科目標」

②「教科における3つの力のとらえかた」

③「学年目標と育てたい力」

「活動例」：従来、内容と呼ばれていたものものを「活動例」として示す。ここから単元構成を工夫する。

(3) 単元を「子どもが自分の思いや願いを実現するために、かかわり合いながら追究していく学習活動のひとまとまり」としてとらえている。

(4) 指導内容を能力を中心とした表記にすることで、内容の規定からはなれ、教科横断的な学習も構成しやすくなることから。→「教科横断型学習」として位置づける。このため、環境、福祉など学際的学習についても、教科外に新たな枠組みを作らなくとも、教科の中であるいは教科を横断する学習を構成することで、十分に対応できる。

(5) 授業時間の工夫

基本的には1単位時間45分であるが、実際には、子どもの学習のすすめ方に合わせて、60分授業（45分×4時間分を60分ずつ3回にわけて行う）、90分授業（45分×2時間分を1回として扱う）など、柔軟な扱い方にする。チャイムも多い日でも1日3回とする。

すなわち、同附属小は、現行の教科、道徳、特別活動の内容を「共に学びをつくり上げる力」としての「自己決定力」「自己責任能力」「かかわり合う力」の3つの力の育成という観点から見直すという方針を明らかにしている。また、それら見直し内容を、子どもの願い実現活動の一まとまりとしての「単元」編成するとしている。

そして、学習指導に関連して、教科横断型学習を展開したり、子どもの学習状況に応じた1単位時間の弾力的運用、チャイムの削減等の提案をしている。

## 5 再編後の各学年別の年間総授業時数をめぐって

次に、各研究開発学校においては、前節のような諸原理に基づいて教育課程を再編した結果、いったいどのような新教育課程を創造することになったのであろうか。その検討の前に、まず、この節において、このようにして開発された教育課程における各学年別の年間総授業時数の特質について検討することにしたい。というのも、開発された教育課程が現行の総授業時数の中で、あるいは平成14年度以降実施されることになる新规定の中で実施可能であるか、あるいはさらなる時数改善の必要があるか、の見通しを予め得ておきたいからである。

そこで、次に、各研究開発学校において新たに研究開発された新教育課程における各学年別年間総授業時数を一覧すれば、次の〈表9〉の通りとなる。なお、小学校第1学年は年間週34単位時間、第2学年以降は週35単位時間、1単位時間は45分で計算（以下、同様）。また、表中の（ ）内は、現行の年間総授業時数からの削減率を％表示している。

表9 研究開発学校における各学年別年間総授業時数

| 学校名 \ 学年     | 第1学年           | 第2学年           | 第3学年           | 第4学年           | 第5学年            | 第6学年            |
|--------------|----------------|----------------|----------------|----------------|-----------------|-----------------|
| 福島大学附属小      | 770<br>(-9.4)  | 824<br>(-9.5)  | 930<br>(-5.1)  | 930<br>(-8.4)  | 930<br>(-8.4)   | 930<br>(-8.4)   |
| 愛媛大学附属小      | 748<br>(-12.0) | 805<br>(-11.5) | 875<br>(-10.7) | 980<br>(-3.4)  | 1015<br>(-0.0)  | 1015<br>(-0.0)  |
| 上越市立大手町小     | 765<br>(-10.0) | 823<br>(-9.6)  | 928<br>(-5.3)  | 963<br>(-5.1)  | 998<br>(-1.7)   | 998<br>(-1.7)   |
| 神戸大学<br>附属明石 | 748<br>(-12.0) | 805<br>(-11.5) | 875<br>(-10.7) | 910<br>(-10.3) | 910<br>(-10.3)  | 910<br>(-10.3)  |
| 中            | 1080<br>(+2.9) | 1080<br>(+2.9) | 1080<br>(+2.9) |                |                 |                 |
| 東京/錦華小       | 918<br>(+8.0)  | 980<br>(+7.7)  | 1015<br>(+3.6) | 1050<br>(+3.4) | 1120<br>(+10.3) | 1120<br>(+10.3) |
| 福教大附属福岡小     | 782<br>(-8.0)  | 840<br>(-7.7)  | 910<br>(-7.1)  | 945<br>(-6.9)  | 980<br>(-3.4)   | 980<br>(-3.4)   |
| 函南町立東 小      | (現行)           | (現行)           | (現行)           | (現行)           | 1085<br>(+6.9)  | 1085<br>(+6.9)  |
| 中            | 1101<br>(+4.9) | (現行)           | (現行)           |                |                 |                 |
| 横国大附属横浜小     | 832<br>(-2.1)  | 864<br>(-5.1)  | 928<br>(-5.3)  | 948<br>(-6.6)  | 958<br>(-5.6)   | 958<br>(-5.6)   |

|                |    |               |               |               |               |               |               |
|----------------|----|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 小学校年間<br>総授業時数 | 現行 | 850           | 910           | 980           | 1015          | 1015          | 1015          |
|                | 新  | 782<br>(-8.0) | 840<br>(-7.7) | 910<br>(-7.1) | 945<br>(-6.9) | 945<br>(-6.9) | 945<br>(-6.9) |
| 中学校年間<br>総授業時数 | 現行 | 1050          | 1050          | 1050          |               |               |               |
|                | 新  | 980<br>(-6.7) | 980<br>(-6.7) | 980<br>(-6.7) |               |               |               |

表9より、各研究開発学校で開発された教育課程にみられる年間総授業時数は、各校における現行の教育課程を再編する際の諸原理の違いを反映して、まさに各校各様であることがわかる。

あえていくつかの特質をあげれば、①錦華小と東小においては、現行時数より増加していること、②神戸大学附属明石中及び東中という、中学校における研究開発学校ではともに現行時数より増加していること、③他の研究開発小学校は、おしなべて現行時数より削

減されていること（但し、愛媛大学附属小の5・6学年は現行時数）、④中でも、削減率は、Aタイプに属する各4小学校が、Bタイプ及びCタイプの小学校よりも概して高くなっており、その削減率は、週5日制完全実施を前提として平成14年度より実施される新しい年間総授業時数（現行より週2、年間総授業時数平均で7.25%削減）よりもさらに高くなっていること（但し、福島大学附属小の第3学年、愛媛大学附属小の第4～6学年、大手町小の第3～6学年は削減内）、⑤福岡教育大学附属福岡小と横浜国立大学附属横浜小は、ともに、現行よりも削減しているが、新しい年間授業時数からみればその範囲内に落ちていること、等を指摘することができよう。

## 6 再編後の教育課程の特質をめぐって

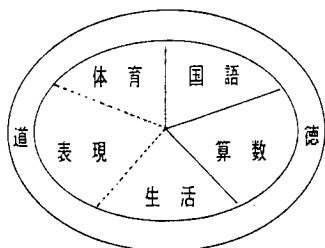
各研究開発学校で開発された教育課程の特質をみると、前節までの検討から示唆されるように、A～Bの各タイプ別においてはもちろんのこと、各タイプ内においても互いに異なり極めて多様であった。このため、本節では、各タイプ別の検討をとりやめ、各学校ごとにその特質を紹介し、検討を加えることにしたい。

### < 6-1 福島大学教育学部附属小学校の場合 >

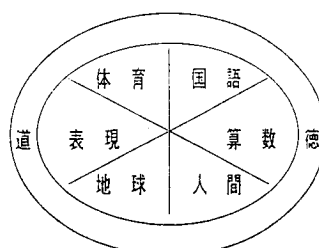
#### (1) 全体的特質

同附属小学校において開発された教育課程の全体的な特質を紹介すれば、下図のようになる。

< 低学年（1・2年） >



< 中・高学年（3～6年） >



< 年間の授業時数 >

| 区分          | 第1学年  | 第2学年 | 第3学年 | 第4学年 | 第5学年 | 第6学年 |     |
|-------------|-------|------|------|------|------|------|-----|
| 各教科・道徳の授業時数 | 国語    | 272  | 280  | 245  | 245  | 210  | 210 |
|             | 算数    | 136  | 175  | 175  | 175  | 175  | 175 |
|             | 生活    | 132  | 134  |      |      |      |     |
|             | 人間    |      |      | 140  | 140  | 140  | 140 |
|             | 地球    |      |      | 105  | 105  | 140  | 140 |
|             | 表現    | 136  | 140  | 140  | 140  | 140  | 140 |
|             | 体育    | 60   | 60   | 90   | 90   | 90   | 90  |
|             | 道徳の時間 | 34   | 35   | 35   | 35   | 35   | 35  |
| 総授業時数       | 770   | 824  | 930  | 930  | 930  | 930  |     |

すなわち、教育課程は、低学年（1・2学年）では、国語、算数、生活、表現、体育の5教科及び道徳の時間より構成されている。中・高学年（3～6学年）では、低学年の生活が人間、地球の2教科に分化することになり、他の国語、算数、表現、体育と合わせ、計6教科及び道徳の時間より構成されている。

また、各新教科に配当される年間総授業時数をみると、＜国語科＞では、現行の授業時数に比べ、第1～4学年では週1単位時間分の減、第5、6学年では現行と同じとなっている。＜算数科＞の年間授業時数は、各学年とも、現行と同じ時数が配当されている。＜生活科＞では、現行より、第1学年では年間で30単位時間、第2学年で年間29単位時間多く配当されている。

新設の＜人間科＞には、第3～6学年にかけて年間140（週4）単位時間が配当されている。＜地球科＞には、第3、4学年では105（週3）単位時間、第5・6学年では140（週4）単位時間が配当され、現行の理科に比べ、第3・4学年では同じ、第5・6学年では年間35（週1）単位時間の増となっている。また、＜表現科＞では、各学年とも週2単位時間分が配当され、現行の音楽科と図画工作科の年間時数を合計した時数となっている。他方、＜体育科＞は、現行に比べ、各学年とも週1単位時間分の減となっている。

なお、＜道徳＞には、各学年とも、現行と同じ授業時数が配当されている。

## （2）開発された各教科等の特質

それでは、新設の各教科は、どのような意図・目標を持って新設され、その結果、どのように内容編成されているのであろうか。現行の教科・内容がどのように再編ないし統合されているのであろうか。

### （2）－1 国語科の特質

#### ① 再編のための問題意識

同附属小は、現状の問題点を「国語科での学習が次の学習や他教科での学習に十分に役立てられなかったり、日常生活で実際に発揮されない」ことを反省し、子どもが「生きて働く言語能力：日常生活の中で自分の思いを実現するために、言語を用いて、より適切に表現したりより正確に理解したりする力」を育てることを課題としている。

このため、現行の目標を改め、新たに「国語を正確に理解し適切に表現する能力を育てるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる」と設定している。

#### ② 内容・方法の改善策

そして、このために、次のような2つの方針から内容・方法の改善に取り組んでいる。

ア. 内容を「表現」と「理解」の2領域及び「言語事項」より構成するが、その際、「表現」と「理解」の関連的指導を行うことを眼目に、（ア）「話す・書く・聞く・読む」の4つの言語活動を組み合わせ、子どもの「目的意識」及び「相手意識」を明確にした指導、及び（イ）日常生活との関連を重視した指導を行うよう、総合的な単元による内容編成を進める。

イ. 「言語事項」の指導においては、「目的意識」及び「相手意識」をきちんと持たせ、



それを日常生活場面で実際に用いるような指導を行う。

## (2) - 2 算数科の特質

### ① 再編のための問題意識

同附属小は、「数理的に処理する能力や、進んで生活に生かそうとする態度が思うように育成されていない。基礎的な知識と技能は教師から一方的に教え込まれるものではない」という問題意識から、「基礎的な知識と技能は、実際に問題を処理する場合に、的確かつ能率的に用いることができるようになって初めてその真価が発揮されるといえる。また、数理的に処理する能力は、・・・帰納、演繹などの考えをもとに、結果や方法について見通しをもち筋道を立てて考えたり、結果や方法の正しさを他人に順序よく説明したりする能力であり、この能力は、基礎的な知識と技能をよりよく身につける過程で育てられる」と改善の方向を述べている。

このため、現行の目標を改め、新たに「数量や図形についての基礎的な知識と技能を身に付け、その過程において数理的に処理する能力を育てるとともに、進んで生活に生かそうとする態度を育てる」と設定している。

### ② 内容・方法の改善策

そして、このためには、教師側の視点で構成されていた従来の内容を、子どもの側に立って再検討することが大切であるとし、次のように内容を再編している。

すなわち、現行の1・2学年の「A数と計算」「B量と測定」「C図形」を、「数と量」「図形」に再編する。「数と量」に統合するのは、子どもの生活では両者は混在しており、このため、量の測定を通して数概念をとらえたり、大きな数の仕組みを学ぶ過程で長さ、かさの測定能力を高めたりするというように、両者の関連指導が大切であるから、とする。

また、現行の3～6年の「A数と計算」「B量と測定」「C図形」「D数量関係」を、「数と式」「図形と量（図形や空間概念と量の測定の原理と方法、測定能力を関連させる）」「数量関係（他教科での事例の考察、他教科の学習への積極的な活用を図りながら）」に再編する。

なお、これらの結果、例えば、5年生の「倍数と約数」と「分数のたし算とひき算」を合わせた大単元編成をしたり、「立体」と「立体の体積と表面積」を一つの大単元に編成する等の、内容の再編・統合が随所に報告されている。

## (2) - 3 生活科の特質

### ① 再編のための問題意識

子どもが「生活する喜び、活動する楽しさ」を大切にするとところから、子どもが進んで働きかける「環境」を大きく捉え、このため、目標を「具体的な活動や体験を通して、自分と環境とのかかわりに関心をもたせ、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自分を取り巻く環境へ積極的に働きかける態度を育てる」と設定している。

### ② 内容・方法の改善策

子どもの思いや願いを基盤に大単元を構想した授業の開発に努めている。

## (2) - 4 人間科の特質

### ① 再編のための問題意識

この教科は第3～6学年に新設された教科であるが、目標を「人間の生活を見つめる活動を通して、人と人との関わりや人間の営みについて理解を図り、国際社会に生きる人間として、共によりよい生き方を求めようとする態度を育てる」と設定している。

### ② 内容・方法の改善策

この教科の内容は、「家庭生活・学校生活」「生産・消費・環境」「文化・伝統」「公共・福祉」「国際理解」の6つより構成され、各内容は、さらに第3～6年ごとに具体化されている。現行教科との対象関係は必ずしも明らかではないが、低学年の生活科との関連や現行の社会科、家庭科の内容等を参考にしながら、独自の内容づくりがみられる。

また、各内容の関連指導を意図する内容の「単元」編成が進められている。

## (2) - 5 地球科の特質

### ① 再編のための問題意識

この教科は第3～6学年に新設された教科であるが、これまでの自然科学の学問体系の枠をはずし、身近な自然を総合的にとらえる学習の展開を意図し、目標を「身近な自然に働きかける活動を通して、科学的な見方や考え方を養うとともに、自然と人間とのかかわりについて理解を図り、自然を愛し、大切にしていこう態度を育てる」と設定している。

### ② 内容・方法の改善策

この教科の内容は、「(人間が住む地球そのものに必要な)天体の動き」「(人間が生きるために不可欠な)大気、水、大地の変化」「(人間と共生・共存するものとしての)生物の適応」「(人間が生活するために必要な)物質とエネルギーの利用」の4つより構成されている。生活科や人間科との関連をはじめ、現行の理科にみられる「A生物とその環境」「B物質とエネルギー」「C地球と宇宙」をベースにしたが、内容の再編・統合がうかがえる。

また、これら各内容の関連指導を意図して、内容の「単元」編成が進められている。

## (2) - 6 表現科の特質

### ① 再編のための問題意識

この教科では、従来の音楽や図画工作、体育などの教科の枠を超えて子どもが自分のやってみたいことを考え、工夫することを意図し、目標を「表現及び鑑賞の活動を通して、創造活動の基礎的な能力を育てるとともに表現の喜びを味わわせ、豊かな情操を養う」と設定している。

### ② 内容・方法の改善策

このため、内容においても、「素材」「場所の特徴」「テーマ(イメージ)」「よさや美しさの鑑賞」といった4つの表現対象を設け、それぞれにおいて子どもの「出会い」→「表現活動」を重視する編成がめざされている。

この結果、例えば、4年生では単元「〇〇に変身」(90分×5)において、①一番変身したいものに変身してみよう→②自分なりの表し方や手順で自由に表現→③変身したもののからイメージを膨らませて表現(お話を作り劇をする、本物をまねる、音楽に合わせて

踊る等)といった活動が展開されている。

## (2) - 7 体育科の特質

### ① 再編のための問題意識

従来では教師主導に一律的な技能の向上がめざされたり、運動量を保証するため子どもがルールを決めたり作戦を立てて練習するといった時間が少なかったこと等が反省され、今後は、運動の楽しさを求め、進んでルールや作戦を考えたり、学習の計画を立てたりしながら運動の仕方を学びながら、日常生活や生涯にわたって運動に親しむ態度を養いたいと考え、このため、目標を「運動の楽しさや喜びを味わう経験と心身の健康・安全についての理解を通して、進んで運動に親しみ、健康で明るい生活を営む態度を育てる」と設定している。

### ② 内容・方法の改善策

このため、現行の運動種目別の内容編成を改め、1～6学年を「運動」「健康で安全な生活」の2領域に再編・統合している。さらに、「運動」を走る、跳ぶ、転がる、泳ぐ、投げる、蹴るなどの<基本運動>と<発展運動>とに分けている。「健康で安全な生活」では、病気の予防、身の回りの危険な場所や事柄についての理解が中心とされている。

## (2) - 8 道徳の特質

ここでは、従来の資料による道徳的価値の理解を中心とした受動的な学習の結果、子どもに道徳的な実践力が身に付けられなかったことが反省され、道徳的価値の内面化と道徳的实践を一体的に捉えていく必要が提出され、ここから改善策として、①教科の学習の中に含まれる道徳的価値を取り上げた道徳の時間の設定、②教科の単元の展開に道徳の時間を組み合わせて設定する方策が採られている。

### < 6 - 2 愛媛大学教育学部附属小学校の場合 >

#### (1) 全体的特質

同附属小学校において開発された教育課程の全体的な特質を紹介すれば、下図のように、8つの「学習領域」及び「みんなの時間」より構成されている。

各「学習領域」の年間授業時数

| 学年 | たんけん・冒険 | しらべ・調査研究 | そだて・育て  | そうぞう・創造  | ならい・習い   | うんどう・運動 | こうりゅう・交流 | はたらく・働く  | みんなの時間 | 標準時数 |
|----|---------|----------|---------|----------|----------|---------|----------|----------|--------|------|
| 1年 | 67(9%)  | 47(6%)   | 57(8%)  | 216(29%) | 187(25%) | 64(8%)  | 77(10%)  | 33(5%)   | <160>  | 748  |
| 2年 | 64(8%)  | 46(6%)   | 82(10%) | 246(31%) | 181(23%) | 61(8%)  | 96(12%)  | 27(2%)   | <160>  | 803  |
| 3年 | 44(5%)  | 185(21%) | 35(4%)  | 229(26%) | 166(19%) | 69(8%)  | 118(14%) | 25(3%)   | <160>  | 871  |
| 4年 | 48(5%)  | 191(19%) | 39(4%)  | 254(26%) | 194(20%) | 72(7%)  | 145(15%) | 35(4%)   | <160>  | 980  |
| 5年 | 32(3%)  | 242(24%) | 36(4%)  | 248(24%) | 126(12%) | 70(7%)  | 156(15%) | 105(11%) | <160>  | 1015 |
| 6年 | 20(2%)  | 240(24%) | 12(1%)  | 309(30%) | 91(10%)  | 70(7%)  | 224(22%) | 41(4%)   | <160>  | 1015 |

#### (2) 開発された各「学習領域」の内容編成の特質

まず、8つの「学習領域」及び「みんなの時間」の願い(目標)を紹介すれば、次のよ

うである。

| 学習領域            | 願 | い   |
|-----------------|---|---|
| たんけん<br>冒険の学習   | ○ | 期待や不安を抱きながら、未知の環境や他者と出会い、かかわる活動を通して、環境や他者との新たなかかわりを見出したり、自己信頼感を高めたりするような経験をもつ。                          |
| しらべ<br>調査・研究の学習 | ○ | 実験や調査などにより情報を収集したり、処理して発表や報告したりして自分なりのまとまりをつくるような活動を通して、調査・研究することの面白さを味わい、課題解決のよりよい在り方に目を向けていくような経験をもつ。 |
| そだて<br>育ての学習    | ○ | 生き物の誕生や成長の姿、死など生命と一体的にかかわるような体験の中で生命のもつ不思議さや生命の尊さを感じ取り、生き物とのかかわり方を考えたり生き物を育てる喜びを味わったりするような経験をもつ。        |
| そうぞう<br>創造の学習   | ○ | 自分の思いや願いを明らかにしながら自分なりの方法で表したり、さまざまな発信を感受し味わったりすることを楽しみ、他者と相互作用しながら新たな自己と出会い、自分なりの文化を創りだしていくような経験をもつ。    |
| ならい<br>習いの学習    | ○ | 記号や用具を操作する面白さや楽しさを味わいながら、それらについての概念を見出したり、操作能力を高めたりする（身につける）ような経験をもつ。                                   |
| うんどう<br>運動の学習   | ○ | 運動する楽しさや喜びを味わいながら、運動文化のよさに気づき、各種の運動能力を高める（身につける）ような経験をもつ。   |
| こうりゆう<br>交流の学習  | ○ | 他者と一体的・相互主体的にかかわったり自分自身を見つめたりする活動を通して、交流する楽しさや人のすばらしさを味わい、認め合いながらともに生きようとするような経験をもつ。                    |
| はたらく<br>働く学習    | ○ | 奉仕的な活動やボランティア活動などを通して、他者や環境のために役に立つ楽しさや喜びを味わったり、集団の一員としての自覚をもったりするような経験をもつ。                             |
| みんなの時間          | ○ | 変化とゆとりのある学校生活を願い、弾力的な運用ができるように配慮した自由裁量の時間や学校行事等の時間である。  |

そして、このような目標のもとで、同附属小は、各「学習領域」ごとに、その内容を、低一中一高学年別に、＜環境とのかかわり＞＜文化とのかかわり＞＜人間とのかかわり＞の3つの基本的な視点を手がかりに具体化している。その特質を整理すると、概略、以下の通りである。

| 学習領域     | 3つの基本的な視点 | 低学年の内容数 | 中学年の内容数 | 高学年の内容数 |
|----------|-----------|---------|---------|---------|
| たんけん・冒険  | 環境とのかかわり  | 7       | 0       | 0       |
|          | 文化とのかかわり  | 4       | 3       | 2       |
|          | 人間とのかかわり  | 1       | 1       | 1       |
| しらべ・調査研究 | 環境とのかかわり  | 1       | 12      | 10      |
|          | 文化とのかかわり  | 2       | 7       | 4       |
|          | 人間とのかかわり  | 0       | 0       | 0       |
| そだて・育て   | 環境とのかかわり  | 3       | 1       | 5       |
|          | 文化とのかかわり  | 1       | 0       | 0       |
|          | 人間とのかかわり  | 0       | 0       | 0       |
| そうぞう・創造  | 環境とのかかわり  | 1       | 0       | 0       |
|          | 文化とのかかわり  | 13      | 15      | 17      |
|          | 人間とのかかわり  | 0       | 0       | 0       |
| ならい・習い   | 環境とのかかわり  | 0       | 0       | 0       |
|          | 文化とのかかわり  | 6       | 6       | 6       |
|          | 人間とのかかわり  | 0       | 0       | 0       |

|          |  |   |   |   |
|----------|--|---|---|---|
| うんどう・運動  | 環境とのかかわり   | 0 | 0 | 0 |
|          | 文化とのかかわり   | 2 | 2 | 2 |
|          | 人間とのかかわり   | 1 | 1 | 1 |
| こうりゅう・交流 | 環境とのかかわり   | 0 | 0 | 0 |
|          | 文化とのかかわり   | 2 | 2 | 3 |
|          | 人間とのかかわり   | 3 | 4 | 3 |
| はたらく・働く  | 環境とのかかわり   | 1 | 0 | 0 |
|          | 文化とのかかわり   | 2 | 2 | 2 |
|          | 人間とのかかわり   | 1 | 1 | 1 |
| みんなの時間   | 学校行事関係：儀式関係、保健・安全行事<br>その他：知能テスト、勤労（草引き）、低学年との交流、音楽集会、児童集会、学級活動、お楽しみ会、学年集会、実力テストなど |   |   |   |

注：＜環境とのかかわり＞は「自然」「社会」から内容構成

＜文化とのかかわり＞は「ことば」「数理」「音楽」「造形」「運動」「くらし」から内容構成

＜人間とのかかわり＞は「ひと」から内容構成

上記の「自然」「社会」「ことば」「数理」「音楽」「造形」「運動」「くらし」「ひと」という9つの内容は、ほぼ現行の教科名に対応させて考えられているように思われるが（しかし、「くらし」には広く保健、社会、家庭、道徳などが再編）、現行内容を精選したり、統合・再編したりしている特質がうかがえる。

そして、これらの各内容は、各領域ごとに、3つの＜かかわり＞内容を、別々にではなく、総合的に関連した指導をするために、内容の「活動単元」編成が試みられている。

### ＜6-3 新潟県上越市立大手町小学校の場合＞

#### （1）全体的特質

大手町小学校において開発された教育課程の全体的な特質を紹介すれば、下図のように、7単元群より構成されている。

| 単元群   | 学年 | 第1学年 | 第2学年 | 第3学年 | 第4学年 | 第5学年 | 第6学年 |
|-------|----|------|------|------|------|------|------|
| 生活・環境 |    | 102  | 105  | 140  | 140  | 140  | 140  |
| 言語    |    | 238  | 245  | 210  | 210  | 175  | 175  |
| 数量・図形 |    | 136  | 175  | 175  | 175  | 175  | 175  |
| 総合科学  |    |      |      | 70   | 105  | 140  | 140  |
| 創造表現  |    | 102  | 105  | 105  | 105  | 105  | 105  |
| 身体・健康 |    | 102  | 105  | 105  | 105  | 140  | 140  |
| 自分・集団 |    | 85   | 88   | 123  | 123  | 123  | 123  |
| 総授業時数 |    | 765  | 823  | 928  | 963  | 998  | 998  |

なお、現行の国語科と算数科の内容は、それぞれ「言語単元群」、「数量・図形単元群」という新たな単元群（教科）へと単独で再編・統合されているので（後出参照）、その年間授業時数を現行と比べると、国語科は第1～4学年では週2単位時間、第5・6学年では週1単位時間分が削減されていることになる。算数科は現行の授業時数がそのまま維持

されている。

### (2) 各単元群の内容編成の特質

同小によれば、上記の7単元群は、既に検討されたように、「統合」「関連」「重点化」という3つの再編原理に基づいて、現行の教科内容を再編・統合して誕生したという。その要領は下図のようである。

| <現行教科> | <再編・統合の要領>                                  | <開発単元群>     |
|--------|---|-------------|
| 国語     | 体験活動を中核に自然や社会「環境」に働きかける視点より内容を「統合」          | →「生活・環境単元群」 |
| 社会     | 音声言語を重視しコミュニケーション能力を育成するよう内容を「重点化」          | →「言語単元群」    |
| 算数     | 論理的思考力の育成、数理的な処理のよさを生活に生かせるよう内容を「重点化」       | →「数量・図形単元群」 |
| 理科     | 社会科学、自然科学の価値や必要性を見出すよう内容を「関連」               | →「総合科学単元群」  |
| 生活     | 自分の思いの豊かな表現力と感性を育成するよう内容を「関連」               | →「創造表現単元群」  |
| 音楽     | 健康という視点から内容を「関連」                            | →「身体・健康単元群」 |
| 図画工作   | 自分らしい在り方生き方を探るとともに、他者を尊重し共に生きる心の教育から内容を「統合」 | →「自分・集団単元群」 |
| 家庭     |   |             |
| 体育     |   |             |
| 道徳     |   |             |
| 特別活動   |   |             |

### (3) 現行の学習指導要領の内容の厳選例

そして、同小は、これらの各単元群内の内容を整理しながら、その学習指導のために「活動単元」（願い実現活動の一まとまり）による内容編成を進めたわけであるが、その過程で厳選されるようになった現行学習指導要領の内容を、次図のように一覧表に整理している。

| 浮かび上がった厳選視点                    | 現行の学習指導要領と比較した場合の主な厳選内容例  |
|--------------------------------|---|
| 別々に扱われていた内容を統合して扱いスリム化         | <ul style="list-style-type: none"> <li>・算数1年の加法、減法の意味や立式は、一体化して学習。</li> <li>・算数6年の分数の乗除は、連続一体化して学習。</li> <li>・社会、理科4年の「関川調査隊」に関する内容を総合的に学習。</li> </ul>                          |
| 他単元群で扱うことになっている内容を関連させてスリム化    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・算数4年の小数の加減乗除は「おすすめ 嫌いこくふくジュース」で身体・健康単元群の「ぼく、わたしの健康宣言」と関連化。</li> <li>・理科6年の水溶液の内容は、5年の総合科学単元群の酸性雨の調査で扱ったので、6年の生活・環境単元群で内容を軽減。</li> </ul> |
| 単元の内容の中で中心となる見方・考え方にかかわる活動を重点化 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・算数1年の「くりあがりとりさがり」は2か月間集中して学習。</li> <li>・算数2年の「数えて元気！」で十進位取り記数法を実感的に学習。</li> <li>・理科4年「てんびん」を削除し「てこ」に関連する単元に統合。</li> </ul>               |

|                                 |   |
|---------------------------------|---|
| 単なる知識・技能の伝達や暗記に陥りがちな内容は、削除または軽減 | <ul style="list-style-type: none"> <li>理科3年の昆虫の体のつくりは、教え込みになりやすく削除。</li> <li>社会6年の神話・伝承や人物に関するものについては軽減。</li> <li>算数3、4年のそろばんの内容を削除。</li> <li>音楽や図工で画一的な知識・技能習得の性格が強い学習はしない。</li> </ul> |
| 子どもにとって高度な内容は、削除または軽減           | <ul style="list-style-type: none"> <li>国語の全学年で段落分けや人物の気持ちの読取りを軽減。</li> <li>算数6年の角錐や円錐の体積と表面積については応用として扱う。</li> <li>理科6年の「堆積岩と火成岩の粒の様子の違い」の内容は軽減。</li> </ul>                             |
| 子どもの日常生活で身に付けられる内容は軽減           | <ul style="list-style-type: none"> <li>家庭科6年の被服製作に関するものは軽減。</li> <li>算数1年の時計や時間、時刻に関する内容は、確認程度にする。</li> <li>道徳の指導内容を時間で割り振って扱うような学習は行わない。</li> </ul>                                    |
| 中学校で同様に扱うことになっている内容は削除または軽減     | <ul style="list-style-type: none"> <li>社会6年の歴史に関する内容は、通史的に取り扱わない。</li> <li>理科5、6年の「太陽や月の位置関係と見え方の違いに関するもの」「星の日周運動と位置や方向に関するもの」は軽減した。</li> </ul>   |

< 6-4 神戸大学発達科学部附属明石小・中学校の場合 >

(1) 全体的特質

同附属明石小・中で開発された教育課程の全体的な特質を紹介すれば、次図のようである。

○ 小学1～3年生

< 小学校 >

< 中学校 >

| 学年 | 各学習及び活動 | 単元学習 |    |    |       |          | 選択活動<br>お楽しみ会 | 生活実践 | 計  |
|----|---------|------|----|----|-------|----------|---------------|------|----|
|    |         | 算数   | 国語 | 国語 | 想像表現  | 生活表現     |               |      |    |
| 1年 | 平成7年度   | 3    | 2  | 6  | 4     | 5        | 1             | 1    | 22 |
|    | 現行指導要領  | 4    | 3  | 9  | 音2 図2 | 生3 道1    | --            | 特1   | 25 |
| 2年 | 平成7年度   | 4    | 2  | 6  | 4     | 5        | 1             | 1    | 23 |
|    | 現行指導要領  | 5    | 3  | 9  | 音2 図2 | 生3 道1    | --            | 特1   | 26 |
| 3年 | 平成7年度   | 4    | 2  | 6  | 4     | 7        | 1             | 1    | 25 |
|    | 現行指導要領  | 5    | 3  | 9  | 音2 図2 | 社3 理3 道1 | --            | 特1   | 28 |

| 学年<br>学習 | 1年  | 2年  | 3年  |
|----------|-----|-----|-----|
| 教科学習     | 738 | 737 | 753 |
| 国語       | 109 | 94  | 126 |
| 社会       | 79  | 94  | 85  |
| 数学       | 94  | 109 | 126 |
| 理科       | 94  | 79  | 94  |
| 音楽       | 63  | 54  | 31  |
| 美術       | 63  | 63  | 16  |
| 保健体育     | 79  | 94  | 100 |
| 技術・家庭    | 63  | 56  | 72  |
| 外国語      | 94  | 94  | 103 |

○ 小学4～5年生

| 学年 | 各学習及び活動 | 単元学習 |    |    |       |          | 選択活動<br>お楽しみ会 | 生活実践 | 計  |
|----|---------|------|----|----|-------|----------|---------------|------|----|
|    |         | 算数   | 国語 | 国語 | 創造表現  | 環境       |               |      |    |
| 4年 | 平成7年度   | 4    | 2  | 6  | 4     | 5        | 3             | 1    | 26 |
|    | 現行指導要領  | 5    | 3  | 8  | 音2 図2 | 理3 社2    | 社1 道1+        | ク1   | 学1 |
| 5年 | 平成7年度   | 4    | 2  | 5  | 4     | 6        | 3             | 1    | 26 |
|    | 現行指導要領  | 5    | 3  | 6  | 音2 図2 | 理3 社1 図2 | 社2 道1         | ク1   | 学1 |

○小学6年生

| 学年 | 各学習及び活動 | 単元学習 |    |     |    |    |    |    |    | 探求単元 | 選択活動<br>1-7分タイム | 生活実践 | 計  |
|----|---------|------|----|-----|----|----|----|----|----|------|-----------------|------|----|
|    |         | 算数   | 国語 | 外国語 | 音楽 | 美術 | 理科 | 社会 | 総合 |      |                 |      |    |
| 6  | 平成7年度   | 4    | 2  | 5   | 2  | 2  | 2  | 2  | 2  | 3    | 1               | 1    | 26 |
| 年  | 現行指導要領  | 5    | 3  | 6   | 2  | 2  | 2  | 2  | 2  | 3    | ク1              | 学1   | 29 |

|        |      |      |      |
|--------|------|------|------|
| 探求学習   | 145  | 145  | 129  |
| 環境学習   | 45   | 39   | 54   |
| 国際理解学習 | 25   | 31   |      |
| 人間学習   | 35   | 35   | 35   |
| 選択総合学習 | 40   | 40   | 40   |
| 生活実践学習 | 197  | 198  | 198  |
| 儀式的活動  | 13   | 11   | 13   |
| 自治的活動  | 175  | 180  | 176  |
| 健康安全活動 | 9    | 7    | 9    |
| 全合計    | 1080 | 1080 | 1080 |

## (2) 各4領域における内容編成の特質

### (2) - 1 身体健康領域

#### ア. 目標

この領域の目標を、「自分の身体を知り、健康の保持増進を図るとともに、自分の体の動きをイメージし、具体的に表現していくための身体操作能力を身に付ける」と設定している。

#### イ. 内容

そして、このために、内容として、大きく①「保健体育学習」と②「健康安全活動」の2つが設定されている。このうち、「保健体育学習」には、内容として4つの学習要素(スコープ)を、すなわち「からだ」(進んで運動に親しむ態度や能力、各種運動の基礎的基本的な動きの学習)、「こころ」(人間相互の関係についての正しい理解、望ましい態度や行動の仕方の学習)、「表現」(日本古来の伝統文化や世界の民族文化に親しみ、交流できることの学習)、「健康生活」(健康な体の保持増進を考え、健康の課題についての正しい認識の育成)を設け、それぞれの内容を、小1～3学年、小4～中3学年の発達区分に応じて具体化している。

他方の「健康安全活動」は、幼稚園では「総合的な遊び」→小1～6学年の「生活実践活動」→中1～3学年の「生活実践学習」として実施されることになる。

### (2) - 2 心の表現領域

#### ア. 目標

この領域の目標を、「記号や技術を使い、自分の思いや考え、夢や願いなどを豊かに表現するとともに、表現を通して思考操作を学び、自己や外界などの認識を深める」と設定している。

#### イ. 内容

内容としては、大きく3つの系統が設けられている。

①一つは、小1～3学年での「想像表現学習」→小4・5学年の「創造表現学習」→小6～中3学年において「音楽学習」と「美術学習」とに分化するという分野である。

そして、「想像・創造学習」のためには、内容決定のために4つのスコープが、すなわち、「感覚」(自然や事物と感覚的に交流し感応する活動)、「ファンタジー」(子ども



の心の現象を対象化させるための活動)、「ふれあい」(人や自然とふれあい、表現・発表する場)、「生活」(家庭生活や学校生活を楽しく豊かにするための表現活動)が設定されている。

「音楽」では、子ども独自の表現活動を重視するという立場から、歌唱・器楽・鑑賞の領域を「創作」表現するという学習領域を新設している。

「美術学習」では、造形性という視点を重視するとともに、高学年以降の発達特性や従来の美術領域では包み込めないような美術的活動や作品群の発展等を考慮するところから、横軸に「造形要素」を、縦軸に発達特性を考慮した「造形活動における能力」を整理しながら造形活動能力一覧表を作成している。

②二つめは、小1～中3学年にかけての「国語学習」である。そして、ここでは、従来の「始めに教材ありき(教科書があるから学ぶべき内容がある)」から転換し、子どもが自ら学ぼうとする言語活動を重視するために、目標を「子ども自らの思いや考えを表現するために、ふさわしい言葉を選び、言い表し、書き表し、伝え合う態度と能力を育て、心と言葉をみがく学習」と設定している。

そして、このために、スコープとして、現代的課題を含むように、「ことば」(語句や文、文章、表現や伝統技術、日本語の様々な表現方法等)、「人間」(人々相互のつながりの理解、命を尊び平和な地球を愛し、広く働きかける、よりよい人間関係や社会との接し方等)、「自然」(変化する自然や地球環境の仕組みと私たちの生活との結び付きの理解とよい接し方、地球環境問題の理解と国際社会への働きかけ)、「情報」(情報の収集・整理・選択・活用・情報を生み出し伝える)、「国際」(国際社会のひと・もの・ことと日本文化への興味・関心、開かれた心で接する、古典を中心に日本文化にふれ、創造し伝える)の5つを設定している。

③三つめは、「英語学習」である。そして、現行学習指導要領の方向に沿い、目標を「英語を理解し、英語で表現する基礎的な能力を養い、英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てると共に、言語や文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を培う」と設定している。そして、このために、小学校における国際理解学習の一環として英語に親しむ活動、中学校における英語を積極的に使う学習に力点を置いている。

## (2) - 3 環境探求領域

### ア. 目標

この領域の目標を、「自分を取り巻いている自然的、社会的、そして人間的環境に対して、自律的に働き掛け科学的な見方や考え方を深め、その価値を見だし、自らの生き方や生活をより良い方向に導いていこうとする力を育てる」と設定している。

### イ. 内容

そして、この領域に属する全ての学習(後出)に共通のスコープとして、「国際性」(人と人とのかかわり、地球人的資質からの人間性、文化を重視する視点)、「生活性」(生活に根ざし、生き方に還元する視点)、「感性」(体験的で豊かな感性、感性への働き掛けを重視する視点)、「科学性」(社会的、自然的関係認識、科学的な学びの育成を重視する視点)を設定し、幼稚園～中3学年にかけて次のような学習展開を展開している。

すなわち、前期教育の幼稚園における「総合的な学び」→前期教育後半(小1-3学

年)における「生活表現学習」→後期教育前半(小4-5学年)での「環境学習」と「人間学習」への分化→さらに、後期教育後半(小6-中3学年)における「理科学習」と「技術・家庭学習」と「社会学習」への分化、といった展開である。

①なお、4ヶ年にわたる「社会学習」として、第Ⅰ期(準備期間:小5学年1月~3月)における、環境学習と人間学習にまたがる“総合学習”(後出)＝「くらしと社会の結びつき」の問題解決学習を展開→第Ⅱ期(小6学年4月~中1学年8月)における、「人々の様々な営み」の“探求学習”(後出)を中心に地理的分野、歴史的分野の関連学習→第Ⅲ期(中1学年9月~中2学年12月)での、地理的分野、歴史的分野の各内容の問題解決学習の展開→第Ⅳ期(中2学年1月~中3学年)での、公民的分野における問題解決学習の展開、といった計画が示されている。

②「理科学習」では、社会文化の中での科学的内容の価値や必要性を認め、問い直す立場を重視し、そのため、スコープとして、「生活・技術」(日常生活に見られる自然的現象とその人間生活・技術の適応範囲や限界)、「地球」(地球上や宇宙の諸現象と日常生活との関連)、「変化・エネルギー」(物理・化学的内容と日常生活における利用)、「生命」(生活や生体をベースにした健康問題、脳死、エイズ問題など生命倫理や価値観、科学的適用)を設定している。

③「技術・家庭学習」では、科学技術と生活環境という2つの柱を中心に、新たな窓口として「A物質・材料と総合加工」「B機械・エネルギー」「C電気と電子・情報」「Dライフサイエンスと技術」という4つのスコープを新たに設けている。

そして、4ヶ年にわたる学習の1年目(小6学年)では、中学校3年間での全学習の基礎を養う時期ととらえ、体験的・直感的な題材を導入した学習を展開することになっている。

## (2) - 4 数理表現領域

この領域では、小1~中3学年にわたる「算数・数学学習」がイメージされているのであるが、その目標を「定義:身の回りの事物や現象を、数量・形の観点からとらえ、数・量・形・関係・論理に関する記号を使って、処理・表現しながら、関心・意欲・態度、考える力、知識・技能を高める」と設定している。

そして、内容的には、従来の算数・数学の内容が維持されている。しかし、従来の扱いが、生活から遊離していた点を反省し、生活の中から題材を見つけ、学んだ事柄を生活に戻すという方針から、それらの内容や学習順序を整理し直すことがめざされている。このため、前期教育後半(小1~3学年)では「生活」「ゲーム」を、後期教育前半から後半(小4~中3学年)では、さらに「創造」を加え学習活動(内容)を再構成している。

## (2) - 5 探求学習

ア、「総合学習」(小学校)は、いうなれば方法的・操作的概念であり、“総合学習単元化”による学習として規定されている。具体的には「単元学習」と「選択活動」と「生活実践活動」より構成されている。

- ・このうち、「単元学習」は、上記のような各教科の学習指導において、“一つの学習の要素(内容=筆者注)で単元が構成される”場合を指す、としている。
- ・「生活実践活動」(小学校)は、子どもたちが自ら自治的な活動(イベント、オーブ

ンタイム、ルール)の計画を立て準備や運営を行っていく活動の場である。そして、中学校では「生活実践学習」と命名され、ここでは、生徒が自治的活動・安全学習・行事等とそれらを円滑に運営し参加するための準備・会議を行うことが目指されている。

イ。「探求学習」(中学校)は、今日的な教育課題でもある「環境・国際理解」「人間」「選択」という3つに焦点をあてた学習であり(直接的には、今日的な課題をいろいろな教科の専門的な内容をクロスカリキュラムとして関連的に指導する「環境学習」と「国際理解学習」が該当)、小学校第6学年の「探求単元」(環境・国際・人間を主題とする)と連続している。また、「選択」は小学校の「選択活動」と連続している。

#### < 6-5 東京都千代田区立錦華小学校の場合 >

##### (1) 全体的特質

同小で開発された教育課程の全体的な特質を紹介すれば、次図のようである。なお、

( )内は、現行の年間授業時数の削減率を%表示している。

| 学年 \ 教科 | 国語             | 算数            | 体育            | 生活 | 表現  | 人間 | 環境  | 特活            |
|---------|----------------|---------------|---------------|----|-----|----|-----|---------------|
| 第1学年    | 238<br>(-22.2) | 136<br>(-0.0) | 102<br>(-0.0) | 34 | 136 | 68 | 102 | 102<br>(+200) |
| 第2学年    | 245<br>(-22.2) | 175<br>(-0.0) | 105<br>(-0.0) | 35 | 140 | 70 | 105 | 105<br>(+200) |
| 第3学年    | 210<br>(-25.0) | 175<br>(-0.0) | 105<br>(-0.0) | 35 | 140 | 70 | 175 | 105<br>(+200) |
| 第4学年    | 210<br>(-25.0) | 175<br>(-0.0) | 105<br>(-0.0) | 35 | 140 | 70 | 175 | 105<br>(+100) |
| 第5学年    | 210<br>(-0.0)  | 175<br>(-0.0) | 105<br>(-0.0) | 35 | 140 | 70 | 210 | 105<br>(+100) |
| 第6学年    | 210<br>(-0.0)  | 175<br>(-0.0) | 105<br>(-0.0) | 35 | 140 | 70 | 210 | 105<br>(+100) |

同小によれば、上記のうち、国語、算数、体育、特別活動は現行の枠組みに沿っているとされているのであるが、しかし、年間授業時数をみると、国語では第1~4学年にかけて週2単位時間分が削減されている。算数、体育は時数も現行通りである。他方、特別活動においては、逆に、第1~3学年では現行の週1から週3単位時間へ、第4~6学年では週2から週3単位時間へと、それぞれ増加している。

なお、同小の研究開発学校の指定は平成3・4年の2ヶ年であったためであろうか、平成元年の学習指導要領によって新設されることになった「生活科」は、同小では新設教科として取扱われている(後出参照)。

##### (2) 開発された新教科の特質

###### (2)-1 環境科

#### ア. 目標

同小は、この教科の新設理由を「今、環境問題は、全人類の将来の生存と繁栄にとって重要な課題である。・・・児童も・・・環境問題に対して一応の関心を持ち、知識としては近い将来に遭遇するであろう生活の危機を予感しているように見える。しかし、日常生活そのものは、知り得た知識とは別に、目先の便利さと楽しさに流されたものに終わっている。そこで、このような児童に、人間を取り巻く環境に直接触れる体験を通して、自分達の生活は自然・社会・文化と互に関連を保ちながら強く結びついていることを鋭く感じ取り、知覚する感性と理解力を系統的に養いたい。更に、自分達に直接関わりのないところで起きている出来事も他人事とせず、自分の生活と関連づけて見たり考えたりして、よりよい環境保全の方向を目指して行動できる児童を育てたい」と説明している。

そして、このため、この教科の目標を「自然や社会・文化に関心を持ち、それらの変化のようす、及び現状を理解するとともに、未来に向けてそれらのよりよいあり方を考えようとする態度を養う」と設定している。

#### イ. 内容

スコープとして「A自然事象」「B社会事象」「C文化・伝統」「D環境・保全」の4領域を設け、各領域ごとに、第1～6学年別の指導内容を具体化している。

### (2) - 2 表現科

#### ア. 目標

同小は、この教科の新設理由を「自己の内面を表現する技能を身に付け、適切な方法で他人に伝えようとする態度と豊かな情操を養う」—「・・・自己表現力育成の具体的な方法として、現行の音楽・図工をはじめとする芸術教科の枠をさらに広げ、ディベート、文章、舞踊・演劇からパフォーマンスまで、児童の発達段階に即して、総合的に表現活動に取り組めるよう」配慮するところから、と説明している。

そして、この教科の目標を「自分を見つめ、心身の高揚と豊かな自己の確立を図るとともに、自分の感情や思考をさまざまな方法で表すことの喜びを体得したり、目的や意図に応じて適切に表現できる力を養う」と設定している。

#### イ. 内容

現行の音楽、図工のそれも視野に入れながら、スコープとして「A創作・創造」「B鑑賞」「Cミュージック・ベーシック」「Dアート・ベーシック」「Eパフォーマンス・ベーシック」の5領域を設け、各領域ごとに、低一中一高学年別の指導内容を具体化している。

### (2) - 3 生活科

#### ア. 目標

同小は、この教科の新設理由を「児童が生命を維持し、社会の中に生きる個人として、自立した生活を送ることができるようになる」—「児童に、身近な日常生活に目を向けさせ、生きていくために必要な学習内容について考えさせたい。規則正しく、節度と規律ある生活の大切さ、自分の身体は自分で守ると同時に、より丈夫に育てていこうとする態度を持つことの重要性、生活するために知っておかなくてはならない様々な知識や技能の

必要など、・・・一人一人の児童が、社会の中で自立した個人として健全な生活を送ることができるような知識や技能及び実践力を養うことをねらい」とした、と説明している。

このため、現行のそれとはやや趣を変え、この教科の目標を「児童が、現在及び将来にわたって、人間として健全な生活を営むために必要な基礎的な知識や技能を養い、自立できる能力を養う」と設定している。

#### イ. 内容

このため、内容も現行のそれとは異なり、スコープとして「A規則正しい生活」「B健康で安全な生活」「C節度ある生活」「D食生活の意義とバランスのよい食事」「E衣服の動きと整え方」「F快適な住まい」「G情報活用の仕方」の7領域を設け、各領域ごとに、第1～6学年別の指導内容を具体化している。

### (2) - 4 人間科

#### ア. 目標

同小は、この教科の新設理由を「国際化、高齢化がより進んでいく社会をむかえ、人と人とが交わる生活の重要性が見直されてきている現在、無関心、無感動等、ますます希薄になる児童の人間関係を改善していくことは大きな課題である。・・・人間科では、講師による英会話や手話・点字の学習、地域の人々との交流、ボランティア活動などの実体験学習を通して、系統的、発展的に人間としての在り方や人間同士のつながりを追求させたい。・・・人間尊重の精神を基に、生きることのすばらしさや生命の尊さ、人の心の温かさに気付き、積極的に他の人々とかかわっていくことができる児童を育てることを目指した」と説明している。

このため、この教科の目標を「生命に対する畏敬の念を基に、自他を大切にし、共に協力して生活することを通して人間愛の精神を養い、さらには、全人類に対する畏敬の念を育てる」と設定している。

#### イ. 内容

このため、スコープとして「A生命に対する捉えかた・接し方」「B人に対する接し方」「C家庭の中での自分」「D学級・学校の中での自分」「E地域社会の人々や日本人としての支え合い」「F外国人と日本人との支え合い」「Gいろいろな時代にきた人々の生き方」の7領域を設け、各領域ごとに、第1～6学年別の指導内容を具体化している。

### (3) カリキュラムマトリックスの作成

なお、同小は、既に前節で検討されたように、各教科の指導内容をそれぞれ別々ではなく、児童の思考の流れ（自ら課題を設定し主体的に追究していく活動）を重視した学習指導を展開するために、学習のねらいや内容、身に付けさせたい力に対していくつかの教科・領域での関連する指導内容を組み合わせる編成する指導計画は「カリキュラムマトリックス」を作成していることも注目される。縦列に中心にする教科の単元の指導計画を、そしてそれに対応する形で横列に他教科・領域を配置し、縦・横を関連させながら指導内容を配置していくわけである。

< 6 - 6 福岡教育大学教育学部附属福岡小学校の場合 >

(1) 全体的特質

同附属小で開発された教育課程の全体的な特質を紹介すれば、下図の通りである。

| 区 分       |          | 第1学年     | 第2学年     | 第3学年     | 第4学年     | 第5学年     | 第6学年    |
|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|---------|
| 各教科の総授業時数 | 国 語      | 238 (7)  | 245 (7)  | 210 (6)  | 210 (6)  | 175 (5)  | 175 (5) |
|           | 算 数      | 136 (4)  | 175 (5)  | 175 (5)  | 175 (5)  | 175 (5)  | 175 (5) |
|           | 生 活      | 102 (3)  | 105 (3)  |          |          |          |         |
|           | 生活環境     |          |          | 210 (6)  | 210 (6)  |          |         |
|           | 社 会      |          |          |          |          | 105 (3)  | 105 (3) |
|           | 理 科      |          |          |          |          | 105 (3)  | 105 (3) |
|           | 家 庭      |          |          |          |          | 70 (2)   | 70 (2)  |
|           | 表 現      | 136 (4)  | 140 (4)  |          |          |          |         |
|           | 音 楽      |          |          | 70 (2)   | 70 (2)   | 70 (2)   | 70 (2)  |
|           | 図 工      |          |          | 70 (2)   | 70 (2)   | 70 (2)   | 70 (2)  |
|           | 体 育      | 102 (3)  | 105 (3)  | 105 (3)  | 105 (3)  | 105 (3)  | 105 (3) |
| 道徳・学級活動   | 68 (2)   | 70 (2)   | 70 (2)   | 70 (2)   | 70 (2)   | 70 (2)   |         |
| ク ラ ブ     |          |          |          | 35 (1)   | 35 (1)   | 35 (1)   |         |
| 総 授 業 時 数 | 782 (23) | 840 (24) | 910 (26) | 945 (27) | 980 (28) | 980 (28) |         |
| 現行総時数との差  | -68      | -70      | -70      | -70      | -35      | -35      |         |

表より、いくつかの特質を挙げれば、次のようなことがいえよう。すなわち、

- ①国語の時間は第1～4学年では週2単位時間分の減少、第5～6学年では週1単位時間分の減少になっている。
- ②算数、理科、社会、生活、家庭、音楽、図工、体育では、各学年とも、現行の年間授業時数と同じになっている。
- ③新設教科、領域をみると、「生活環境科」（第3・4学年）には週6単位時間分が、「表現科」（第1・2学年）には週4単位時間分が、領域「人間」には（表中の道徳・学級活動参照）、各学年とも、週2単位時間分が、それぞれ配当されている。

(2) 新設教科の特質

(2) - 1 表現科

ア. 目標

同附属小は、この教科の新設理由を「・・すべての教科に発展していく多様な表現活動の経験を豊かにしながら、創造的に自己表現する喜びを味わわせていくことが小学校低学年に必要である」と考えたから、と説明している。

このため、目標を「多様な表現活動を重視し、豊かに感じ取り創造的に表現していく喜びを味わう子供を育てる」と設定している。

イ. 内容

内容としては、言葉、声、動き、音、材料等の表現活動と、言語、身体、音楽、造形などの表現方法とを組み合わせながら、大きく「A中心となる表現素材や表現方法で表す」と「B表現経験を生かして様々な表現方法で表す」に再編し、第1、2学年別に内容を具体化している。

## (2) - 2 生活環境科

### ア. 目標

同附属小は、この教科を低学年の生活科の継続としてイメージしているが、その新設理由を次の2つに、すなわち、①子供が「自分が生活している身近な環境の中での自分自身の在り方や生き方を考えさせ、自分が生活している環境へ主体的にかかわっていかこうとする態度を育てていくという教科の必然性」、②「もっと生活に密着した、子供が調べることに関心が喚起されるような、また、学習したことを生かしていけるような内容・・・身のまわりの社会事象や自然事象には、社会問題になっていること、社会的関心を高めていること、生活の中によりよく活用できること・・・そういった内容を生活環境科に求めている」こと、に求めている。

このため、目標を「生活事象との関わりを重視し、生活環境とのよりよい関係をつくり出す子供を育てる」と設定している。

### イ. 内容

内容選択の視点として、生活科の内容選択の視点との関連も考えながら、「A生命」「B季節・自然」「C健康・安全」「D地域の歴史・文化」「E社会的奉仕」「F生産・消費」の6領域を設定し、第3、4学年別に内容を具体化している。

そして、学習指導においては、一つの対象やテーマのもとに、各教科・領域の内容を関連させた指導を展開している。

## (2) - 3 領域「人間」

### ア. 目標

同附属小は、最近のいじめ問題や若者の自殺等の社会的な問題の解消を意図して、これを「人間の生き方・在り方」という心の教育の充実の必要だと受け止め、この領域を道徳の時間と特別活動（特に学級活動）との一体化を図る総合的な学習として構想している。

このため、ここには、①これまでの道徳の時間の学習が「自己の価値観の振り返り」に重点がおかれていたことを改め、具体的な活動から内面的資質を耕したり、学習成果を具体的な活動や道徳実践として行うこと、②社会的・集団的体験の場を組織し、自分を取り巻く人間の生き方を見つめる活動や集団での実践活動を通して、感性や実践力、社会性や協調性を高めていくこと、といった2つの願いが込められている。

そこで、目標も「人にかかわる体験活動とその経験化をはかることを重視し、ともに生きることの喜びを味わい豊かにする子供を育てる」と新たに設定している。

### イ. 内容

内容として、「自分」「仲間」「生命」「福祉」「国際協力・理解」「環境」の6つの学習対象領域を設け、学年別に内容を具体化している。

また、方法としては学級活動及び教科で培った学習意欲を学級活動を通して実践する活

動と道徳の学習を「総合単元的道徳学習」として一体化した指導を展開している。

### (3) 現行教科の見直しの特質

他方、同附属小は、現行教科の枠組みは残しつつも、それらの内容の見直しにも取り組んでいる。その特質を紹介すれば、下記のような特質がみられる。

①国語においては、従来分断されがちであった理解と表現の言語活動の統合を意図して、目標を「子供主体の言語活動を通して、個性的に理解し創造的に表現する能力を育てるとともに、思考力や想像力及び豊かな言語感覚を養い、国語に対する関心を深め、国語を尊重する態度を育てる」と捉えなおしている。

そして、このために、情報の受信→創造→発信という情報操作の過程を基に低→中→高学年別の内容（言語活動）を抽出し、具体的な「単元」の展開過程に現行内容を配置しながら、一部に他教科内容も関連させながら、見直し・削減を行っている。

②算数科においては、現行の目標を維持しながらも、子供が「数」「量」「図形」「数量関係」の4つの対象に働きかける価値ある「数学的活動」を計11抽出し（例えば数を数える、加減乗除の計算をする等）、これを基に現行内容を各学年別に再配分している。

③生活科も現行の目標を維持している。そして、保護者へのアンケート等をもとに、特に「自然とかかわる活動」と「人と深くかかわる活動」及び「対象への愛着の深まる活動」を重点的な価値ある活動（内容）と定め、単元の構成、配列に努めている。

④社会科は、「生活環境科」から発展することもあり、第5・6学年に位置づけられている。そして、ここでは、子供が積極的に地域にかかわり、よりよい地域社会をつくりだしていく実践的な態度を育てたいところから、目標を「自分の地域と我が国の国土や歴史とのかかわりに関心をもたせ、社会に対する主体的な見方・考え方を養うとともに、国際社会に生きる民主的、平和的な社会の形成者としてよりよい社会をつくりだしていく実践的な態度を養う」と捉えなおしている。

このため、内容としても、大きく、地域の人物の問題解決の仕方を調べて理解する内容、及び子供が社会とのかかわりについて考える内容、の2つを視点から現行内容を見直している。

⑤理科も、社会科と同様に「生活環境科」からの発展教科とされ、このため、現行目標を見直し、「自分と自然事象とのかかわりに関心もち、観察・実験などを通して問題解決を図るなかで科学的な見方や考え方を養うとともに、自然とのよりよい関係をつくっていかうとする実践的な態度を育てる」と捉えなおしている。

内容としては、大きく2つの視点から、すなわち、生活環境科の発展として、個々の事象の知識を増やすよりも、個々の事象のつなぐ共通のきまりを学習対象とする、及び自然事象のもつ性質やきまりそのものよりも、子供がそれらに働きかけ問題解決する3つの活動（生物とその環境へのかかわり、物質とエネルギー、地球と宇宙へのかかわり）を内容とする、という2つの視点より、現行内容を再構成している。

#### ⑥家庭科

子供が家族の一員として家庭生活に働きかけ豊かな家庭生活を創り出すことを願い、目標を新たに「家庭生活に関する実践的な活動を通して、日常生活に必要な情報を生かすとともに自分の生活に対する見方・考え方を養い、家族の一員として家庭生活をよりよくし



ようとする実践的な態度を育てる」と設定している。

このため、内容においても、子供が家庭生活から課題を見つけ情報を収集し、課題解決に取り組み、実践するという働きかけを行う対象として「家族の生活と被服」「家族の生活と食物」「家族の生活と住居」を設け、現行内容を再構成している。

### ⑦音楽科

子供が生涯にわたって音楽と関わり、楽しみ、音楽を生活のなかに生かしていくことを願って、目標を「創造的な音楽活動を通して、音楽に対する豊かな感性と音楽性の基礎を培うとともに、生涯にわたって音楽を愛好する心情を育て、豊かな情操を養う」と捉えなおしている。

このため、内容も、活動をもとに、各学年の内容を「聴く活動」「歌う活動」「学期を弾く活動」「音楽をつくる活動」の4つに整理・構成し直している。

### ⑧図画工作

現行の表現と鑑賞領域を多様な造形活動として一体化した指導を重視するところから、目標も「多様な造形活動を通して、造形的な感性と創造性の基礎を培うとともに表現する喜びを味わわせ、豊かな情操を養う」と改めている。

このため、各学年内容を「材料をもとにした造形遊び」「表したいことを絵や立体に表す」「つくりたいものをつくる」の3つに構成し直している。

### ⑨体育科

生涯体育の立場から、子供が運動の楽しさを享受し、また運動への主体的な態度を育成するところから、目標も「運動の経験や心身についての理解を通して、運動する喜びを味わわせるとともに、健康の増進と体力の向上を図り、生涯において運動を志向し、健康で明るい生活を営む態度を育てる」と改めている。

そして、運動内容を「走・跳・投・泳」「用具（手具）」「固定施設」「器械・器具」「表現」に再構成し、それぞれの内容において克服型活動、達成型活動、競争型活動、表現型活動を展開している。

## < 6-7 静岡県函南町立東小学校・東中学校の場合 >

### (1) 全体的特質

同小で開発された教育課程の全体的な特質を紹介すれば、以下の通りである。なお、表中、下欄の数字は、現行の年間授業時数の削減率を%表示している。

| 教科<br>学年    | 国語          | 社会          | 算数<br>数学    | 理科          | 音楽          | 図工<br>美術    | 家庭<br>技家    | 体育<br>保体    | 英語          | 道徳          | 生活<br>交流 |
|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|----------|
| 小学校第<br>5学年 | 205<br>-2.4 | 95<br>-9.5  | 175<br>0.0  | 95<br>-9.5  | 60<br>-14.3 | 60<br>-14.3 | 60<br>-14.3 | 105<br>0.0  |             | 25<br>-28.6 | 205      |
| 小学校第<br>6学年 | 205<br>-2.4 | 95<br>-9.5  | 175<br>0.0  | 95<br>-9.5  | 60<br>-14.3 | 60<br>-14.3 | 60<br>-14.3 | 105<br>0.0  |             | 25<br>-28.6 | 205      |
| 中学校第<br>1学年 | 170<br>-2.9 | 136<br>-2.9 | 102<br>-2.9 | 102<br>-2.9 | 68<br>-2.9  | 68<br>-2.9  | 68<br>-2.9  | 102<br>-2.9 | 102<br>-2.9 | 17<br>-51.4 | 166      |

表中よりうかがえるように、小学校では算数と体育を除く各教科、道徳の年間授業時数

を2.4～28.6%の範囲内で削減し、他方、中学校では各教科より一律に2.9%削減し、そして、道徳を51.4%削減している。また、新設の「生活交流」には、小学校第5・6年には、それぞれ年間に205（週5.86）単位時間、中学校第1学年に166（週4.74）単位時間が配当されている。

なお、同小の年間総授業時数は、既に検討したように、小学校第5・6学年は1085（現行は1015）、中学校第1学年は1101（現行は1050）であり、現行よりも増加している。このため、このようにして各教科、道徳より削減した時数分に、さらに上積みして「生活交流」の時間を確保している特質がうかがえる。

## （2）新領域「生活交流」の特質

### ①目標

前節に検討されたねらいや趣旨を反映して、新設領域<生活交流>の目標は次のように規定されている。すなわち、「具体的な活動や体験を通して、自己を見つめ、社会生活への関心を高めるとともに、よりよい生活を築くために必要な知識、技能、習慣を身に付けさせ、社会の形成者としての基礎を養う」と。

### ②内容

以下の内容が構想され、各学年別に系統的な活動が展開されている・

ア. 集団活動を通して、自分と他の人のよさをみつける活動

イ. 学級や学年の所属を離れ、自らの興味・関心を基に自分の課題をみつけ、その解決を図る活動

ウ. 地域社会に積極的にかかわる活動

エ. 世界を見つめ、国際理解を深める活動

## （3）国語科及び算数・数学科の再検討

### ①国語科

同小では、国語科で育てたい<表現力>と<論理的な思考力>を具体化し、これを現行学習指導要領の「表現」「理解」「言語事項」との関連に配慮しながら、その内容を、小中連携による学年の発達段階別に整理している。

そして、その結果、両能力育成のため、新たな指導内容として、小学校は音声言語重視の立場から「話しことば」（30時間）を、中学校では豊かな表現力育成の視点から、指導内容を見直し、「総合単元学習」を展開している。

#### <註>

- ・表現力：言語を用いて、主題・要旨を明確にし、適切かつ意欲的に表現する能力
- ・論理的な思考力：言語活動において、根拠を基に自分の考えを明確にし、筋道を立てて考える力

### ②算数・数学科

算数・数学科で育てたい<論理的な思考力>と<表現力>を具体化し、内容を再検討するとともに、その成果の一環として、小学校5-6-中学校1の移行期の「図形」領域において論理的な思考力の基礎を育成することから考えると、現行の小6の指導内容には、これに結び付く内容が少ないことが分かり、「図形領域の新カリキュラム」を作成するに

至っている（すなわち、小6に「三角形、四角形の相互関係」の新設、平面図形の理解のうちの「線対称、点対象な図形概念、性質、かきかた」は残しつつも、「拡大図、縮図概念、かき方、縮尺」を中2の「相似な図形、相似の応用」での扱いに移動する）。

<註>

- ・論理的な思考力：正しいと分かっている事柄（定義・定理・法則・基本性質・学習で得られた具体的事実）を根拠にして、筋道の通った考え方（筋道を立てて結論を導き出したり、結論を確かめたり、思考過程を順序良く人に説明するときにはたらく力）の通った考え方をする能力
- ・表現力：目的に応じて、簡潔で、しかも明確に表現する能力。次の2つの場面で育成できる。

ア．日常生活での事象や文章で書かれた内容や空間概念などから、数量関係や本質や図形的解釈を見出し、数学的にとらえる場面

イ．数学的に考察した思考の過程や結論を言葉、図、文字、記号、用語、式表、グラフなどを使って数学的に表現する場面

#### <6-8 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜小学校の場合>

##### (1) 全体的特質

同附属小は、前節で明らかにされたように、現行の教育課程の枠組みはそのままに維持しながら、現行内容の精選の研究に取り組んだわけであるが、その結果、明らかにされた各教科別等にみられる年間総授業時数を見ると、現行のそれと比べ、次のような時数上の削減の特質がみられる。

- ① 第1学年の、すべての教科、道徳、特別活動の年間総授業時数は、現行のそれから5.9%単位時間分削減されている。
- ② 特別活動を除き、第2～6学年のすべての教科、道徳の年間総授業時数は、現行のそれから8.6%単位時間分削減されている。
- ③ 特別活動の年間総授業時数は、現行のそれに比べ、第2・3学年では8.6%単位時間分、第5・6学年では11.4%単位時間分削減されている。

##### (2) 精選の特質

同附属小は、前節で検討されたように、「共に学びをつくりあげる力」＝「自己決定力」「自己責任能力」「かかわり合う力」の育成という視点から、現行の学習指導要領の内容の精選に取り組んだわけであるが、その研究成果の特質を一覧すれば、次図の通りである。

なお、その際、同附属小は、以下の4つの視点よりみた時の現行内容との対照関係を報告書に掲載しているのであるが、以下では、このうち、削減内容（×印）と新設内容（◎印）を中心に紹介することにした。

- |                         |
|-------------------------|
| ○・・・現行のもので横小プランにあるもの    |
| △・・・現行のもので横小プランで選択可能なもの |
| ×・・・現行のもので横小プランにはないもの   |
| ◎・・・現行のものではなく横小プランにあるもの |

① 算数の場合

|    | 移動内容                                   | 削除(×)                   |
|----|--|-------------------------|
| 1年 | ・2年から「時刻と時間」                           | ・「広さくらべ」                |
| 2年 | ・「時刻と時間」を1、3年に分けて移動<br>・そろばんは教具として扱う   |                         |
| 3年 | ・「重さ」を4年へ(理科のてんびんとの関連)<br>・2年から「時刻と時間」 | ・「円と球」の内容<br>の「球の扱い」    |
| 4年 | ・6年から「比例」 ・3年から「重さ」                    |                         |
| 5年 | ・「百分率」(表現)を6年へ<br>・「帯・円グラフ」を6年へ        |                         |
| 6年 | ・「比例」を4年へ                              | ・「立体の表面積・<br>体積」 ・「反比例」 |

② 他の教科の場合

| 教科 | 学年 | 削減内容(×)   | 新設内容(◎)   |
|----|----|---|---|
| 社会 | 3年 | ・地域の地形土地利用・交通の様子・自然環境   | ・地域の福祉施設との交流・ボランティア活動<br>・地域をよりよくしていく実践的な活動   |
|    | 4年 | ・地域の飲料水・電気・ガスの確保<br>・県内における自分たちの市の地理的位置<br>・県の主な産業、都市、交通網<br>・県の生活と国内外とのかかわり  | ・地域の問題探し<br>・地域の公園・緑地など町をよりよくしていく取り組み   |
|    | 5年 | ・我が国の水産業<br>・我が国の工業生産・工業地帯分布・工業生産の特色<br>・我が国の運輸業・貿易の特色<br>・我が国の通信業・日常生活とのかかわり<br>・情報の有効利用<br>・我が国の国土の様子・土地利用・人口分布・資源分布・交通網・自然災害 | ・我が国の国土の様子・森林保護ボランティア<br>・地域の公園・緑地など町をよりよくしていく取り組み<br>・全てを環境とのかかわりから見る  |
|    | 6年 | ・我が国の歴史 大化の改新、大仏造営<br>・我が国の歴史 貴族を中心とした生活、国風文化<br>・我が国の歴史 室町に幕府がおかれたころの文化<br>・我が国の歴史 鉄砲、キリスト教伝来、天下統一                             | ・全ての人にとって優しい町のあり方を探る<br>・全ての人にとって優しい町 ボランティア活動<br>・外国の子どもたちとの交流<br>・世界の中の惨状、貧困と日本からのボランティア<br>・世界の中の惨状 貧困と自分たちにでき |

|    |     |   |  |
|----|-----|---|--|
|    |     | <ul style="list-style-type: none"> <li>・我が国の歴史 江戸時代の文化、暮らし、学問</li> <li>・我が国の歴史 大日本帝国憲法・日清日露戦争</li> <li>・議会政治、国民主権</li> </ul>  | ること  |
| 理科 | 3年  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・人の目、耳、皮膚</li> <li>・人の骨や筋肉</li> <li>・光による明るさや暖まり方のちがい</li> </ul>   |  |
|    | 4年  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・植物の運動や成長の天気・時刻によるちがい</li> <li>・動物の活動の天気や時刻によるちがい</li> <li>・人の活動の時刻や季節によるちがい</li> <li>・光電池</li> <li>・流れる水の働き</li> <li>・水の速さや水量による川原や川岸の様子</li> <li>・水の速さ、水量と降水量との関係</li> </ul> |  |
|    | 5年  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・衝突</li> <li>・気温の変化と太陽高度、雲、風、降水</li> <li>・太陽と月の動き</li> <li>・月の形の変化と太陽との位置関係</li> <li>・月と太陽の表面の様子</li> </ul>  |  |
|    | 6年  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・星の明るさ、色の違い</li> <li>・星の集まりの位置、向き、並び方</li> <li>・星の動き</li> <li>・1日で元の位置</li> <li>・土地の構成物と層</li> <li>・地層の出来方と化石</li> <li>・堆積岩と火成岩の粒のちがい</li> </ul>                               | ・地中の生き物  |
| 音楽 | 1年  |   | ・〈表現〉1年の〈表現〉の内容(4)のア、イを分けずに、今まで以上に重点をかけて扱う           |
|    | 1/2 |   | ・1・2年の〈鑑賞〉の(2)アをもっとふくらませる傾向                          |
|    | 3/4 |   | ・3・4年の〈表現〉の(4)のア、イを分けずに、互いに聴き合うことを大切に、今まで以上の重点をかけて扱う |
|    | 3/4 |   | ・3・4年の〈鑑賞〉の(1)は、領域とはしては削除するが、表現と関連づけ、                |

|     |  |   |
|-----|--|---|
|     |  | 現行よりふくらませる                                      |
| 5/6 |  | ・5・6年の<表現>の(4)のA、イを分けて、他の内容との関連を図る              |
| 5/6 |  | ・5・6年の<鑑賞>の(1)は、領域としては削除するが、表現と関連づけ、現行よりはふくらませる |

なお、以上は削減内容及び新設内容のみられる教科を紹介したわけであるが、同報告書には、他の教科に関しては、次のような研究開発結果の特質がみられる。すなわち、

- ・国語科の場合は、明示はされていないが、現行の全ての内容に△印がつく、とされている。
- ・生活科の場合は、現行の全ての内容に△印が付けられている。
- ・家庭科の場合は、現行の、「B食物」の5学年の食品の組み合わせ、簡単な野菜や卵料理、6学年の3つの内容(栄養を考えた食物のとり方、簡単な調理、家庭生活における会食の意義)、及び「C家族の生活と住居」の6学年の家族生活に役立つ簡単な物の製作・活用には○印が付けられている。なお、その他の全ての内容には△印が付けられている。
- ・図画工作科の場合は、現行の、1・2学年「B鑑賞」の(1)、3・4学年の「B鑑賞」の(1)、5・6学年の「B鑑賞」の(1)には○印が付けられている。その他の1～6学年の全ての内容には△印が付けられている。
- ・体育科の場合は、1・2学年の内容には全て○印が、3・4学年の「A基本運動」の走・跳、力試し、器械・器具、用具、浮く・泳ぐ運動に○印、隊列の集合、整頓、行進などの集団行動には△印が付けられている。さらに、5・6学年では、「G保健」の内容は全て○印、その他の内容全てには△印が付けられている。

## 7 運営指導委員会の構成をめぐって

各研究開発学校には、研究開発に関する指導・助言を得るために、外部の人材を「運営指導委員」として登用し、運営委員会を構成することが義務づけられている。各研究開発学校が委嘱した運営指導委員の構成をみると、そこにはどのような特質がみられるであろうか。この点を一覧したのが、次の<表10>である。

表10 運営指導委員の構成メンバー

| タイプ | 学校名  | 委嘱人数(名) | 内 訳    |        |        |         |    |
|-----|------|---------|--------|--------|--------|---------|----|
|     |      |         | 県市教委関係 | 教育センター | 園長・学校長 | 大学・研究機関 |    |
|     |      |         |        |        |        | 一般      | 教科 |
| A   | 福島附小 | 9       | 3      | 2      | 3      | 1       |    |
|     | 愛媛附小 | 10      | 1      | 1      | 5      | 2       | 1  |
|     | 大手町小 | 8       | 0      | 0      | 4      | 1       | 3  |
|     | 明石小中 | 13      | 4      | 1      | 3      | 5       |    |

|   |      |    |      |   |   |   |   |
|---|------|----|------|---|---|---|---|
| B | 錦華小  | 7  | 0    | 0 | 1 | 6 |   |
|   | 福岡附小 | 10 | 4    | 0 | 3 | 1 | 2 |
|   | 東小・中 | 11 | (不明) |   |   |   |   |
| C | 横浜附小 | 不明 | (不明) |   |   |   |   |

表より、運営指導委員の委嘱人数に関していえば、各学校とも7名～13名の範囲内にあるが、中でも、神戸大学附属明石小・中学校が13名ともっとも多く、次いで函南町立東小・中学校の11名となっている。両校とも小・中連携による研究を目指しているという特殊性によるのであろうか。

他方、委嘱された運営委員の内訳をみると、錦華小学校が大学・研究機関からの登用傾向が図抜けて高く(85.7%)、次いで大手町小学校(50.0%)となっている。これに比べ、大学附属小/小・中学校では、いずれも概して低く(38.5%～11.1%)、その分、教委・教育センター・園長・学校長といった学校関係者の比率が相対的に高くなっている。

(高浦 勝義)

### Ⅲ 情報教育の創造に向けた研究開発

#### 1. 研究開発学校の取り組みと現在の状況

##### (1) 情報教育の研究開発の流れ

情報教育に関する研究開発は、これまでの取り組みを3期にわけて考えたい。第1期は学校教育に情報教育を取り込むことに関して試行した昭和63年から平成2年の現行学習指導要領の実施までの期間の研究開発である。第2期が学習指導要領実施中の平成6年頃までのコンピュータ等の導入が進んでインフラ整備が中学校を中心に行われ、技術科情報基礎領域が定着する期である。第3期は平成9年以降の次期学習指導要領における情報教育を目指した研究開発期である。この調査にはインターネットによるホームページ検索を利用した。情報教育の研究開発学校は次の通りである。

| 学校名      | 研究開発期間  | ホームページ開設 | インターネット情報からの特徴  |
|----------|---------|----------|---|
| 滋賀大附属中   | 昭和63～平2 | ○        | 琵琶湖を調べる総合的な学習に進展<br><a href="http://www.asa.hokkyodai.ac.jp/fuzoku/fuchu/fuchu.html">http://www.asa.hokkyodai.ac.jp/fuzoku/fuchu/fuchu.html</a> |
| 長崎大附属中   | 昭和63～平2 | ○        |   |
| 北大附属旭川中  | 平2～4    | ○        |   |
| 加須平成中    | 平9～11   | ○        | http://www1g.mesh.ne.jp/heisei/<br>情報通信手段を利用した海外の学校との交流学习   |
| 長崎鶏知中    | 平3～5    | ×        |   |
| 兵庫教育大附属中 | 平4～6    | ○        |   |
| 埼玉・和光国際高 | 昭63～平2  | ○        | 情報教育を特色にしたカリキュラム  |
| 鹿児島・甲陵高  | 平9～11   | ×        |   |
| 三重・名張西高  | 昭62～平元  | ○        |   |
| 兵庫・相生産業高 | 平元～3    | ○        |   |
| 大分・情報科学高 | 平元～3    | ○        |   |

第1期は情報活用能力の育成と教科における道具的な利用や学習の個別化などコンピュータを利用した学習活動がすべて情報教育と呼ばれており、授業の中でいかに効率的に利用できるかを研究することが主であった。そのために、特にカリキュラムの変化として表面に現れたものはない。

第2期は「新しい学力観」に代表される、指導から学習の支援へ指導観が変わった時点であり、後述の長崎県の鶏知中学校のように、生徒が主体的に取り組む学習活動にコンピュータ等がどのように寄与できるかを試行する取り組みであった。

第3期は次期学習指導要領をにらんで、高校の普通科と情報科などの併設校での普通科に



おける情報教育の実施などが進められた。中学校（埼玉県の加須平成中学校）では、生きる力を具体的に育む学習活動を展開するために、「自主創造科」を創設し、生徒の「学びの構築」と「自分探しの旅」を扶ける教育を展開している。

## （２）中学校の取り組み

### 滋賀大附属中

総合的な学習（BIWAKO TIME）を通して、学年の枠を越えた学習グループを構成して、課題探求学習を実施している。その中で、情報手段が利用されている。また、1年次の選択1で国・社・数・理・英より1教科選択して課題研究を行っている。2，3年次の選択2では、音・美・体・技・家から1教科選択で、同様に課題研究を行っている。

また、2年次後期には合科的な学習を展開している。3年次には卒業研究で最終的・総合的な課題研究を行っている。このように、中学校3年間で多くの課題研究を行っており、情報教育はその中で情報手段として活用する中で行われている。

### 北大附属旭川中

平成4年度末にパソコン室を更新（生徒用22台、教師用2台）して、情報手段を活用する環境ができた。研究テーマとして「自己の持ち味を主体的・創造的に発揮し、自ら学び続ける生徒の育成」を立てて研究した。その後、思考力・判断力を育てる学習指導の実践的な研究の中で、課題づくりの工夫、課題追求の工夫、まとめの工夫に焦点をあてて取り組んでいる。

### 加須平成中

平成8年4月に加須市立加須東中から分離設立された学校で、新しい学校である。情報教育の設備としては、多種メディアの有機的結合を目指して情報センターが設けられている。情報センターはコンピュータ、図書、視聴覚機器等を備えた多目的利用が可能な施設で、複数の学級が利用できるように広いスペースを持っている。授業での利用だけでなく、個人やグループ学習での利用、集会での利用など将来を見据えて教育活動が展開できるように工夫している。「自主創造科」を創設し、多様な教育方法に柔軟に対応できる学習空間（学習センター）を設け、個性を育む多様な教育が展開できる。

加須平成中学校 研究開発学校公開の様子など、自主創造科の取り組み(1)

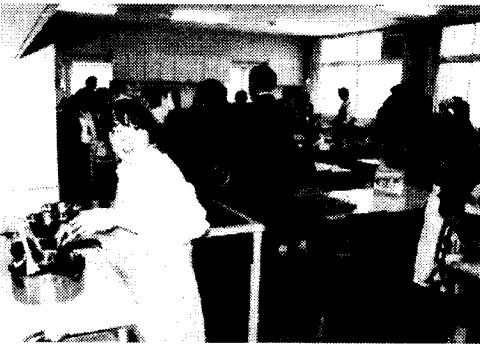
平成9・10・11年度文部省研究開発学校指定

## 文部省研究開発学校公開のようす

あらためて本校の研究(文部省研究開発学校)が全国から注目されていると実感した研究公開でした。北は北海道から、南は鹿児島まで、769名の先生方の御参加をいただき、盛会のうちに終えることができました。心より御礼申し上げます。  
新たなる時代、新たなる教育。本校の研究が多くの学校、先生方の参考になればという思いを強く持ちました。



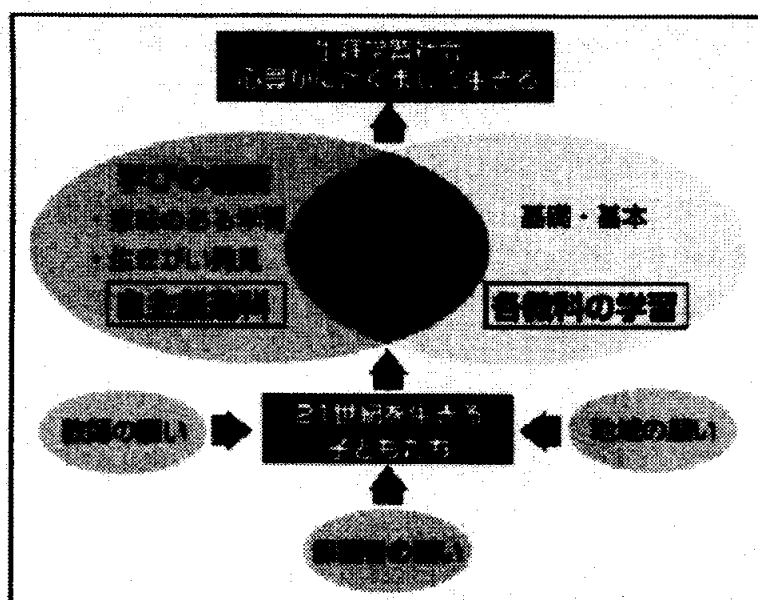
第5校時 自主創造(第2学年)公開授業のようす



<http://www1g.mesh.ne.jp/heisei/heiseinet/jisyu/991130.htm>

## 生きがいを見いだし 自ら生き抜く力を育む教育課程の創造

ひとりの人間として、生きがいと豊かな心を持ち、まわりにある課題に対して積極的に関わり、自分なりの方法で主体的に解決していく力を育みたい — 加須平成中学校では、生徒たちへのそんな願いのもとに、「自主創造科」を創設し、生徒の「学びの構築」と「自分探しの旅」を扶ける教育を展開しています。



|       |       |          |        |
|-------|-------|----------|--------|
| 自主創造科 | ホップ学習 | ステップ学習   | ジャンプ学習 |
| 年間計画  | ベース学習 | ワマーチャレンジ | 学習を支える |

[HOMEへ](#)

## 長崎鶏知中

「生きて働く確かな情報活用能力を育てる教育課程の創造」で研究に取り組み、現行学習指導要領の枠内の情報教育を研究した。情報活用能力についても、4つの内容で定義される部分を最大限に解釈して取り込んだ。ネットワーク研究、データベース研究、パールハート研究を通して地域教材の情報化と、コミュニケーション、表現活動などに情報手段を利用する活動を展開した。カリキュラムとしては、選択教科「情報生活科」を技術家庭科の時間、学校裁量の時間を合わせて、各学年70時間以上を生み出して取り組んだ。

情報生活科の構成は、情報生活基礎、情報生活表現、情報生活活用の3つの領域で取り組んだ。

## 兵庫教育大附属中

「人生をたくましく豊かに生き抜くために考え、鍛え、行動する生徒」という教育目標で指導にあたっている。学校のホームページに関しては日本語のページは1ページだけで、研究開発学校や情報教育に関する情報は全くないが、英語のページの方が充実している。Global Education Projectで韓国(ソウル)とアメリカ(ナッシュビル)などと英語でホームページを作成してコミュニケーションしている。

### (3) 中学校の情報教育の実施状況

中学校では小学校の情報教育が「慣れ親しむ」ということで情報教育を熱心に取り組んでいる小学校がある一部の地域を除いてほとんど授業で使っていない状況から、実際にはゼロスタートの生徒を対象とした情報教育となっている。現行学習指導要領の技術科では学年指定の領域があるために情報基礎領域が実際には3年前期まで行えないことから、情報活用能力を獲得する学習活動終わった時点で卒業時期になり、情報活用能力を発揮する学習場面を作りにくい。さらに多くの中学校への導入直後にWindowsへの移行が起こったことから、MS-DOSでの実施という設備の古さ、台数の少なさ、指導できる教員の少なさなどがあり、情報手段を生かした豊かな学習活動を行いにくい状況がある。

情報教育の研究開発学校では、附属学校のようにカリキュラム編成を比較的自由かつ大胆に行える学校では、多くの課題探求活動を取り入れ、その中で情報手段の活用を工夫している。そのために、情報活用能力を獲得する学習活動よりも発揮・活用・応用する活動を中心にして、必要に応じて情報活用能力を育てていく学習活動が可能になっている。

### (4) 高等学校の取り組み

## 埼玉・和光国際高

この学校は国際化・情報化を特色にした学校で昭和62年に設立された。情報処理科が2学級あり、普通科や外国語科でも「情報処理」の履修を必修化している。普通科での情報処理教育の取り入れを実践した。最近では海外の学校との交流を含めて、電子メールやホームページなど電子的なコミュニケーション能力の育成に力を入れている。

名張西高校の情報教育 情報教育を特色にして、普通科、英語科と情報科の情報教育部分のカリキュラムと情報教育環境をホームページで公開している。(その1)



## 情報教育

### 1. 本校情報科の概要

三重県立名張西高等学校は、三重県の西端、奈良県も程近い名張市の高台に位置し、普通科、英語科、情報科の3科を擁する、今年で創立14年目の学校である。

情報科においては、本校創立以来、一貫して「高度情報処理技術者の育成」を教育目標に掲げ、今日に至っている。その内容は、2003年度からの新学習指導要領における専門教科「情報」を先取りしたものと言え、工業課程の学科でありながら、その教育カリキュラムは工業に縛られず、広く将来の情報処理技術者に必要であると考えられるものを取り入れている。工業以外の設置科目例として、過去には「簿記」、「マーケティング」、現在では「情報システム」、「情報リテラシー」といったものがあげられる。

通産省の情報処理技術者試験にも毎年合格者を輩出し、第2種に留まらず、第1種にも幾名か合格している。

卒業生の殆どは、理工系大学や情報関連の上級学校に進学してゆく。

本校情報科では、常に先進的な教育実践を行い、多大な成果をあげてきた。その中の1つとして、ネットワークの運用管理に関して蓄積されたノウハウは、他の学校における運用技術の確立と普及に大いに役立つものと考え、ここにそれを報告するとともに、その情報教育環境を利用した教育実践例をいくつか紹介する。

### 2. システム環境

生徒実習用として、40人が一斉に受講できるPCラボが2室ある他、CAD、マルチメディア処理、制御技術といった、目的別に十数台ずつPCを設置した実習室が3室、さらに、すべてのHRにもPCを1台ずつ配置している。教職員用としては、各教科教官室および共用職員室に数台ずつまとめて設置している。また、職員室の各島には、ハブを設置しており、教職員個人所有のノートPCも接続できるようにしてある。これら全てあわせると、最大200台近いPCが同時に稼働していることとなる。

サーバ環境としては、WindowsNT Serverをファイルサーバやプリントサーバ等、LANの基幹サーバとして位置付けている。ディスク容量は45GBのRAIDとし、ディスク・クラッシュに備えている。webサーバやメールサーバ等、インターネットに関連する外部とのやり取りは、各パーツを厳選して自作したデュアルCPUマシンにredhat Linux 6.0を搭載して運用している。

クライアント環境は、在来のPCならびに個人所有のノートPCの大半はWindows95&98であるが、昨年度末に導入したPCについては、OSの安定性と管理者以外にシステム環境の変更ができないという点からWindowsNT Workstationとしている。HR導入のPCならびにマルチメディア処理の実習室にはその利用簡便性からiMac(MacOS)を導入している。

教材提示法について、定員40人の2つのPCラボでは、実習室の前方に約50インチのカラープラズマディスプレイまたはタッチスクリーンプロジェクタを配置して全般的な説明を行い、細部については、教師用ディスプレイ信号を2系統入力対応の生徒用ディスプレイに配信することにより、生徒は自分の画面と教師の画面を切り替えながら作業をすすめることを可能にしている。NTSC信号もRGB信号に変換できるので、ビデオ配信も行うことができる。サブモニタ方式のようにレイアウトの制約もなく、また天吊りディスプレイのような圧迫感もなく、実に使い勝手の良いシステムとなっている。

これらシステムについては、すべて自前で計画・設計・構築・運用することにより、業者依存にならないよう配慮している。また、特定の個人に依存することのないよう、組織(情報教育部)で

名張西高校の情報教育 情報教育を特色にして、普通科、英語科と情報科の情報教育部分のカリキュラムと情報教育環境をホームページで公開している。(その2)

管理・運用するようにしている。

### 3.インターネットとの接続

従来ISDNのダイヤルアップにて実現していた。接続に際しては情報科教室へ内線電話にて依頼するマニュアル接続とし、

- 不要な接続を抑制し、通信コストを削減する
- 接続要求内容の正確な把握をすることにより、今後の運用管理の基礎資料を収集する

等の目的を達成してきた。しかしながら回線速度と接続料金の問題により、現在は、Linuxサーバを、CATVを利用した常時接続環境とした。それに伴い、グローバルIPアドレスを固定して独自ドメインnishiko.ed.jpを取得し、独立サイトとして運用している。これにより、メールユーザの追加・削除・転送設定等が自由に行えるので、電子メールアドレスを全教職員と必要のある生徒に付与している(\*\*\*@nishiko.ed.jp)。

### 4.LAN環境

ファイルサーバのアクセス権を、教職員については

- 教科(読み書き可)
- 分掌(読み書き可)
- 共通(読み書き可、一部読み取りのみ可)

とし、各々r、s、tというネットワークドライブを割り当てている。例えば、担当教科が数学で進路指導部所属の教員の場合、rドライブには「数学」、sドライブには「進路指導」、tドライブには「共通」が接続される。「共通」は、教科も分掌も異なる教員間でデータを共有するために設けている。一部読み取りのみ可としているのは、各分掌から全教職員へデータを公開する際、誰もが読み書きできると、ファイルを過って削除したり上書き保存してしまう恐れがある。一例として、総務部管理の年間行事予定や、教務部管理の生徒名列にそのような事故が起きると影響が広範囲に及んでしまう可能性がある。そこで、これら各分掌から全体へ公開するようなものについては「総務から」や「教務から」といったサブフォルダをおき、そのフォルダについては、該当の分掌に所属する者は読み書きできるものの、他の分掌のフォルダについては読み取りしかできないようにしてこのような事態を未然に防いでいる。

生徒については

- 個人(読み書き可)
- クラス(読み取りのみ可)

とし、各々r、sというネットワークドライブを割り当てている。「クラス」のネットワークドライブは、主に教師側からサンプルや素材を全員に提供する際に利用している。リムーバブルメディアの実習室への持ち込みや、ローカルディスクの使用を禁じているため、これにより、生徒間でのデータ融通を防止している。

webについては、標準ブラウザとしてNetscape Communicatorを利用しているが、このプロファイルの在り処をサーバ上に設定することにより、いちいちユーザがプロファイルの選択をすることなく、ドメインにログオンしたユーザ各々の独自環境が現出するようにしている。

### 5.教職員の理解を得るために

共用職員室のPCについてはまとめて配置することにより、隣席同士質問や相談をしながら作業が進められるよう配慮した。また、PC処理→大量印刷という動線を考え、印刷室の隣に配置した。

更に、全プリンタをネットワークプリンタとし、ドメインにログオンしないことには印刷できないよ

名張西高校の情報教育 情報教育を特色にして、普通科、英語科と情報科の情報教育部分のカリキュラムと情報教育環境をホームページで公開している。(その3)

うにした。少し強引ではあるが、これにより、最初から全くネットワークを利用しないといった、所謂食わず嫌いがなくなり、ネットワーク環境の利便性理解が広く浸透した。

職員研修を年間行事予定に組み込むことで、会議等他の行事との重複を避け、計画的な研修を行えるよう配慮している。また外部講師により講習を行うことで、馴れ合いを防いでいる。

その他、県のSE派遣事業等を活用し、定期的に教職員の抱えるコンピュータに関する諸問題を解決している。

## 6.カリキュラム

普通科の生徒も情報科目を履修できるよう、選択科目に「情報科学I」という科目を置いている。主に、ワープロや表計算、プレゼンテーションや画像処理といったコンピュータリテラシー教育を行っている。

情報科では工業科必修科目の他に、「ハードウェア技術」、「ソフトウェア技術」、「プログラミング技術」、「コンピュータ応用」、「工業英語」、「情報システム」、「情報リテラシー」等を置いている。「情報システム」では、倫理・法制度・標準化・産業社会と情報化・表現技法等の教育を行っている。「情報リテラシー」では、ワープロ・表計算・プレゼンテーション・画像処理等の情報活用能力を、より伸長するための教育を行っている。

## 7.教育実践例

この情報教育環境の中で現在行われている教育実践例を幾らか紹介する。USをはじめとする英語圏の学校の生徒と電子メール文通を定期的に行うことにより、英語表現能力の向上や情報交換を行っている。

wwwを利用したものとしては、各種の調べ学習を行ったり、地域で調査研究したデータの加工・発信を行っている。これは日本語で行うのみならず、外国のサイトを利用したり、また英語版のページを作成することによって、英語力を付けることにも寄与している。

教職員もhtml形式の教材を開発し、生徒に提供している。このことにより、wwwブラウザさえ動けば、どんな端末からでも教材を利用できる。またログを調査することにより、生徒の学習軌跡を追跡できるため、生徒にとってより効果的な学習方法の研究を進めることにも役立っている。

さらに、シンガポールのタングリン中等教育学校とインターネット交流を行っているが、この中でビデオ会議を取り入れている。リアルタイムで意見の交換を行うことにより、異文化交流、英語学習を進めることに役立っている。

## 8.これから

生徒がコンピュータを利用するために、わざわざそれがある場所まで行かなくても、ちょっと使いたい時にいつでも使えるためには、生徒の居室にPCが設置されていなければならない。そのため、全HRIにiMacを1台ずつ配置した。これにより業間や放課後等に生徒が自由にコンピュータ、とりわけインターネットを利用することで、情報活用能力の向上が期待できる。高学年であれば、進路情報の検索等、進路指導上でも今後ますます活用されると思われる。これから、実際の利用状況を検討し、その活用方法についての研究を進めていきたいと考えている。

### 三重・名張西高

この学校は校内LANを構築して、パソコン室だけでなく、校長室、事務室、職員室、進路指導室、図書室、保健室、LL教室等、校内各所からサーバーにアクセスして、電子資源の共有化を進めている。情報コンセントを設置して、コンピュータの無いところでもノートパソコン等を移動して利用できるようにしている。また、CAIによる学習の個別化の取り組みも行っている。

### 兵庫・相生産業高

この学校は機械科、電気科、商業科、被服科と定時制機械科から成り、全教科における情報教育の充実と体系化及び校務のOA化に取り組んでいる。また、課題研究の推進をはかって生徒の自己教育力を高める取り組みをしている。また、教務規定、生徒指導規程の見直し及び弾力的な運用に関する研究を行って、教科、学科の枠を超えた学習活動に取り組んでいる。

### 大分・情報科学高

この学校は情報電子科、情報管理科、流通経済科から成り、全学科における情報通信手段の活用と、情報通信手段に精通した社会人の育成を目指している。マルチメディア国際交流推進事業としてイギリスのブライズジェックス高校との交流を行っている。英語のホームページでの情報発信はもとより、ブライズジェックス高校のホームページを日本語化してホームページで紹介するなど、情報通信手段を活用した海外との交流を行っている。

#### (5) 高校の情報教育の現状

基本的には普通科の情報教育と、職業教育関係の情報教育で異なる。職業教育関係の情報教育は従来から情報処理教育として行われてきたし、機械科や電子科などでは内容として多数の科目で取り組まれていた。

一方、普通科の情報教育は現行学習指導要領では数学A、数学B、数学Cで行うことにはなっているものの、それ以外の教科での利用は少なく、教師の裁量に任されている状況にあった。次期学習指導要領では「情報」が教科として立てられて、しかも必修化が決まり、様相が一変した感がある。これを実施するために、免許法の問題や実習を義務づけている状況からインフラ整備が急がれている状況にある。

## 2. 開発学校の研究成果とカリキュラム変化

情報教育に関しては、研究開発学校の成果が地域や全国に広まっていくというよりは、その学校のレベルアップにとどまっている。技術的な変化が早く、激しく、インフラ整備の状況によっても大きく異なることから、ボトムアップというよりはトップダウン的な変更が続いている。例えば、MS-DOSからWindows3.1へ、そしてすぐにWindows95、98へと大きな階段を上がった。また、ネットワークの進歩も大きく状態を変えた。スタンドアロンでの導入から教室内LAN、さらに校内LANやパソコン通信に進み、今はインター



ネットに移行している。さらには、文字中心のデータ処理からメディアミックスへ、次にマルチメディアで表現力の重視へと発展した。インフラ整備も設置台数が学校に数台の状態からグループに1台での学習へ、次いで2人に1台、そして現在の設置基準は1人1台（2人で2台など）へ移行している。また、パソコン室のみのコンピュータからオープンスペース、教科特別室、そして一部は普通教室への設置を始めている。これらの変化は、現行学習指導要領の実施中に起こったのである。このような技術とインフラの急速な変化によって、工夫したことがそれほど重要でなくなったり、できないと思っていたことができるようになったり、それによって使い方も学習活動も変わってきた。

名張西高校は普通科、英語科、情報科が設置されている。この学校のカリキュラムは、「変化の激しいこれからの社会を生き抜いていくためには、自ら考え、判断し、行動することが求められます。個人の興味・関心・進路に応じて多様な教科・科目を設け、自分で選択できる教育課程を編成しました。将来を考え、それぞれの進路目標にあった科目を選択するのはあなたです。」

と書かれているように、選択を大幅に取り入れたカリキュラムになっている。この中で情報教育に関しては、選択科目に「情報科学 I」という科目を置いている。3年次に履修するが、2通りの選択方法があって、

2単位の場合：数学C、環境科学、音楽 III、美術 III、書道 III、食物、情報科学 Iの中から1科目を選択する。

3単位の場合：数学演習、リーディング、情報科学 Iの中から1科目を選択する。

内容は、主に、ワープロや表計算、プレゼンテーションや画像処理といったコンピュータリテラシー教育になっている。

情報科では工業科必修科目の他に、「ハードウェア技術」、「ソフトウェア技術」、「プログラミング技術」、「コンピュータ応用」、「工業英語」、「情報システム」、「情報リテラシー」等を置いている。「情報システム」では、倫理・法制度・標準化・産業社会と情報化・表現技法等の教育を行っている。「情報リテラシー」では、ワープロ・表計算・プレゼンテーション・画像処理等の情報活用能力を、より伸長するための教育を行っている。

### 3. 現行学習指導要領から次期学習指導要領への情報教育の変化

情報教育が部分的に導入された現行学習指導要領から、次期学習指導要領では体系的な情報教育の実施に進もうとしている。また、最近では総合的な学習の時間の試行の中や特別活動での利用の中で使われるケースが多くなってきた。インフラの整備状況のタイミングによっては、情報教育の研究開発学校がその地域で一番遅れた機器を利用しなければならない状態が存在したこともある。このような状況では、研究開発学校の成果が必ずしも他の学校で活かさない。

情報教育に関しては、テクノロジーによってできることが異なり、そのテクノロジーの変化が急激であるために、社会が先行してしまい、学校のインフラ整備がそれに追いつけない状況が続いている。マルチメディア化、インターネットの普及など予想を超える早さでテクノロジーが変化しており、それに応じて学習内容や学習活動も変化せざるを得ない状態である。現行から次期へ、学習指導要領の変化を整理すると、

#### (1) 情報教育の定義の変化

- ・コンピュータから情報、通信（インターネット）へ（現場の変化）
- ・情報教育の枠組みの変化（情報活用能力の育成を目標として掲げて取り組める授業のみを情報教育と呼ぶ。例えば情報通信手段を利用した教科の調べ学習は情報活用能力はについても目標として掲げられない学習活動なので情報教育ではない。）

#### (2) 情報活用能力の変化

##### 現行の情報活用能力

- 1) 情報判断、選択、整理、処理能力、新たな情報の創造、伝達能力
- 2) 情報化社会の特質、情報化の社会や人間に対する影響の理解
- 3) 情報の重要性の認識、情報に対する責任感
- 4) 情報科学の基礎、情報手段（コンピュータ）の特徴の理解、基本的な操作能力の習得

##### 新学習指導要領での情報活用能力

- (1) 課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力（「**情報活用の実践力**」と略称する。）
  - (2) 情報活用の基礎となる情報手段の特性の理解と、情報を適切に扱ったり、自らの情報活用を評価・改善するための基礎的な理論や方法の理解（「**情報の科学的な理解**」と略称する。）
  - (3) 社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響を理解し、情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え、望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度（「**情報社会に参画する態度**」と略称する。）
- となっている。今後の情報教育が、機器やソフトウェアの理解や操作技能でなく、課題解決に役立てられるというようなアウトプットを明確に定めた情報教育であり、具体的な児童生徒の力として認識できる情報教育へ発展することが期待されている。

（堀口秀嗣）

## IV 「総合学科」高校を中心としたカリキュラム開発研究

### 1 分析の諸前提

#### (1) 分析対象の研究開発学校

本章の課題は、「総合学科」を設置している高等学校を取り上げ、カリキュラム開発研究に対するインプリケーションを考察することにある。研究開発学校のうちこれに該当する高校は、岩手県立岩谷堂高等学校（委嘱年度：平成6～8年度）、三重県立昴学園高等学校（平成8～10年度）、鹿児島県立甲陵高等学校（平成9～11年度）の3校にとどまった。このうち鹿児島県立甲陵高等学校は開発研究に資する資料の作成途上にあると判断し、分析の対象から外さざるを得なかった。したがって、ここでは、岩手県立岩谷堂高等学校と三重県立昴学園高等学校の両校について、少し詳細に検討を加えることとする。ただし、両校の研究テーマはかなり異なっており、今回は両校の比較分析にまで踏み込む作業は見送らざるを得なかった。

#### (2) 分析の視点

研究開発学校として取り上げることができる「総合学科」は、いわば例外的・実験的措置という位置づけのもとで新しい研究課題に取り組んでいるものである。この方式は、高等学校の場合には他校種にも増して多くの限界を孕んでいる。詳細については後述するが、それとは対照的な方式でつくられてきた「もうひとつの試み」（自生的改革）との比較分析によってはじめて、研究開発の実践を正しく評価することができる。研究開発校の大まかなレビューに引き続いて、「総合学科」のみならず高等学校全体のカリキュラム開発研究が克服すべき課題を整理しておく。

### 2 岩手県立岩谷堂高等学校の事例

#### (1) 学校の概要

##### ①学校の社会的文脈

岩手県立岩谷堂高等学校は、大正7（1918）年に設立された岩谷堂町立実科高等女学校（のちに県移管し岩谷堂高等女学校）の伝統を有する。昭和23（1948）年、学制改革により岩手県立岩谷堂高等学校となり、「全定」を併置するところとなった。定時制課程と農業科の分離独立（各昭和35年・38年）と商業科新設（昭和38年）を経て、平成6（1994）年普通科と商業科を募集停止し、全国に先駆けて総合学科を新設するところとなった。

胆沢平野を一望する同校は館山という旧城址に位置し、眼下の街並みは静かな城下町のたたずまいを残している。「本校を温かく育ててきた地域の人々の昔ながらの純朴な人情に包まれた絶好の学習環境にある」という。通学域は江刺市を主とし、川を隔てた水沢市に及ぶ。

##### ②系列の種類

岩谷堂高等学校の新しい教育課程には総合選択科目群が設けられており、主に7つの系列を念頭に置いて、生徒の科目選択が促される。具体的には、以下の7系列が設定された。

1) 人文科学系列 — 文系、2) 自然科学系列 — 理系、3) 情報サービス系列 — 商業系、4) 流通システム系列 — 同上、5) 福祉サービス系列、6) 体育・健康系列、7) 国際協力系列。とりわけ、普通科と商業科の併設校であったという事情は、系列の種類に大きな影響を及ぼした。もちろん、系列はたいいていの類型・コースと異なり、生徒の所属集団とは無関係である。それは科目選択のひとつの目安に過ぎず、系列の枠を超えて科目を選択することも事実上可能である。

### ③組織の成員と進路状況

教職員・在校生・進路状況は、以下の通りである。

- 1) 教職員：校長、教頭、教諭（48名）、養護教諭、常勤講師（5名）、非常勤講師（8名）、実習助手、英語指導助手、事務長、事務職員（4名）、用務員、ボイラー用務員計70名。
- 2) 在校生（平成9年3月）  
男211名、女391名、計602名（うち、江刺・水沢地区中学校出身が589名）
- 3) 進路状況

表1 最近3ヶ年の進路状況（実数）

| 卒業年度 \ 進路 | 国公立大学 | 私立大学 | 短期大学 | 看護学校・医療専門学校 | 専修各種学校 | 県内企業 | 県外企業 | 公務員関係 |
|-----------|-------|------|------|-------------|--------|------|------|-------|
| 5         | 8     | 34   | 45   | 58          | 62     | 67   | 21   | 6     |
| 6         | 4     | 28   | 17   | 20          | 89     | 42   | 20   | 5     |
| 7         | 1     | 27   | 23   | 64          | 68     | 60   | 12   | 1     |

\* 『報告書』5-6頁をもとに作表（「現役のみ」）。

なお、進路状況に関しては、「以前の普通科・商業科のときと比較すると、就職者が減少し、進学者が増える傾向にある」といわれる。

### ④教育課程

岩谷堂高校の教育課程表は、【資料1】に示す通り。

#### (2) 実践の成果と課題

岩谷堂高校の研究開発のねらいは、「総合学科の創設に係わって、生徒の個性の伸長及び主体的な学習意欲の涵養、自主的・積極的な科目選択という観点から、必修科目の履修についても生徒が主体的に選択できるようにするなど、教育課程の弾力化を図るとともに、生徒一人ひとりの個性や適性に応じた進路選択が可能になるよう、総合学科における教育課程の実践的な研究を行うこと」にある。具体的はテーマは、①必修科目の弾力化、②「産業社会と人間」の再検討、③「家庭一般」との代替、の三点である。

#### ①必修科目の弾力化

##### (a)必修科目の再編

現在の必修教科・科目の総単位数38単位であり、これに総合学科原則履修科目最低6単位を加えると計44単位に達する。これは、卒業単位数80単位の過半数である。学校

週5日制の実施を考えても必修教科・科目の弾力化ないし削減は避けられない。

必修履修科目は、学習指導要領の示す必修科目「国語Ⅰ」「数学Ⅰ」「体育」「保健」「家庭一般」「芸術」（音楽Ⅰ・書道Ⅰ・美術Ⅰ）の15単位を基本的な科目と位置づけ共通履修とされた。なお、平成8年度生については、「家庭一般」4単位中2単位を「産業社会と人間」で代替し、必修単位から削減することとされた（③で詳述）。したがって、地理歴史（「世界史A」「世界史B」に「日本史A」「日本史B」「地理A」「地理B」も含め選択科目に）、公民（「現代社会」「倫理」「政治・経済」をすべて選択科目に）、理科（「総合理科」を除いたすべての科目の中から選択）の3教科は必修から外された。こうした措置は、「産業社会と人間」「課題研究」あるいは選択科目との重複を避けること、既修の他の教科・科目をフォローすること等の理由による。

その結果、「地歴科」「公民科」「理科」の履修希望者は平成8年度になって大幅に増えている。また、B科目選択希望者が多く、各自の進路に応じた科目をむしろ積極的に選択しているというプラスの効果が出ている。今後、さらに必修科目のスリム化を行う必要があり、とくに、総合学科原則履修科目の必修科目への代替（単位の読み替え）について検討しなければならない。

#### (b)卒業認定・単位認定の弾力化

卒業認定・単位認定に関しては、3点について検討が加えられた。

第一に、卒業認定条件を「共通必修科目・原則履修科目・選択必修科目等を93単位履修し、各教科・科目修得の単位数の合計が80単位以上」とするが、完全週5日制実施を見越して、履修すべき単位を80単位とすることをめざす。

第二に、総合学科の設置に伴い、従来の4学期制を2学期制とする。今年度は、奇数単位科目を極力少なくし、必修科目では「保健」の1単位のみとした。

第三に、現在「授業時数の3分の2以上の出席」を履修条件としているが、履修条件は「授業時数の2分の1以上の出席」、修得には「授業時数の3分の2以上の出席」とした方が多様な生徒に対応できるのではないかと考えられる。

今後の課題としては、1) 学期ごとの単位分割認定の検討を行う（集中方式も含めて）、2) 長期休業を含めた学校行事を根本的に見直す、3) 定期考査のもちかたや、成績処理の方法の検討する、4) 4年次以降の卒業時期を前期末とする場合の問題点の検討を行う、などがある。

#### ②「産業社会と人間」の再検討

##### (a)平成6年度の経過

平成6（1994）年度については、文部省同科目指導資料をもとに指導目標と指導内容を設定した。単位数は、3単位（前期週4時間、後期週2時間）とした。商業科教員と社会科教員の2名を専門教員とし、他にホームルーム担任を配置した。その際、専門教員の担当クラスを3クラスと2クラスに区分した。参加型の学習を重視し、見学（上級学校・事務所・連携校等）4回、社会人講師講演会6回を予定した。しかし、実際には見学3回、講演会3回と当初計画よりも少ない実施にとどまった。具体的な授業内容の詳細については、【資料2】を参照していただきたい（ただし平成8年度分）。

科目選択を9月までに決定しなければならないと言う事情から、体験学習を前期に集中させた。「1回の見学に6時限、講演会に2時限を費やすことになる」ということで、今年

度は前期に他科目との調整により4単位で実施した」という。体験学習をそのまま実施していくことになれば、4単位に増単することを考えていかねばならない。『産業社会と人間』における指導内容の充実と指導過程における調査研究、作業、見学、講演、討論などの体験的、実践的学習の指導の充実、および生徒の学習活動の向上をはかるため、平成7年度には1単位の増単を図り4単位で実施することとした。

#### (b)成果と課題－平成7年度の実践－

「産業社会と人間」を増単することによって、以下のふたつの成果が表れ、全体として余裕をもっていろいろな観点から指導することができた。

第一に、見学の事前指導・事後指導をこれまでの1時間から2時間にそれぞれ増やすことで、見学先への予備知識をしっかりと持つことができ、有意義な見学ができた。

第二に、3回の講演を5回実施することができ、生徒の視野が広がった。感想文をしっかりとまとめ講師の方に感想文をまとめて届けることを始めた。

「産業社会と人間」の指導内容と「公民科」「保健体育科」「家庭科」のそれに重複する項目がある(【資料3】)。3つの対応策が考えられたが、「産業社会と人間」「家庭一般」との連携という形で対応がなされた。2科目間の指導のねらいには、共通する部分と異なる部分がある。「ライフプラン」を家庭科の授業時間に立案させ、それぞれの科目の指導目標や視点から指導を行った。そうすることで、「ライフプラン」を複数の観点からとらえ、自分の一生を考えることができるようになり、指導時間の効率化を図ることができた。

#### ③「家庭一般」との代替

##### (a)実践の概要

「産業社会と人間」と他の教科の指導内容との重複項目の検討から、主として、公民科(現代社会、倫理、政治経済)、保健体育科(保健)、家庭科(家庭一般)との間で重複する指導内容が見られた。これら3教科に関して、代替について検討を進めた。

まず、公民科との代替については、公民科にかかわる科目は選択履修としているため、必修科目扱いとしない限り代替の効果は薄いと判断された。

次に、保健体育科との代替については、「保健」が1単位であるため代替により科目としての特性が失われる可能性があり、代替による効果について疑問が残る。

最後に、家庭科との代替についてはどうか。たとえば、1年次で「産業社会と人間」4単位履修および「家庭一般」2単位を必修とし、「産業社会と人間」2単位修得「家庭一般」4単位修得を認定することにする。2年次に「家庭一般」を設定せず、その分選択履修の幅が拡大できると考えられる。さらに、以下の点を考慮して、「家庭一般」との代替を実施することとなった。

- 1) 家庭との関連から進路等について考えるという視点も必要。職業生活に必要なコミュニケーション能力の育成は、家庭生活の充実向上にとっても重要かつ関連が深い。
- 2) 体験学習を重視している点で共通点が見られる。
- 3) 両者を結びつけることで新たな内容の展開を期待できる。

重複項目の検討は、次の観点を踏まえて実施された。

- (1) 「産業社会と人間」、「家庭一般」の指導目標や基本的性格(特徴)を明確にする。
- (2) 「産業社会と人間」と「家庭一般」の重複する指導項目、内容を検討する。

(3)「家庭一般」の代替する学習内容を検討する。

重複する項目の多い「家庭一般」の「家族と家庭生活」、「家庭経済と消費」の学習を「産業社会と人間」で指導することとし、「産業社会と人間」のどの項目にどんな視点で学習内容を入れるかの検討が行われた。具体的には、「産業社会と人間」の「自己を見つめる」の項目に「家庭の機能と家族関係」を、「進路について考える」の項目に「生活設計」を、「職業生活への適応」の項目に「生活時間と家事労働」を、「産業の発展と社会の変化」の項目に「消費者の問題」を、「期待される社会人になるために」の項目に「高齢社会と社会福祉」を、「自己を見つめる」の項目に「自分らしい生き方を考える」をそれぞれ入れていった。

「家庭一般」2単位の中で「産業社会と人間」との重複項目の多い「家族と家庭生活」、「家庭経済と消費」は「産業社会と人間」で代替し、「衣生活」、「食生活」、「保育」領域を学習することとした。

代替の指導法として、次の3つを検討し、実践した。

- ①「産業社会と人間」の担当者と家庭科教員によるティームティーチングによる授業を行う。
- ②家庭科教員が「産業社会と人間」の中で単独授業を行う。
- ③家庭科が指導資料を提供して、「産業社会と人間」の担当者が授業を行う。

#### (b)成果と課題

成果というよりも、これから検討すべき課題が多く指摘された。主なものは、以下の4つである。

第一に、「産業社会と人間」の年間指導計画に沿って展開するためには、担当者間の十分な打ち合わせと「産業社会と人間」の前後の授業フォローが必要であった。重複することだけで導入した内容は担当者も指導に苦慮するところになった。発展性がなく断片的な知識に終わっているのではという懸念もある。「産業社会と人間」は前後の授業フォローに時間をかけなければならず、生徒は違和感なく受け止めてくれたか疑問が残る。

第二に、今回「家庭一般」で「衣生活」、「食生活」、「保育」領域を中心に学習したが、専門科目に継続できる学習となり得たかどうか不安が残る。

第三に、担当者間の授業時間の調整が難しく、「産業社会と人間」の指導計画からずれて授業に入ると全く断片的な投げ込み授業に終わってしまった。とくに、家庭科の担当者が「産業社会と人間」の授業に入ってから実践は時間の調整が難しく、困難が感じられた。

第四に、時代の要求に応えようとするなら2単位では不可能であるし、環境教育や福祉教育を充実させるためにはなおのこと不十分である。

#### ④3年間の成果と課題

##### (a)研究の成果

岩谷堂高校は、研究の成果を以下の3点にまとめている。

##### 1) 教育体制 (システム)

○必修科目の弾力化を図る実践を「地理歴史科」「公民科」「理科」の3教科で試み、これらの教科科目を必修科目から外し全て選択科目とした。その結果、「地理歴史科」「公民科」においては選択履修人数に偏りが見られず、「理科」においてもI B・II科目を選択する生徒が増加した。以上の3教科を必修から外せることがわかった。

○卒業履修単位を80単位とすることや学期ごとの単位分割認定は、ぜひ必要であるという方向性が確認できた。

○意識調査の結果、総合学科が「個性の伸長」「自主性」「主体性」を培うという趣旨にかなっていることがわかった。

○自然科学系列、国際協力系列で設定している農業、工業に関する科目は学校間連携により、近隣の岩谷堂農林高校で履修できることになった。生徒・教員との学校相互の交流が深まり、広い視野で物事を観るよい契機となっている。

## 2) 学校経営

○継続的な意識調査によって生徒の実態を把握することができ、今後の生徒の指導に役立てることができる。

○総合学科の目指すねらいや特色などについて広報活動に力を入れ、関係機関・団体との連携を深めた。意識調査の結果、中学校や地域の人々に理解され浸透していることがわかった。

○総合学科への進学を希望する生徒像のひとつ「将来の進路を、総合学科における学習を通じて行いたい生徒」に対して、「産業社会と人間」や進路指導のガイダンス機能の充実などを通じて、生徒の興味・関心にもとづく進路の早期決定に結びつくことになった。モラトリアム傾向にある今の生徒にとっては大変よいことである。

○生徒個人の意識の変容も見られ、学校祭の巨大壁画の作成や部活動の上位入賞など、学校全体が活性化された。

○総合学科一期生の進学状況を前年度に比べると（ほとんどは推薦によるが）多くなっている。四年制大学の合格者は現在のところ18名だが、全員人文科学系列、自然科学系列の履修者。

## 3) 教育内容

○アンケートの結果をみると、「産業社会と人間」の中で一番印象に残っている単元は「進路について考える」と回答する生徒が多い。自己の進路への自覚を深めさせるという、この科目の所期の目的が十分果たされていると判断できる。

○「産業社会と人間」は初年度3単位、次年度から4単位に単位増。科目選択や自己理解について十分な時間を充てることができ、さらに、新たな指導項目として「青年期の在り方生き方」を加えることもできた。関連他教科との代替についても、「家庭一般」との間で実践し、(TTも実現し)授業の効果も上がった。

○「産業社会と人間」での上級学校見学、職場見学、社会人講師による講演会等の学習、「課題研究」での多様な教科・科目の選択履修によって深められた知的好奇心にもとづいて自ら課題を設定し、その課題の解決を図る学習により、クラブあるいは個人によるボランティア活動への参加がこれまで以上に見られた。

○多種多様な教科科目の選択ができることから、多方面の分野に興味・関心を抱く生徒が多くなっている（特徴的な科目として、「国際奉仕基礎」「比較文化」「国際地域研究」）。

○生徒は「産業社会と人間」での科目選択指導、科目選択ガイダンスティーチャー、学級担任の指導を受けて、生徒は主体的に科目選択していることから、生き生きと学習している（開設条件は5人以上を目安にしているが、5人以下でも進路実現のために



必要な科目は開講)。

#### (b)今後の課題

岩谷堂高校では、生徒と保護者と教員に意識調査を行っている。3年間の調査全体を通してうかがえることは、総合学科への理解度が次第に深まっていること、それに伴い本校の教育内容に対し要望が多様化し、具体的になっていることである。以下は、その要約である。

生徒への調査では、本校受験の動機として「総合学科の創設」をあげる生徒が最も多く、総合学科に対する期待の高さや、意欲のある生徒が入学していることがうかがえる。満足(魅力)としてあげるのは「好きな科目が選べる」「個人の進路に沿って選べる」など。自分で選択した進路に必要な科目であるため、意欲的な取り組みが目立ち、教科担当教員も生徒のレベルに対応した適切な指導が可能のため、教育効果があがると評価している。一方、不満なこととして「科目選択をした後の進路変更ができない」ことである。「科目をブロックから選ぶ」ことからくる単位数合わせの選択についての不満も多かった。自分の進路に合わせて好きな科目を選択できることが総合学科の眼目であったが、実際このことを実践するためには人的・物的条件整備がなされた上での実践が理想である。教員の加配や施設・設備についても現段階では特段の配慮をいただいているが、十分とは言い切れない。既存・既設のものを有効活用することで最大限の効率を図ることが求められる。

保護者への調査では、「科目選択」については保護者の理解度は高いが、科目選択への不安も拭いきれない。保護者への情報提供が必要である。保護者として学校に望むこととして、「学力の向上」「生徒指導の強化」に関することが多い。

教員への調査では、進路指導で気になることとして「クラス編成」が自然学級であるためのジレンマ、教科指導での進学希望者への手だてが十分とれないことへの苛立ち等を挙げている。生徒指導で気になることとして、「クラス単位での授業が少ない」ことから派生して来る問題も多いと思われること等を挙げる。全体としては、厳しい意見や指摘が見られるが、いずれ教員も今までの学年制の発想の中から脱却して、単位制にふさわしい自主性・主体性を育てる教育をめざす、意識改革が必要である。

これらの研究を踏まえて、以下の8点が課題として指摘されている。

- (1)単位制の利点を生かすために単位の分割認定を進めるには、年間行事予定の抜本的な見直しが必要である。
- (2)生徒の選択履修科目に対応できる教員確保と施設・設備の充実が必要である。
- (3)科目選択指導の方法について再検討が必要である。
- (4)頑張らせる動機づけとして、成績等の資料の作成・指導方法の検討が必要である。
- (5)国大協・私大協・商工会議所・企業等に対する働きかけが必要である。
- (6)総合学科設置校による連絡協議会・研究協議会の設置が必要である。
- (7)県内の総合学科の設置計画を明らかにするとともに、地域社会・中学校・生徒の保護者へのPR活動が必要である。
- (8)教職員の学年制から単位制への意識の改革が必要である。

結論的には、総合学科の理念と現実の生徒の進路達成の実現との対応の狭間に戸惑うとともに、過去の経験、従来からの指導体制から脱しきれずにいるのが現状であると総括される。

### 3 三重県立昴学園高等学校の事例

#### (1) 学校の概要

三重県立昴学園高等学校は、静かな山あいの村にある。美しい森と水に象徴される自然環境豊かな地域である。昭和24（1949）年に三重県立宮川高等学校荻原分校として設置された。昭和62（1999）年に独立校となり、普通科と農業土木科を1学級ずつ擁する三重県立荻原高等学校として新たなスタートを切った。しかし、過疎化が進むにつれて、二次募集でも定員割れする状況が続き、廃校の危機に陥った。そうした中で、学校を再び活性化しようという機運が盛り上がり、平成2年度「学校改革構想検討委員会」が設置された。翌年「学校改革計画上申書」が県教育委員会あて提出され、ちょうど国の高校教育改革推進の動きが活発になっていた時期とも重なり、平成5年から「新しいタイプの高等学校」への改革がなされた。平成7（1995）年、「国際交流」「環境技術」「美術工芸」「介護福祉」「野外スポーツ」の5系列を含む三重県立昴学園高等学校が「総合学科」（各年次2学級の80名）として誕生することとなった。同校は、「全員推薦入学」「全寮制」「二期制」「90分授業」などの特徴的なシステムを導入しており、研究開発もこうしたユニークな取り組みの成果と問題点を点検する方向で実施されている。

#### (2) 実践の成果と課題

##### ① サタデータイム

##### (a) 取り組みの概要

昴学園高校では、第1・第3土曜日に授業を組まず、「ゆとりのある時間」として生徒の自主活動を尊重することとし、これを「サタデータイム」と称している。全校生徒240名を9～10名の中規模グループに分け、次のような要領で実践を行った。

まず、全教員を各グループの担当者として割り当て、各ホームルームでこの時間の趣旨と方法を説明した。説明内容は、以下の通りである。

- 1) 第1・第3土曜日は授業はないが休日ではない。「サタデータイム」である。
- 2) 各自1つの研究テーマを担当教諭に提出する。
- 3) 単なるクラブの練習、遊び、アルバイト、旅行等はテーマとして認めない。
- 4) 寮生は金曜日の夜自宅に帰り、地元で研究を行ってもよい。なお、寮にいる者については土曜日の朝8:30に食堂にて点呼を取る。
- 5) 担当教諭に毎回の実施報告書を提出する。
- 6) 報告書の内容等に基づき優秀な研究に対しては単位認定も考える。

実施報告書の提出を義務づけ単位認定の可能性を示唆した背景には、「サタデータイム」への取り組みを活発化させるというねらいがあった。

夏季休業前に担当教諭と保護者にアンケートを実施し、実施状況の確認と問題点の洗い出しを行った。なかでも、「サタデータイム」そのものを生徒が十分に理解していないことや「何に取り組んでいいのかわからない」という生徒の多さ、あるいは作業の非効率性や煩雑さを指摘する声が目立った。そこで出てきた問題点や意見を踏まえて、「サタデー

タイム」のシステムの大幅な見直しを図った。

前掲の基本方針の確認を徹底するとともに、目標の定まらない生徒などのために「魅力ある活動のモデル」も提示した。実施方法についてかなり詳細に規定がなされ、単位認定の方法が明文化された。イベント情報等を掲載する『サタデータイム通信』を発行したりすることで、関心の低い生徒に取り組みの意義を伝える工夫がなされた。同通信は、「読んで楽しい通信」になるようにできるだけ平易な言葉で書かれた。冬休みの前には、ガイドブックを作成し、「自分自身のやりたいことがわからない生徒」への対策とされた。

#### (b)活動の実態

1・2年次生のアンケートが実施され、今年度の成果が確認された。それによると、全体の60.9%が本年度の「サタデータイム」に「取り組めなかった」と答えている。「報告書の提出がわずらわしい」という意見が目立ち、「(休息が取れるという意味で)自分の自由になる時間ができてよかった」という評価が多かった。「サタデータイム通信」を読んでいる生徒は59.4%であり、「おもしろい」「続けてほしい」という好意的意見が目立った。「サタデータイム」に積極的に取り組もうと思う生徒は66.7%で、「興味ない」という生徒も14.5%に上った。

#### (c)成果と課題

平成9年度に関しては、多くの生徒が「サタデータイム」に積極的に取り組めなかったようである。理由としては、①担当委員会自体に「サタデータイム」に対する戸惑いがあったこと、②生徒への説明が十分でなかったこと、などが指摘されている。この実践を通じて、「自分自身で目標を設定できない生徒に自ら積極的に動こうとする気持ちを起こさせることの難しさ」が痛感された。かなりのエネルギーがこの点に費やされてしまったようである。教員の間からは、報告書の提出が不十分で見直しのあともうまく働いてないという声が上がっている。生徒の側の負担感にも配慮する必要性が認識されている。単位取得を目指さない生徒にも報告書を提出させる必要があるかどうかという点も今後の検討課題となっている。

#### ②数学の必修科目

##### (a)実践の概要

同校では、学力的に多様な生徒が全県から集まってくることもあって、1年次前期には数学Ⅰを習熟度別講座編成で実施している。春休みの課題を範囲にしたテストと新1年生テストの成績にもとづいて82名を上位(28名)・中位(27名)・下位(27名)の3講座に分け、授業が進められた。後期には、以下の3つの科目から選択する方式がとられた。具体的には、7月夏休み前に仮選択が行われ、9月前期末テスト後に本登録を行っている。

「数学Ⅰ」：数学Ⅰの内容を演習も多く取り入れながら学習する。

「基礎数学」：中学校の内容の復習も随時取り入れながら、高等学校の数学の基礎的な内容を学習する。

「基礎専門数学」：主として環境技術系列選択生、就職希望者を対象に、数学Ⅰ以外の内容も含め、専門教育の基礎となるものを精選して学習する。

## (b)成果と課題

12月と2月のアンケートによると、選択した科目の適切さについてはかなりの生徒が評価していることがわかる。授業内容についても一定の理解が達成されている。「科目選択ガイダンス」も生徒の科目選択にとって有効に機能している。ただし、進学に必要な「数学Ⅰ」を履修している生徒を除いて、自身の進路にとって数学が必ずしも必要でないと認識する割合が大きい。前期に実施されたアンケートでは、「数学が嫌い・苦手」という生徒が9割以上に達していた。「授業の内容を理解するために取り組む姿勢や、自分の能力を高めようとする気持ちを引き出すとともに、数学に対しての興味・関心を生徒に引き出すような授業を行いたい」と今後の課題が記されている。

### ③90分授業

#### (a)実践の概要

授業時間は、一般的な高校では50分であるが、昴学園高校では90分授業を採用している。総合学科における多種多様な科目を時間割内におさめるために時間割編成上のゆとりを生み出すことがねらいである。特に、山間地で特色ある科目を担当する非常勤講師を確保するには、回数を少なくすることが欠かせない。そんな特殊事情も手伝って、90分授業は導入された。

90分授業のメリットは、①時間割編成上ゆとりができる、②校時間の休憩時間の回数と時間を減らすことができる、③実習科目の授業を減らせる、④午後の授業数を増やせる、⑤授業変更が多様容易になり、自習時間を減らせる、等々である。

90分の授業に対して、業間は15分とされた。90分を2コマとして38コマ（LHR・必修クラブを除く）となり、従来の30コマよりも大枠となりゆとりができた。履修生徒が多い科目を2・3時限に多く設定するという配慮も行った。

#### (b)成果と課題

6月下旬に実施された生徒と教員を対象とするアンケートから次のようなことが明らかになった。まず、生徒の意見としては、全体的に悪い点として挙げた数が多かった。メリットとして挙げられたのは「集中力がつく・忍耐力がつく」だった。「実技・実習によい」や「荷物が少なくすむ」といった意見もあった。デメリットとしては、「集中力に欠ける・眠い・だらける」という意見が圧倒的だった。「疲れる」という者も多かった。90分の間に休憩を挟んでほしいという声も多かった。「欠席すると授業内容がわからなくなる」「前回の授業内容を忘れる」「1回でたくさん進む・予習復習が多くて大変だ」といった意見がとくに1年次生に目立った。

教員側の意見としては短所についての意見が多かった。生徒の集中力が持続しないことや進度も遅れがちな点が指摘された。90分授業は実習系には向くと予想されていたが、実際には50分授業の場合（50分+10分+50分=110分）よりも実質的には20分の減少となった。とくに2単位授業では週1回になるため、行事や出張などによる影響が出やすいことが指摘された。

生徒も教員もデメリットの指摘の方が多い。50分授業を捨てて得るものよりも失うものの方が多く、90分授業に対しては反対といわざるを得ない。あまりにも生徒へのしわ寄せが大きく学習権を保障することすらできていないと結論される。

### ④二期制

#### (a)実践の概要

単位制を効果的に運用するために、昴学園高校では二期制が導入された。教育課程編成の弾力化と選択幅の拡大、外部講師の導入のしやすさなどがメリットとして考えられた。単位認定は学年末にまとめてなされ、学校行事は従来通り実施された。1単位ものについては90分ひとこまで前期に設定し、3単位ものは前期2単位後期1単位に振り分けられた。

他校のアンケート結果をふまえて二期制のメリット・デメリットについて検討がなされるとともに、1月には生徒・教員を対象にアンケートを実施した。

#### (b)成果と課題

はじめて二期制が実施されたが、さほど大きな混乱はなかった。しかし、多くの課題が残されている。前期後期の区切りをつけるため秋休みは必要であるが、もし秋休みを設けるとすればその分夏休みを削らなければならない。その場合には、冷房設備の必要性も考えられなければならない。90分授業の中で、午前中授業をどのように組み入れ授業時間を確保していくかなどの問題も残る。テスト回数が減ったことで教師にも生徒にも時間的にゆとりができたが、通知表が4回出されることについては教師の負担感が強い。夏休みをはさむ前期試験の実施時期は、「就職試験と重なってテストに身が入らない」「休み明けで授業内容を忘れている」「休暇後気分を切り替えるのに時間がかかる」などの問題点が挙げられる。学校行事についても今年度の実態を踏まえて効果的な実施方法を考えていく必要がある。

#### ⑤空き時間

##### (a)実践の概要

時間割の上では38時間を設定しているが、指導要領で規定されている授業時間数は32時間であることから、生徒の時間割の中では6時間の「空き時間」ができる。昴学園高校では、この「空き時間」を「スバルタイム」と呼び生徒が個々に活動する時間と位置づけた。原則として1～3時限目とするが、4時限目でも単位修得をめざして空き時間を利用する場合には「スバルタイム」と見なして活動報告等を課した。生徒寮「きらら」の共用棟および校内会議室を「休憩・自由活動の場」とし、非使用教室を「自習室」としてこれらを「スバルタイム」の活動場所とした。図書館の規模が小さいことなど拡充の必要があることから、第2図書館の設置を求めているが実現していない。したがって、図書館は許可制にして活用を認めるにとどまる。

スバルタイムの活動報告の提出については、当初から教職員の中に反対意見が多かったが実態把握を行うために実施された。

##### (b)成果と課題

実態把握の結果、ほとんどの生徒が自習・読書または休憩時間として「スバルタイム」を活用していることがわかった。報告することについて、生徒からも毎週の報告が負担であるとの苦情が多く寄せられた。本来の「空き時間」の趣旨に添って生徒が自由に活動できる時間として保障していく必要があると指摘されている。自習・読書等をするにあたって、休憩のつもりで過ごしている生徒と同じ場所で過ごすには不都合が多く、生徒が活動しやすいように環境を整備していくことが先決であると考えられている。報告の集約作業は教職員にとって意味のない負担となっている。それとかがわって、出欠確認のコンピュ

一タ処理システムの整備が急がれる必要がある。

「スバルタイム」で増単につなげる生徒がいることはそれ自体尊重されるべきことではあるが、学校側から活動を強要するようなことがあってはならない。「スバルタイム」に関しては、「学校にいる間は学校の管理下にある」という従来の考えを払拭していくことが重要であると指摘されている。

## ⑥寮活動

### (a)実践の概要

寮の概要は、以下の通りである。

(1)寮の名称 生徒寮「きらら」

(2)部屋数 男子棟（90人収容） 一人部屋 30室 二人部屋 30室  
女子棟（150人収容） 一人部屋 50室 二人部屋 50室

(3)担当講師 寮務担当（夜間）5名（男子2名 女子3名）寮務補助（昼間）1名

(4)寮生数

| 学 年 | 1  | 2  | 3  | 計   |
|-----|----|----|----|-----|
| 男   | 31 | 23 | 27 | 81  |
| 女   | 42 | 47 | 36 | 125 |
| 計   | 73 | 70 | 63 | 206 |

『研究開発実施報告書（第2年次）』69頁。

「新しいタイプの寮」として構想された「きらら」の教育目標は、寮生活における人間同士の触れ合いを通して、他者に対する思いやり、助け合いの精神、自主的態度、自立精神を涵養する「全人教育」にある。このため、寮の運営は、生徒の自主性を尊重する形でなされている。研究開発のテーマは、1)「空き時間」における寮の開放、2)チューター制度導入による自治組織の活性化および生活指導の充実、3)地域交流および寮活動の3点である。

### (b)成果と課題

#### 1)「空き時間」における寮の開放

寮の食堂を大学の学生ホールのように使用させる目的は達成された。授業時間に廊下をうろつき授業を妨害することもほとんどなかった。男子棟・女子棟の自室に帰る時間を早めた結果生活時間に余裕ができた。

他方、寮の光熱費などの経費が増加した。また、自宅通学生には昼食時間以外には開放していないのでかれらに疎外感があるようである。

#### 2)チューター制度導入による自治組織の活性化および生活指導の充実

寮生の数が増加する中で、退寮者・退学者がゼロとなり、生活指導の件数・生徒数も減少した。フロアリーダーの新設により、寮の運営がスムーズに行われるようになった。

他方、チューターが5人と少なく、2名の増員が必要であると感じられた。学校のHR担任よりもチューターの方との結びつきが強く、しかもより話しやすいチューターに深夜に相談する生徒も出ている。

#### 3)地域交流および寮活動

「空き時間」に寮を開放した結果、夜間の自由時間に余裕ができて、夜間講座、地域芸能等の練習会への参加生徒数が増加した。

他方、最大の問題点として、夜間講座が集中講座であることから全講座出席しても10

時間にしかならず、1単位修得の条件（35時間）を満たせない。卒業までの3年間に規定の時間に出席し、卒業時に「課題研究」または「総合」の増単位として認定できるかどうかを今後研究していく必要がある。

#### 4 「深い」実践の試みの方へー研究開発の本質ー

##### （1）研究開発の成果と課題

研究開発という仕組みは、学習指導要領で定められている枠を超えて、新しい教育課程や教育方法の可能性について考察することを可能にしている。岩谷堂高校の場合には、必修科目の削減や「産業社会と人間」と「家庭一般」との重複内容の削減と単位の読み替えなど、学校週5日制を見通して教育内容の精選と「スリム化」を行うための方策が研究されている。ひとつひとつの内容を吟味し、重複部分を丁寧に検証していくプロセスはきわめて貴重である（データの解釈に際して結論を急ぎすぎるきらいはあるが）。また、昴学園高校については、「空き時間」「サタデータイム」「二期制」「数学履修（1年次）の個別化」「90分授業」など、単位制を特徴づける教育課程編成と教育方法実施上の工夫がひとつひとつ検討されている。生徒や教員に対するアンケートも実施され、実践の問題性にまで踏み込んだ真摯な分析がなされている。

いま高校が抱えている状況はあまりにも多様である。たとえば、学区制、生徒の特性・アスピレーション・性別構成、教員文化、伝統、学科の種類、地域特性、社会的威信、選抜性、組織目標等々の点で、ほとんど同じ条件の高校は見あたらない。したがって、これらの研究開発の成果をそのままあてはめることなどできないはずである。小学校の場合とは違って、得られた知見を一般化できる可能性はより低くなる。研究開発は、新しい単一の教育課程モデルを創造するというよりも、個々の学校の実践をふりかえる機会として位置づけるにとどめるのが妥当であるのはこのためである。その限りにおいて、岩谷堂高校と昴学園高校の研究開発の方法そのものは大きな意義をもっている。

いずれにせよ、研究開発校の成果は、一定の限界をもたざるを得ない。たとえば、昴学園高校の「90分授業」の実施についての評価が典型的な例であるが、多くの疑問が出たにもかかわらず「90分授業」を実施する必要があったのか、大いに疑問である。「サタデータイム」の報告書提出についてもしかりである。問題の本質は、「平成9年度文部省教育研究開発学校連絡協議会」（5月29日）において主催者側より提示された留意点に象徴されている。つまり、「各学校においては、理論研究に時間を費やすよりも実践研究することに大きな意義がある」とか「特定の観点で研究をしていただくのですから、その観点からずれてしまわないように…」とかいった「指導」がなされたことは、「90分授業」が拙速にも実施された経緯と無関係ではないだろう。いったん実践が始まると多くの関係者が疑問をもっても止められないことの危険性がここに表れている。案の定、生徒や教師からの評価も惨憺たるものであった。果たして、研究開発のテーマはほんとうにそれぞれの高校の「現実」から立ち上げられているのか、生徒たちに寄り添った形で課題が設定されているのだろうか、理論的な詰めは充分であるのか、心配になる。高校の関係者のご努力には敬服するが、研究開発のあり方には多くの疑問が残る。「教育

内容の重複」という一見不合理にみえる事実でさえも、生徒の「現実」との慎重な対話を通じて研究の必要性和検証の方法が議論されてしかるべきであろう。

もうひとつの課題は、全体として高校教育の理念と切り離れた形で研究開発が進められていることの限界である。「総合学科」という第三の学科が、単にいまある高校階層構造を補完する制度にとどまるのではなく、それこそ「高校教育改革のパイオニア」として息づくためには、もうひとつの理念をそれぞれの場において考察するとともに、これまでの高校とは異なるつくられ方が試みられなければならない。その意味において、両校の研究開発は「理論と実践を分ける」ことで単なるテクノロジー開発にとどまることを余儀なくされている。生徒へのまなざしや教育のありように対する根源的なふりかえりが質的に不十分なままでは、どんなに立派なカリキュラムであろうがそこに生命を吹き込むことはできない。したがって、研究開発報告書を表面的に読むだけではカリキュラムを「深く」捉えたことにはならないのであり、自らの「理想」との距離でしか評価し得ないという過ちを犯しかねない。

いずれにせよ、これからの高校教育改革に重要なインパクトを与えるのは、従来型の例外的・実験的方法ではなく、高校の「現実」から立ち上げた草の根の取り組み（grassroots method）であり、自生的な方法（naturalistic approach）による学校づくりであろう。実際、いくつかの高校は、従来の学校のとくられ方とはまったく異なる視点と「深い」思想にもとづいて、多くの成果を生み出している。

## （2）自生的カリキュラム研究のすすめ

たとえば、A校では、開校以来の実践の積み重ねから、「生徒を大事にする」「生徒のしんどさに向き合う」ということが上滑りの言葉ではなく、具体的な取り組みとして展開されてきた。しかも、一般の高校がそうであるような「トップダウン」式の学校づくりもとられてこなかった。中核を担う教師たちは「自分の責任において自分で考え具体的に動く」ということを長年かけて身体化してきた。このことは、「産業社会と人間」の中の「社会体験」についての説明にも投影されている。

「…しかし、社会人＝職業人という意味での企業（職場）見学や勤労（職業）体験をするわけではありませんし、文明社会の持つ科学や文化の産物に触れることを目的としているわけでもありません。今回の「社会体験」は、『社会問題』の学習を主たる目的としています。『社会問題』とは、社会のしくみ（構造や制度）の矛盾や不合理から生じるいろいろな問題のことです。」（学校資料より：下線原文）

A高校では、「産業社会＝善」というナイーブな発想から抜け出て、「社会問題」から学んでいくというスタンスをとる。しかも、ただ評論的に「社会問題」を捉えるのではなく、地域で「社会問題」と向き合っている人たちの活動に参加するのである。たとえば、「国際交流」についても「構造的貧困」と「飢餓」の関係を洞察し、しかも具体的に活動している複数の団体を紹介する。紹介された団体へのコンタクトは各自で取り、「社会体験」へと生徒自身が出かけていくのである。表層をなぞったり、あるいは頭の中だけに知識を蓄えて自慢げに過ごすのではなく、知識と体験を身体の中で照らし合わせたりすることで、学ぶことや生きることを深く感じ取る機会を得るのである。この体験は「夏休みボランティア体験」へと発展されていく。ここで詳述する余裕はないが、これらの体



験を通じて確かに一人ひとりが考え行動しそれぞれに学びを深めている。さらに、2学期の企業見学（28事業所）とプレゼンテーションへと展開し、3学期には個人レベルで課題研究発表を行う。もちろん、個人差はあるし、教師から見れば「子どもじみたテーマ」もあるだろう。しかし、かれらの考えが幼稚であると決めつけ、発表する場が共有されなかったとしたらどうだろう。かれら自身がいろいろな発表や取り組む姿に触れながら一枚一枚殻を破っていく機会を結局は失ってしまうことになるのではないか。「上げ膳据え膳」に慣れてしまうことで一人ひとりが考え、市民としてのセンスを磨いていく機会を失ってしまう。それは、私を含めた多くの大人たちが陥ってしまった罠ではないか。A高校の取り組みは、「考える」という手間を省略しないことによって、教師も生徒もそれぞれのペースで成長する環境を放棄しないことに成功しているのである。

A高校は、学校をつくれ方をいい加減にしない。と同時に、教師と生徒が学ぶプロセスを大事にしている。その手法のひとつが「集団づくり」「仲間づくり」である。私たちは、とすれば「伝統的な集団」か「バラバラな個人」かという二律背反の幻想にとらわれてしまう（「自由か規律か」もしかり）。単位制の下で生じる諸矛盾もこの思考習慣からきている。学校づくりをいまま少し丁寧にみていけば、そうではない第三の道があり得ることがわかる。そのひとつの突破口がA高校なのである。

鍵を握るのは、学校という学びの空間において、どこまで参加者のつながりをつけ、お互いの「違い」を認め合っていけるかということである。その意味で、生きることが同質的な者同士が寄り集まり、「異質な者」を排除することで「うまみ」を味わうという、これまでの社会関係の「負」の部分をかかえて克服していけるかがポイントとなる。「生きる」ということは、この人間欲望の根源的な「業」にどのように向き合っていけるかということであろう。それは単に、自分の適性を見分け個人の達成のみをもって人生の目的とすることとは質的に異なる。A高校では、「異質との共存」ということを具体的に学ぶ条件を整えてきた。多くの「新しいタイプの高校」がよりよい学校の「地位」を求め、それを成功の証としてきたのとくらべ、内発的な改革の契機をもってきたA高校にとっては組織の達成は枝葉末節にしか映らない。要は、目の前の具体的な子どもたちの状況に対してどれほどの力づけができ、しかもそれを生徒たち同士で支え合っていけるか（どのように社会とかかわり再構築していけるか）が肝心なのである。まさに、厚生経済学者アムルティア・センのいう意味での「福祉」（well-being）をどれだけ具体的に達成できるかの一点にカリキュラム開発研究の成否はかかっているのである（邦訳『不平等の再検討』岩波書店）。

いま、社会と教育のありようはかなり深刻な状況を抱えている。それに対して、改革はどちらかといえば社会的ダーウィニズムの方へ動き始めている。しかし、その中で、市民レベルで多様な試みが生まれ始めている。「負」を切り捨てずそこから新しい可能性を静かに紡いでいく人たち、単に抽象的に自らと切り離れた立場で評論するのではなく自らの問題として自己省察する人たち…。カリキュラムの開発研究にとって必要なことは、まさにこの可能性の芽をしっかりと嗅ぎ分ける研究者自身のセンスなのではないだろうか。改革の動きをじっくりと見極め、批判的・反省的な考察を丁寧に積み上げていくことでしか、「深さ」を求めるとカリキュラム研究へとつなげていくことはできないのである。

（菊地 栄治）

【資料1】

ア 平成6年度入学生の教育課程表(平成6年度～平成8年度)

| 単位数<br>年次 | 1    |  | 2                         |  | 3      |  | 4    |  | 5                            |  | 6    |  | 7      |  | 8                 |  | 9      |  | 10   |  | 11      |  | 12     |  | 13 |  | 14 |  | 15 |  | 16 |  | 17 |  | 18 |  | 19 |  | 20 |  | 21 |  | 22 |  | 23 |  | 24 |  | 25 |  | 26 |  | 27 |  | 28 |  | 29 |  | 30 |  | 31 |  | 32 |  | 33 |  |
|-----------|------|--|---------------------------|--|--------|--|------|--|------------------------------|--|------|--|--------|--|-------------------|--|--------|--|------|--|---------|--|--------|--|----|--|----|--|----|--|----|--|----|--|----|--|----|--|----|--|----|--|----|--|----|--|----|--|----|--|----|--|----|--|----|--|----|--|----|--|----|--|----|--|----|--|
|           | 国語   |  | 現代社会<br>倫理(2)<br>政治・経済(2) |  | 数学     |  | 世界史A |  | 物理IA<br>化学IA<br>生物IA<br>地理IA |  | 体育   |  | 保健     |  | 音楽I<br>美術I<br>書道I |  | 総合選択科目 |  | 家庭一般 |  | 産業社会と人間 |  | L      |  | H  |  | R  |  | P  |  | L  |  | H  |  | R  |  | P  |  | L  |  | H  |  | R  |  | P  |  | L  |  | H  |  | R  |  | P  |  |    |  |    |  |    |  |    |  |    |  |    |  |
| 1年次       | 国語   |  | 現代社会<br>倫理(2)<br>政治・経済(2) |  | 数学     |  | 世界史A |  | 物理IA<br>化学IA<br>生物IA<br>地理IA |  | 体育   |  | 保健     |  | 音楽I<br>美術I<br>書道I |  | 総合選択科目 |  | 家庭一般 |  | 産業社会と人間 |  | L      |  | H  |  | R  |  | L  |  | H  |  | R  |  | L  |  | H  |  | R  |  | L  |  | H  |  | R  |  | L  |  | H  |  | R  |  |    |  |    |  |    |  |    |  |    |  |    |  |    |  |
| 2年次       | 地理歴史 |  | 理科                        |  | 体育     |  | 保健   |  | 家庭一般                         |  | 情報基礎 |  | 総合選択科目 |  |                   |  |        |  |      |  |         |  | 自由選択科目 |  | L  |  | H  |  | R  |  | L  |  | H  |  | R  |  | L  |  | H  |  | R  |  | L  |  | H  |  | R  |  |    |  |    |  |    |  |    |  |    |  |    |  |    |  |    |  |    |  |
| 3年次       | 体育   |  | 課題研究                      |  | 総合選択科目 |  |      |  |                              |  |      |  |        |  | 自由選択科目            |  |        |  |      |  |         |  |        |  | L  |  | H  |  | R  |  | L  |  | H  |  | R  |  | L  |  | H  |  | R  |  | L  |  | H  |  | R  |  | L  |  | H  |  | R  |  |    |  |    |  |    |  |    |  |    |  |    |  |

- 1年次—必修科目を中心とした共通履修が多く、「公民」、「理科」、「芸術」は各教科からの選択となる。また、総合選択科目群から4単位の科目を選択し、学習する。〈1年次の「総合選択科目」は「英語I」(4単位)・「オーラル・コミュニケーションA・B」(4単位)・「流通経済」(4単位)・「計算事務」(4単位)で、この4科目の中から1科目選択する。
- 2年次—(1) 選択必修(地理歴史)は、「日本史A(2)・日本史B(3)・地理A(2)・地理B(3)」から1科目選択すること。但し、( )の中の数字は単位数を表す。  
(2) 選択必修(理科)は「物理IA(2)・生物IA(2)・地学IA(2)・物理IB(4)・化学IB(4)・生物IB(4)・地学IB(4)」から1科目選択すること。但し、1年次で選択した科目は、履修できない。  
(3) 「系列」による「総合選択科目群」、を参考にして基礎科目を中心に選択し、学習する。総合選択科目は14～17単位で、自由選択科目は3単位である。
- 3年次—「総合選択科目群」、「自由選択科目」から適性、興味、進路に応じて選択し、学習する。総合選択科目は16単位で、自由選択科目は11単位である。

( ) は単位数

| 区分           | 総合選択科目群          |                  |             |                  | 自由選択科目     |
|--------------|------------------|------------------|-------------|------------------|------------|
|              | 基礎科目             |                  | 基礎以外の科目     |                  |            |
| 人文科学系列       | 国語Ⅱ(4)           | 英語Ⅱ(4)           | 現代文(4)      | トピック・ディスカッション(2) | 国語表現(2)    |
|              | 古典Ⅰ(3)           | トピック・ディスカッション(2) | 古典読解(2)     | トピック・ディスカッション(2) | 現代語(2)     |
|              | 歴史B(3)           | トピック・ディスカッション(2) | 世界史B(2)     | リーディング(4)        | 古典Ⅰ(3)     |
|              | 日本史B(3)          | 流通経済(4)          | 日本史B(2)     | 文書処理(4)          | 古典Ⅱ(3)     |
|              | 地理B(3)           | 英語実務(4)          | 地理B(2)      | 比較文化(4)          | 現代社会(4)    |
|              | 数学A(2)           | 文書処理(2)          |             |                  | 倫理(2)      |
| 自然科学系列       | 世界史B(3)          | 英語Ⅰ(4)           | 世界史B(2)     | リーディング(4)        | 政治・経済(2)   |
|              | 数学Ⅱ(4)           | 英語Ⅱ(4)           | 数学Ⅱ(4)      | 工業基礎(4)          | 数学A(3)     |
|              | 数学A(2)           | トピック・ディスカッション(2) | 物理ⅠB(4)     | 農業基礎(4)          | 数学B(2)     |
|              | 物理IB(4)          | トピック・ディスカッション(2) | 化学ⅠB(4)     | 環境工学(4)          | 数学C(2)     |
|              | 化学IB(4)          | 工業基礎(4)          | 生物ⅠB(4)     |                  |            |
|              | 生物IB(4)          | 農業基礎(4)          | 地学ⅠB(4)     |                  |            |
|              | 地学ⅠB(4)          |                  |             |                  |            |
| 情報サイバネティクス系列 | 国語Ⅱ(4)           | 英語実務(2)          | プログラミング(4)  |                  | 物理Ⅱ(2)     |
|              | 数学Ⅱ(4)           | 流通経済(4)          | 情報管理(4)     |                  | 化学Ⅱ(2)     |
|              | 数学A(2)           | 情報処理(4)          | 経営情報(4)     |                  | 生物Ⅱ(2)     |
|              | 体育(2)            | 簿記(5)            | 工業簿記(4)     |                  | 地学Ⅱ(2)     |
|              | 英語Ⅰ(4)           | 英語Ⅱ(4)           | 商業法規(4)     |                  | ライティング(4)  |
|              | トピック・ディスカッション(2) | トピック・ディスカッション(2) | 秘書実務(4)     |                  |            |
|              |                  |                  | ハードウェア技術(4) |                  |            |
| 流通システム系列     | 国語Ⅱ(4)           | 英語実務(2)          | 会計(4)       |                  | 音楽Ⅱ(3)     |
|              | 数学Ⅱ(4)           | 流通経済(4)          | 税務会計(4)     |                  | 美術Ⅱ(3)     |
|              | 数学A(2)           | 計算事務(4)          | 商業法規(4)     |                  | 音楽Ⅲ(3)     |
|              | 体育(2)            | 簿記(5)            | 総合実践(4)     |                  | 美術Ⅳ(3)     |
|              | 英語Ⅰ(4)           | 文書処理(2)          | 文書処理(4)     |                  | 音楽Ⅴ(3)     |
|              | トピック・ディスカッション(2) | 英語Ⅱ(4)           | 計算事務(4)     |                  | 保育(3)      |
|              | トピック・ディスカッション(2) |                  |             |                  | 食育(3)      |
| 福祉サイバネティクス系列 | 国語Ⅱ(4)           | 家庭看護・福祉(3)       | 流通経済(4)     |                  | 経営(3)      |
|              | 数学A(2)           | 看護基礎医学(3)        | 老人介護(4)     |                  | 国際経済(3)    |
|              | 体育(2)            | 音楽Ⅱ(3)           | 保育(4)       |                  | 商品(3)      |
|              | 英語Ⅰ(4)           | 基礎看護(4)          | 基礎看護(4)     |                  | マーケティング(3) |
|              | 英語Ⅱ(4)           | 介護情報処理(4)        | 介護情報処理(4)   |                  | 産業デザイン(3)  |
|              | トピック・ディスカッション(2) | インテリア計画(4)       |             |                  |            |
|              | トピック・ディスカッション(2) |                  |             |                  | ダンス(4)     |
| 体育・健康系列      | 国語Ⅱ(4)           | トピック・ディスカッション(2) | スポーツⅠ(4)    |                  |            |
|              | 数学Ⅱ(4)           | 体育理論(3)          | スポーツⅡ(4)    |                  | 郷土文化(4)    |
|              | 数学A(2)           | 体育(3)            | スポーツⅢ(4)    |                  |            |
|              | 体育(2)            | 音楽Ⅱ(3)           | 野外活動(4)     |                  | 社会福祉基礎(4)  |
|              | 英語Ⅰ(4)           | 英語Ⅱ(4)           | 基礎看護(4)     |                  |            |
|              | トピック・ディスカッション(2) |                  | レクリエーション(4) |                  | 生物工学基礎(4)  |
| 国際協力系列       | 国語Ⅱ(4)           | 英語Ⅱ(4)           | 英語表現(4)     |                  | 時事英語(4)    |
|              | 地理A(3)           | トピック・ディスカッション(2) | 外国事情(4)     |                  | 中国語Ⅰ(4)    |
|              | 数学Ⅱ(4)           | トピック・ディスカッション(2) | フランス語Ⅰ(4)   |                  |            |
|              | 数学A(2)           | 農業基礎(4)          | ドイツ語Ⅰ(4)    |                  | 国際社会基礎(3)  |
|              | 体育(2)            |                  | 農業機械(4)     |                  | 国際地域研究(4)  |
|              | 音楽Ⅱ(3)           |                  |             |                  |            |
|              | 英語Ⅰ(4)           |                  |             |                  |            |

| 1 年 次  |                |                   |        | 2 年 次          |                |             |          | 3 年 次          |                |          |          |   |  |
|--|----------------|-------------------|--------|----------------|----------------|-------------|----------|----------------|----------------|----------|----------|---|--|
| 教科   | 科 目            | 単位                |        | 教科             | 科 目            | 単位          |          | 教科             | 科 目            | 単位       |          |   |  |
| 必修<br>科目   | 国語             | 国語I               | 4      | 必修<br>科目       | 保健<br>体育       | 2           | 必修<br>科目 | 保健<br>体育       | 2              | 必修<br>科目 | 保健<br>体育 | 2 |  |
|  | 数学             | 数学I               | 4      |                | 家庭             | 家庭一般        |          | 2              |                |          |          |   |  |
|  | 保健<br>体育       | 体育<br>保健          | 2<br>1 |                |                |             |          |                |                |          |          |   |  |
|  | 芸術             | 音楽I<br>美術I<br>書道I | 1科目選択  |                | 2              |             |          |                |                |          |          |   |  |
|  | 家庭             | 家庭一般              | 2      |                |                |             |          |                |                |          |          |   |  |
|  | 原則<br>履修<br>科目 | 産業社会と人間           | 4      |                | 原則<br>履修<br>科目 | 情報に関する基礎的科目 |          | 2              | 原則<br>履修<br>科目 |          | 課題研究     | 2 |  |
| 1年次 必修科目単位数計   |                |                   | 19     | 2年次 必修科目単位数計   |                |             | 7        | 3年次 必修科目単位数計   |                |          | 4        |   |  |
| 1年次 総合選択科目単位数計   |                |                   | 12     | 2年次 総合選択科目単位数計 |                |             | 20       | 3年次 総合選択科目単位数計 |                |          | 16       |   |  |
| 1年次 自由選択科目単位数計   |                |                   | 0      | 2年次 自由選択科目単位数計 |                |             | 4        | 3年次 自由選択科目単位数計 |                |          | 11       |   |  |
| <b>自由選択科目 ( ) は単位数</b>   |                |                   |        |                |                |             |          |                |                |          |          |   |  |
| <p>【普通科目】<br/>                     国語表現 (2) 現代語 (3) 古典I (2)<br/>                     古典II (3)<br/>                     現代社会 (4) 倫理 (2) 政治・経済 (2)<br/>                     世界史A (2) 日本史B (3) 地理B (3)<br/>                     数学A (2) 数学B (2) 数学C (3)<br/>                     物理II (3) 化学II (3) 生物II (3) 地学II (3)<br/>                     ライティング (4)<br/>                     音楽II (2) 美術II (2) 書道II (2)<br/>                     音楽III (3) 美術III (3) 書道III (3)</p> <p>【専門科目】<br/>                     保育 (3) 食物 (3)<br/>                     簿記 (4) 経営 (3) 国際経済 (3) 商品 (3)<br/>                     マーケティング (3) 商業デザイン (3)<br/>                     商業経済 (3)<br/>                     ダンス (4)<br/>                     郷土文化 (2)<br/>                     社会福祉基礎 (2)<br/>                     生物工学基礎 (2)<br/>                     時事英語 (4)<br/>                     中国語I (2)<br/>                     国際福祉基礎 (2) 国際地域研究 (2)</p> |                |                   |        |                |                |             |          |                |                |          |          |   |  |
| 特別活動   |                |                   | 2      | 特別活動           |                |             | 2        | 特別活動           |                |          | 2        |   |  |
| 1年次 総履修単位数   |                |                   | 33     | 2年次 総履修単位数     |                |             | 33       | 3年次 総履修単位数     |                |          | 33       |   |  |

最大履修可能教科科目単位数  
**93単位**  
 卒業認定に必要な教科科目単位数  
**80単位以上**

| 区分<br>系列                     | 総合選択科目群  |  |   |  |
|------------------------------|--|--|---|--|
|                              | 基礎科目   |  | 基礎以外の科目   |  |
| 人文<br>科学<br>系列               | 国語II (4)<br>古典I (2)<br>世界史A (2)<br>日本史A (2)<br>地理A (2)<br>数学A (2)<br>英語I (4)                       | 英語II (4)<br>イ-フレ・コミュニケーションA (2)<br>イ-フレ・コミュニケーションB (2)<br>流通経済 (4)<br>英語実務 (2)<br>文書処理 (2)                       | 現代文 (4)<br>古典講義 (2)<br>世界史B (4)<br>日本史B (4)<br>地理B (4)<br>英語II (2)                      | イ-フレ・コミュニケーションB (2)<br>イ-フレ・コミュニケーションC (2)<br>リーディング (4)<br>文書処理 (4)<br>比較文化 (2) |
| 自然<br>科学<br>系列               | 世界史B (4)<br>数学II (4)<br>数学A (2)<br>物理IB (4)<br>化学IB (4)<br>生物IB (4)<br>地学IB (4)                    | 英語I (4)<br>英語II (4)<br>イ-フレ・コミュニケーションA (2)<br>イ-フレ・コミュニケーションB (2)<br>工業基礎 (2)<br>農業基礎 (2)<br>倫理 (2)<br>政治・経済 (2) | 世界史B (4)<br>数学III (4)<br>物理IB (4)<br>化学IB (4)<br>生物IB (4)<br>地学IB (4)                   | リーディング (4)<br>工業基礎 (2)<br>農業基礎 (2)<br>環境工学 (2)                                   |
| 情報<br>サ<br>ー<br>ビ<br>ス<br>系列 | 国語II (4)<br>数学II (4)<br>数学A (2)<br>体育 (2)<br>英語I (4)<br>英語II (4)<br>イ-フレ・コミュニケーションA (2)            | 英語実務 (2)<br>流通経済 (4)<br>情報処理 (4)<br>簿記 (2)<br>物理IA (2)<br>イ-フレ・コミュニケーションB (2)                                    | プログラミング (4)<br>情報管理 (4)<br>経営情報 (4)<br>工業簿記 (4)<br>商業法規 (4)<br>秘書実務 (4)<br>ハードウェア技術 (4) |  |
| 流通<br>シ<br>ス<br>テ<br>ム<br>系列 | 国語II (4)<br>数学II (4)<br>数学A (2)<br>体育 (2)<br>英語I (4)<br>英語II (4)<br>イ-フレ・コミュニケーションA (2)            | 英語実務 (2)<br>流通経済 (4)<br>商業法規 (4)<br>簿記 (4)<br>文書処理 (2)<br>イ-フレ・コミュニケーションB (2)                                    | 会 計 (4)<br>税務会計 (4)<br>商業法規 (4)<br>簿記 (4)<br>文書処理 (4)<br>計算事務 (4)                       |  |
| 福祉<br>サ<br>ー<br>ビ<br>ス<br>系列 | 国語II (4)<br>数学A (2)<br>体育 (2)<br>英語I (4)<br>英語II (4)<br>イ-フレ・コミュニケーションA (2)<br>イ-フレ・コミュニケーションB (2) | 家庭看護・福祉<br>看護基礎医学<br>音楽II (2)<br>美術II (2)<br>生物IA (2)<br>化学IA (2)  | 流通経済 (4)<br>老人介護 (4)<br>保 育 (4)<br>看護看護 (2)<br>看護情報処理 (4)<br>インテリア計画 (4)                |  |
| 体育<br>・<br>健康<br>系列          | 国語II (4)<br>数学II (4)<br>数学A (2)<br>体育 (2)<br>英語I (4)<br>イ-フレ・コミュニケーションA (2)                        | イ-フレ・コミュニケーションB (2)<br>イ-フレ・コミュニケーションC (2)<br>体 操 (2)<br>音 楽 II (2)  | スポーツI (4)<br>スポーツII (4)<br>スポーツIII (4)<br>野外活動 (4)<br>基礎看護 (2)<br>レクリエーション (4)          |  |
| 国際<br>協<br>力<br>系列           | 国語II (4)<br>地理A (2)<br>数学II (4)<br>数学A (2)<br>体育 (2)<br>音楽II (2)<br>英語I (4)                        | 英語II (4)<br>イ-フレ・コミュニケーションA (2)<br>イ-フレ・コミュニケーションB (2)<br>農業基礎 (2)<br>地学IA (2)                                   | 英語表現 (4)<br>外国事情 (4)<br>フランス語I (4)<br>ドイツ語I (4)<br>農業機械 (2)                             |  |

ウ 平成8年度入学生の教育課程表(平成8年度~平成10年度)

( ) は単位数

| 1 年 次  |          |                   |          | 2 年 次   |          |             |      | 3 年 次          |        |      |    |   |
|--|----------|-------------------|----------|---|----------|-------------|------|----------------|--------|------|----|---|
| 教科   | 科 目      | 単 位               |          | 教科  | 科 目      | 単 位         |      | 教科             | 科 目    | 単 位  |    |   |
| 必修科目   | 国語       | 国語I               | 4        | 必修科目  | 保健<br>体育 | 2           | 必修科目 | 保健             | 体育     | 2    |    |   |
|  | 数学       | 数学I               | 4        |   | 保健<br>体育 | 2           |      | 保健             | 体育     | 2    |    |   |
|  | 保健<br>体育 | 体育<br>保健          | 2<br>1   |   |          |             |      |                |        |      |    |   |
|  | 芸術       | 音楽I<br>美術I<br>書道I | 1科目選択    |   | 2        |             |      |                |        |      |    |   |
|  | 家庭       | 家庭一般              | 2<br>(2) |   |          |             |      |                |        |      |    |   |
|  | 原則履修科目   | 産業社会と人間           | 4<br>(2) |   | 原則履修科目   | 情報に関する基礎的科目 |      | 2              | 原則履修科目 | 課題研究 |    | 2 |
| 1年次 必修科目単位数計   |          |                   | 19       | 2年次 必修科目単位数計  |          |             | 5    | 3年次 必修科目単位数計   |        |      | 4  |   |
| 1年次 総合選択科目単位数計   |          |                   | 12       | 2年次 総合選択科目単位数計  |          |             | 22   | 3年次 総合選択科目単位数計 |        |      | 16 |   |
| 1年次 自由選択科目単位数計   |          |                   | 0        | 2年次 自由選択科目単位数計  |          |             | 4    | 3年次 自由選択科目単位数計 |        |      | 11 |   |
| ※原則履修科目「産業社会と人間」<br>(4単位)の中の2単位を「家庭一般」の代替とする。                    |          |                   |          | 自由選択科目 ( ) は単位数   |          |             |      |                |        |      |    |   |
| 最大履修可能教科科目単位数<br><b>93単位</b><br>卒業認定に必要な教科科目単位数<br><b>80単位以上</b> |          |                   |          | 【普通科目】<br>国語表現(2) 現代語(3) 古典I(2)<br>古典II(3)<br>現代社会(4) 倫理(2) 政治・経済(2)<br>世界史B(3) 日本史B(3) 地理B(3)<br>数学A(2) 数学B(2) 数学C(3)<br>物理II(3) 化学II(3) 生物II(3) 地学II(3)<br>ライティング(4)<br>音楽II(2) 美術II(2) 書道II(2)<br>音楽III(3) 美術III(3) 書道III(3) |          |             |      |                |        |      |    |   |
|  |          |                   |          | 【専門科目】<br>保育(3) 食物(3)<br>簿記(4) 経営(3) 国際経済(3) 商品(3)<br>マーケティング(2) 商業デザイン(2)<br>商業経済(3)<br>ダンス(4)<br>郷土文化(2)<br>社会福祉基礎(2)<br>生物工学基礎(2)<br>時事英語(4)<br>中国語I(2)<br>国際事務基礎(2) 国際地域研究(2)   |          |             |      |                |        |      |    |   |
| 特別活動   |          | 2                 | 特別活動     | 2   | 特別活動     |             | 2    | 特別活動           |        | 2    |    |   |
| 1年次 総履修単位数   |          |                   | 33       | 2年次 総履修単位数  |          |             | 33   | 3年次 総履修単位数     |        |      | 33 |   |

| 科目<br>系列  | 総合選択科目群  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|-----------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| 人文科学系列    | 国語II(4) 現代文(4) 古典I(2) 古典講読(2) 世界史A(2)<br>世界史B(4) 日本史A(2) 日本史B(4) 地理A(2) 地理B(4)<br>数学A(2) 英語I(4) 英語II(2) 英語II(4) 英語II(4)<br>外国語コミュニケーションB(2) 外国語コミュニケーションC(2) リーディング(4)<br>流通経済(4) 英語英務(2) 文書処理(2) 文書処理(4)<br>比較文化(2) |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 自然科学系列    | 世界史B(4) 倫理(2) 政治・経済(2) 数学II(2) 数学II(4)<br>数学III(4) 数学A(2) 物理IB(4) 化学IB(4) 化学IB(4)<br>生物IB(4) 地学IB(4) 英語I(4) 英語II(4)<br>外国語コミュニケーションA(2) 外国語コミュニケーションB(2) リーディング(4)<br>農業基礎(2) 工業基礎(2) 環境工学(2)                        |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 情報サイエンス系列 | 国語II(4) 数学II(4) 数学A(2) 物理IA(2) 体育(2)<br>英語I(4) 英語II(4) 外国語コミュニケーションA(2) 外国語コミュニケーションB(2)<br>ハードウェア技術(4) 流通経済(4) 簿記(4) 情報処理(4) 商業法規(4)<br>英語英務(2) 工業簿記(4) プログラミング(4) 情報管理(4)<br>経営情報(4) 秘書英務(4)                       |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 流通システム系列  | 国語II(4) 数学II(4) 数学A(2) 英語I(4) 英語II(4)<br>外国語コミュニケーションA(2) 外国語コミュニケーションB(2) 体育(2)<br>流通経済(4) 簿記(4) 計算事務(4) 総合実践(4) 商業法規(4)<br>英語英務(2) 会計(4) 税務会計(4) 文書処理(2) 文書処理(4)   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 福祉サイエンス系列 | 国語II(4) 数学A(2) 化学IA(2) 生物IA(2) 体育(2)<br>音楽II(2) 美術II(2) 英語I(4) 英語II(4) 外国語コミュニケーションA(2)<br>外国語コミュニケーションB(2) 康 育(4) 家庭看護・福祉(2) 老人介護(2)<br>インテリア計画(4) 流通経済(4) 看護基礎医学(2) 基礎看護(2)<br>看護情報処理(4)                           |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 体育・健康系列   | 国語II(4) 数学II(4) 数学A(2) 体育(2) 体育理論(2) 体操(2)<br>スポーツI(4) スポーツII(4) スポーツIII(4) 野外活動(4)<br>レクリエーション(4) 音楽II(2) 英語I(4) 外国語コミュニケーションA(2)<br>外国語コミュニケーションB(2) 基礎看護(2)   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 国際協力系列    | 国語II(4) 地理A(2) 数学II(4) 数学A(2) 地学IA(2) 体育(2)<br>音楽II(2) 英語I(4) 英語II(4) 外国語コミュニケーションA(2)<br>外国語コミュニケーションB(2) 外国事情(4) フランス語I(2) ドイツ語I(2)<br>英語表現(4) 農業基礎(2) 農業機械(2)   |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |

| 月 | 項 目                | 指 導 内 容  | 指導形態                | 時数        |
|---|--------------------|--|---------------------|-----------|
| 四 | *オリエンテーション         | ○ どのようなことをどのように学ぶのか、「産業社会と人間」についてのオリエンテーション・学習の意義やねらいについて説明する<br>・主体的な取り組みや自ら考えることの重要性を確認する    | 講 義                 | 2         |
|   |                    | ○ 自分を正しく知るための方法や意味を考える<br>・自分の行動の特徴を手がかりに自分を知る<br>・自己理解の必要性を理解する                               | 講 義                 | 1         |
|   |                    | ● 家族の中における自分の役割や立場を考える<br>・ワークシート「家族の変化」を作成し、現代の家族の実態を知る                                       | 作 業<br>(家庭科より資料の提供) | 1         |
|   |                    | ○ 自分史「私の15年間」を作成し、今までの自分を振り返る<br>○ 自己紹介をする文「私」を書き、どのくらい自己理解をしているか、その難しさについて考える                 | 作 文                 | 1         |
| 月 | (2) 青年期の在り方<br>生き方 | ○ 資料「青年期」により、青年期における身体的・心理的特徴や課題について理解する   | 講 義                 | 1         |
|   |                    | ○ 資料「自我の自覚め」により、青年期において鋭くなる自己意識や自我の自覚めについて考える  | 講 義                 | 1         |
|   |                    | ● 自分らしい在るべき姿について考える<br>・ワークシート「自分らしい生き方を考える」を作成し自分に合う生き方をするにはどうしたらよいかを考える                      | 作 業<br>(家庭科より資料の提供) | 1         |
|   |                    | ○ ビデオ「今が出发点」を視聴する<br>・感想をまとめ、自分を見つめるきっかけとする  | 視 聴<br>作 業          | 1<br>(10) |
| 五 | (3) 個性と高校生活        | ○ 資料「自分を考える」により、自分の個性や性格について考える<br>・個性について考える<br>・インタビュー・ゲームを通して、自分の性格と他人から見た自分の性格とを比べ自己理解を深める | 講 義<br>討 議          | 1         |
|   |                    | ○ 職業レディネステストの実施  | 検 査                 | 1         |
|   |                    | ○ 職業レディネステストの結果票(プロフィール)を作成する  | 作 業                 | 1         |
|   |                    | ○ ワークシート「職業と適性を考える」を作成し、自分の興味・自信・関心についてまとめる<br>とともに自分の職業適性について考える                              | 作 業<br>(担任とのT)      | 2         |
| 月 |                    | ○ ビデオ「みんなの中の自分」を視聴する<br>・感想を発表し、どのような高校生活を過ごしたいかを考える   | 視 聴<br>スピーチ         | 1         |

| 月 | 項 目               | 指 導 内 容   | 指導形態   | 時数         |
|---|-------------------|---|--|------------|
| 五 | 2. 進路について考える      | ○ 将来の自分の進路について、動機も含めて調査する   | 調 査  | 1          |
|   |                   | ○ 進路学習のガイダンス<br>・高校生の卒業後の進路状況<br>・職業・上級学校の種類と内容<br>・職業選択のポイント<br>・進路設計のポイント<br>・ワークシート「進路選択の心がまえ」を作成し、どのようなことを考えておくべきかを検討する                                     | 講 義<br>作 業   | 3          |
|   |                   | ○ 本校の進路状況を知る<br>・進路指導課長による講話「本校生の進路状況」  | 講 話  | 1          |
|   |                   | (1) 職業について  | ○ 産業と職業の種類と内容を学習する<br>・資料やワークシートの作成から、職業理解と職業適性や能力を知る  | 講 義<br>作 業 |
| 月 |                   | ○ ビデオ「企業の組織と活動」を視聴する<br>・さまざまな仕事があることを知る  | 視 聴  | 1          |
|   |                   | ○ ワークシート「職業の持つ社会的役割」を作成し、職業を選ぶ際の基準を考え、職業の三要素である経済性・社会性・個性について考える  | 作 業  | 1          |
|   |                   | ○ 資料「民間企業と公務員」により、その違いを理解する   | 講 義  | 1          |
|   |                   | (2) 上級学校について  | ○ 上級学校について知る<br>・ビデオを視聴し、進学目的や学生生活を知る<br>・大学・短大・専門学校の種類・教育の特色・学科を知るとともに、職業との関連を知る<br>・入試制度、特に推薦入試の仕組みを理解する | 講 義<br>視 聴 |
| 六 |                   | ○ 上級学校見学の事前指導<br>・ガイダンス、しよりの作成、質問カードの作成   | 講 義<br>作 業   | 1          |
|   |                   | ○ 上級学校の見学(6月24日実施)<br>・午前(全員見学)<br>盛岡大学・盛岡大学短期大学部の見学<br>・午後(コース別見学)<br>(ア) 盛岡情報ビジネス専門学校の見学<br>(イ) 専門学校盛岡カレッジオブビジネスの見学<br>(ウ) 盛岡社会福祉専門学校の見学<br>(エ) 若手女子看護短期大学の見学 | 視 見<br>学   | 6          |
|   |                   | ○ 上級学校見学の感想文作成と事後指導<br>・見学の内容をまとめ感想文を書き、新たな疑問点がある場合、それを解決する<br>・進学のためにどのような準備が必要かを考える   | 作 文<br>講 義   | 2          |
|   |                   | (担任とのT)   | (12)   |            |
| 七 | 3. これからの学習について考える | ○ カリキュラムについての説明と質疑<br>・履修科目についてカリキュラムを基に説明する<br>・選択科目ガイドブックによる系列・科目選択についての説明と質疑   | 講 義  | 2          |

| 月       | 項目                | 指導内容   | 指導形態                  | 時数       |
|---------|-------------------|--|-----------------------|----------|
| 七<br>月  | 3. これからの学習について考える | ○ 教科・科目の内容、選択についてのガイダンス<br>・教科主任による科目の学習内容と選択時の留意事項等についての説明  | ガイダンス<br>(担任とのPT)     | 2        |
|         |                   | ● 将来のおおよその人生について検討する<br>・ワークシート「人生の出来事」を作成し、将来の自分の進路等を検討し、学習計画について考える  | 作業<br>(家庭科より資料の提供)    | 1        |
| 八<br>月  | 4. 就職と進学の意義について   | ○ 学習計画の立案<br>・ワークシート「学習計画」を作成し、将来を見通して学習計画を立てる   | 作業                    | 1        |
|         |                   | ○ 学習計画に基づき2、3年次における履修科目の選択を行う<br>・ホームルーム担任、科目選択ガイダンスティーチャーによる相談や指導を必要に応じて行い科目選択を行う<br>・選択科目登録用紙の提出                 | 作業<br>相談<br>(担任とのPT)  | 9        |
| 九<br>月  | 5. 職業生活への適応       | ○ 連携校の見学（7月22日実施）<br>・自然科学系系列希望者による連携校岩谷農林高校の見学  | 見学                    | (15)     |
|         |                   | ○ 就職や進学における選択の大切さについて考える<br>・資料「私の進路」により、進路選択の大切さについての理解を深める   | 講義                    | 1        |
| 十<br>月  | 6. 望ましい職業観、勤労観    | ○ 討議資料「将来の人生の目標」の作成<br>・各自が討議の資料とするため、生き方についての自分の考えをまとめる   | 作業                    | 1        |
|         |                   | ○ 将来の人生の目標について話し合う<br>・クラスを6班に分け、討議資料をもとに話し合い、まとめたものを代表が発表する   | 討議                    | 2        |
| 十一<br>月 | 7. 職業生活と法律        | ● 自分の将来の人生設計を考える<br>・ライフプラン「私の生活設計表」を作成し、人生80年時代の生き方考える  | 講義<br>討議<br>(家庭科とのPT) | 2<br>(6) |
|         |                   | ○ 学校と職場の違いについて学習する<br>・ワークシート「学校と職場の違い」を作成し、学校と職場の違いを考える   | 作業                    | 1        |
| 十二<br>月 | 8. 職業生活への適応       | ○ 職業生活への適応について学習する<br>・ワークシート「職業生活への適応」を作成し、職業生活への適応を考える   | 講義<br>作業              | 2        |
|         |                   | ○ 近隣企業・地元企業、施設見学の事前指導<br>・ガイダンス、しおりの作成、質問カードの作成  | 講義<br>作業              | 1        |
| 一<br>月  | 9. 職業生活への適応       | ○ 近隣企業・地元企業、施設見学（9月9日実施）<br>・午前（全員見学）<br>みちのくココ・コーラボトリング花巻工場<br>・午後（コース別見学）<br>(ア) 福祉・医療コース<br>特別養護老人ホーム聖愛園、県立江刺病院 | 見学<br>担任とのPT          | 6        |

| 月       | 項目             | 指導内容  | 指導形態                 | 時数        |
|---------|----------------|---|----------------------|-----------|
| 九<br>月  | 5. 職業生活への適応    | (イ) 官庁コース<br>江刺市役所、江刺郵便局<br>(ウ) 情報コース<br>胆江日日新聞社、水沢テレビ株式会社<br>(ニ) 工業団地コース<br>東京エレクトロン東北株式会社<br>東北焼結金属株式会社<br>(オ) 地元産業コース<br>クミアイ醤油株式会社、ホテルニュー江刺 |                      |           |
|         |                | ○ 近隣企業・地元企業、施設見学の感想文作成と事後指導<br>・見学の内容をまとめ感想文を書き、職場の実際について理解するとともに、新たな疑問点がある場合、それを解決する   | 作文                   | 1         |
| 十<br>月  | 6. 望ましい職業観、勤労観 | ○ 前期期末までのまとめと考査についての指導<br>○ 前期末考査<br>・「自己の姿容」、「職業観の変化」を題目にして述べる   | 講義<br>考査             | 1<br>1    |
|         |                | ○ 討議資料「私の職業についての見方」の作成<br>・各自が討議の資料とするため、職業についての自分の考えをまとめる  | 作業                   | 1         |
| 十一<br>月 | 7. 職業生活と法律     | ○ 職業観や職業生活への適応について話し合う<br>クラスを6班に分け、討議資料をもとに話し合い、まとめたものを代表が発表する   | 討議                   | 2<br>(16) |
|         |                | ○ 職業、勤労の意義について学習する<br>・ワークシート「人と職業」を作成し、職業のもつ意義や勤労の意義について考える  | 講義<br>作業             | 1         |
| 十二<br>月 | 8. 職業生活と法律     | ○ 職業に関するアンケートを生徒に実施する<br>・職業観、余暇等についての生徒の意識を調査する  | 調査                   | 1         |
|         |                | ○ 職業に関するアンケートの結果について考える<br>・職業に関するアンケートの結果について分析し、自分達の職業観、勤労観について考える  | 講義                   | 2         |
| 一<br>月  | 9. 職業生活への適応    | ○ 社会で活躍している職業人の体験を聞く<br>「職業人の体験を聞く」<br>○ 講演を聞いての感想文を作成し、自分の進路決定の参考にする   | 講演<br>(担任とのPT)<br>作文 | 2<br>1    |
|         |                | ○ 勤労者の保護政策について学習する<br>・資料「勤労者を守る法律」により、日本国憲法、労働基準法など勤労者を保護する法律の内容について知る<br>・労働災害と補償について理解する<br>・職業生活と人権について考える                                  | 講義                   | 3         |

| 月   | 項目  | 指導内容   | 指導形態           | 時数   |
|-----|---|--|----------------|------|
| 十月  | 7. 職業生活と法律                                  | ○ 社会保険行政について学習する<br>・社会人講師による講演<br>「社会保険の現状-雇用保険について」  | 講演<br>(担任とのPT) | 2    |
|     |   | ○ 講演を聞いての感想文を作成し、社会保険についてまとめる  | 作文             | 1    |
|     |   | ○ 職業に関する諸制度や資格等について学習する<br>・ワークシート「職業と資格」を作成し、希望する職業につくための資格を知り、その取得方法を調べる<br>・求人票の見方を学ぶ                 | 講義<br>作業       | 3    |
| 十一月 | 8. 産業の発展と社会の変化<br>(1) 科学技術の発達に伴う産業の発展と社会の変化 | ○ 産業界の現状を学習する<br>・ワークシート「産業構造の変化、産業の実態」を作成し、花形産業、産業別就業人口、産業別国内総生産の移り変わり、リストラクチャリング、経済のソフト化・サービス化について理解する | 講義<br>作業       | 3    |
|     |   | ○ 情報化による社会の変化や科学技術の発達について学習する<br>・社会人講師による講演<br>「現代技術の最先端について」   | 講演<br>(担任とのPT) | 2    |
|     |   | ○ 講演を聞いての感想文を作成し、現代技術についてまとめる  | 作文             | 1    |
| 十一月 | 9. 進路と自己実現                                  | ○ 情報化、国際化などの社会の変化について学習する<br>・ワークシート「産業構造、情報化、国際化等の社会の変化」を作成し、産業の動向、情報化とコンピュータ、さまざまな国際化等社会の変化について把握する    | 講義<br>作業       | 3    |
|     |   | ○ 海外生活経験者による海外から見た日本の在り方等について聞く<br>・社会人講師による講演<br>「中国(延吉)から見た日本」   | 講演<br>(担任とのPT) | 2    |
|     |   | ○ 講演を聞いての感想文を作成し、国際化社会における在り方や生き方について考える   | 作文             | 1    |
|     |   | ○ 職業と自己の適性について<br>・労働省編一般職業適性検査の実施   | 検査             | 1    |
|     |   |  |                | (18) |
|     |   |  |                | (13) |

| 月   | 項目                                   | 指導内容  | 指導形態                     | 時数   |
|-----|--------------------------------------|---|--------------------------|------|
| 十月  | 8. 産業の発展と社会の変化<br>(2) 産業の発展と日常生活への影響 | ● 産業の発展と日常生活の変化について学習する<br>・ワークシート「産業の発展と日常生活の変化」を作成し、産業の発展が私たちの家庭生活、食生活、衣生活、余暇、労働時間などにどのような変化をもたらしているかを理解する  | 講義<br>作業<br>(家庭科より資料の提供) | 3    |
|     |                                      | ○ 産業の発展と資源・環境問題について学習する<br>・資料「産業の発展と資源・環境問題」と自分で収集した資料により、産業の発展や消費生活の変化が、資源・環境にどのような問題をもたらしたかを調べる<br>・「地球の環境を守るために私に出来ること」をまとめることで、資源・環境問題について解決策、改善策について考える | 講義<br>作業                 | 4    |
|     |                                      | ● 大衆社会と豊かさについて考える<br>・「高齢社会と社会福祉」の現状を知り、真の豊かさについて考える  | 講義<br>(家庭科単独授業)          | 1    |
| 十一月 | 9. 進路と自己実現                           | ● 消費者保護について学習する<br>・資料「自立する消費者」により、消費生活と消費者としての自覚及び消費者の権利と義務を学ぶ   | 講義<br>(家庭科単独授業)          | 1    |
|     |                                      | ○ 企業の社会的責任について学習する<br>・資料「企業の責任」により、企業の責務について考える  | 講義                       | 1    |
|     |                                      |   |                          | (10) |
| 十一月 | 9. 進路と自己実現                           | ○ 進路と自己の適性について学習する<br>・労働省編一般職業適性検査の結果について説明する<br>・ワークシート「職業と適性を考える」に職業レディネステストの結果と一般職業適性検査の結果を記入し、自分の希望と適性を生かした進路について考える                                     | 講義<br>作業<br>討議           | 3    |
|     |                                      | ○ 自己の適性と進路について学習する<br>・討議資料「進路と自己の適性」を作成し、他人から見た自分の姿を含め自分の適性などについて班ごとに話し合い、まとめたものを代表が発表する   | 作業<br>討議                 | 2    |
|     |                                      | ○ 自分の進路設計をまとめる<br>・ワークシート「進路と自己実現」を作成し、将来の自分の進路について確認し、今後の自分の課題を考える<br>・自分の進路を実現させるための学習計画、資格取得、希望する職業について詳細などについて調べる   | 作業<br>調査                 | 2    |

| 月      | 項目                 | 指導内容  | 指導形態            | 時数            |
|--------|--------------------|---|-----------------|---------------|
| 一<br>月 | 10. 期待される社会人となるために | ○ 職業人の生きがいについて考える<br>・ワークシート「職業人と生きがい」を作成するために職業人がどのようなときに生きがいを感じるかについて調べ、職業と生きがいについて考える<br>・職業と生きがいについてまとめたものを各自が発表する  | 調査<br>スピーチ<br>/ | 3<br><br>(10) |
|        |                    | ○ 職業人としての心構えについて学習する<br>・資料「先賢の進んだ道」により、現実の姿や生き方を考える  | 講義<br>作業        | 2             |
| 二<br>月 | 11. 後期末のまとめ        | ○ 今まで学習してきた事項のまとめ<br>・既習事項についてまとめ、「産業社会と人間を学んで」の感想文を作成する  | 作業              | 2             |
|        |                    | ○ 後期末考査についての指導  | 講義              | 1             |
|        |                    | ○ 後期末考査<br>・(1)「自分の進路」について入学時と比べどのように変化したかを述べる<br>(2) ①「情報化」②「国際化」③「資源・環境問題」のうちから一題を選択し、自分の生活に関連させながらその事項について述べる<br>(3) 社会人講師による講演会を聞いての簡潔な感想と講演の内容を自分にどのように生かしていきたいかを述べる | 考査              | 1<br><br>(6)  |



【資料3】

「産業社会と人間」と「公民科」「保健体育科」「家庭科」の指導内容の重複項目

| 産業社会と人間                                    | 政治経済  | 現代社会  | 倫理                         | 保健  | 家庭一般   |
|--|---|---|----------------------------|---|--|
| 1 自己をみつめる<br>(1) 自分を知らう<br><br>(2) 青年期の生き方 |   | 現代社会の特質と青年期の課題<br>青年期を考える   | 青年期の課題と自己形成<br>現代社会と青年期の意義 | 自己実現<br>・自分らしさの発見<br>・自分らしさの発見と自己実現<br>・自己実現と精神の健康  | 家族と家庭<br>・私たちと家族・家庭<br>・家族・家庭の役割   |
| 2 進路について考える                                |   |   |                            |   | 私の人生<br>・どんな人生を送りたいか<br>・私たちとライフコース<br>・人生設計<br>・人生設計として生きる<br>・結婚と家庭<br>・母性の健康と父親の役割<br>生活設計<br>・生活設計の課題<br>・生活設計の考え方 |
| 5 職業生活への適応                                 |   |   |                            |   | 生活時間<br>・生活時間の使い方<br>労働<br>・職業労働   |
| 6 望ましい職業観、勤労観                              |   |   |                            |   | 労働<br>・職業労働  |
| 7 職業生活と法律                                  | 労働関係と労働市場<br>・労働基本権の確立<br>・労働組合法<br>・労働基準法<br>・労働関係調整法<br>社会保険と社会福祉<br>・我が国の社会保険制度の現状<br>・社会保険制度の課題<br>・高齢化社会への課題 | 経済の発展と国民生活の向上<br>・労働条件と労働者の権利保障<br>・社会保険と国民生活   |                            | 職場の健康問題<br>・現代の労働と健康問題<br>労働災害と職業病<br>労働災害とその防止<br>・労働災害の動向<br>・労働災害の防止<br>職業病とその予防<br>・職業病の動向<br>・職業病の予防<br>保険・医療の制度<br>・保険行政<br>・医療制度 | 労働<br>・職業労働<br>高齢化社会と課題<br>・高齢化社会と高齢者の生活<br>・社会保険・社会福祉の充実<br>・地域活動への参加   |
| 8 産業の発展と社会の変化<br>(1) 科学技術の発展に伴う産業の発展と社会の変化 | 大企業と中小企業<br>・大企業の活動<br>・中小企業の役割と役割<br>食料問題と農業水産業<br>・日本農業の現状と課題<br>・水産業の現状と課題                                     | 経済の発展と国民生活の向上<br>・産業構造の変化<br>現代の経済社会<br>・情報化の進展と経済社会<br>現代社会の特質と青年期の課題<br>・情報化社会と人間<br>農土と人間<br>・文化の交流と国際理解 | 世界の中の日本<br>・地球と人類社会        |   |  |

| 産業社会と人間                             | 政治経済  | 現代社会   | 倫理                  | 保健   | 家庭一般   |
|-------------------------------------|---|--|---------------------|--|--|
| 8 産業の発展と社会の変化<br>(2) 産業の発展と日常生活への影響 | 日本経済の成長と経済社会の変化<br>・戦後の復興<br>・高度経済成長と産業構造の変化<br>・内需主導型<br>日本経済の課題<br>資源・エネルギー問題<br>・資源・エネルギー問題<br>新エネルギーの課題<br>環境保全と公害防止<br>・公害問題<br>・公害防止と環境政策<br>・地球規模の環境問題<br>消費問題と消費者保護<br>・消費者問題と消費者運動<br>消費者の保護 | 経済の発展と国民生活の向上<br>・産業問題と食料問題<br>・消費者問題と消費者保護<br>・真の豊かさ求めて<br>経済の動向と国際協力<br>経済格差の解消<br>環境と生活<br>資源・エネルギー問題<br>環境保全と倫理<br>・公害の恐ろしさ<br>・地球規模環境問題<br>・生活の考え方<br>・自然と人間生活の調和を求めて | 世界の中の日本<br>・地球と人類社会 | 大気汚染と健康被害<br>・大気汚染とその原因<br>・大気汚染による健康被害<br>水質汚染と健康被害<br>・水質汚染とその原因<br>・水質汚染による健康被害<br>土壌汚染と健康被害<br>・土壌汚染とその原因<br>・土壌汚染による健康被害<br>健康被害の防止<br>・公害防止対策の考え方<br>・公害による健康被害の補償<br>自然環境の調和と保全<br>・生存と健康をささえる自然環境<br>・自然環境の破壊とその影響<br>自然環境の保全<br>・自然環境の保全とその意味<br>・地球規模保全の諸活動<br>私たちがすべきこと<br>産業廃棄物とその処理<br>・処理の現状と問題点<br>・処理をめぐる課題<br>食品衛生活動<br>・食品をめぐる問題<br>・食品の安全対策 | 消費生活と消費者<br>・私たちの暮らしと消費<br>・購入のあり方<br>・消費者問題と消費者の権利<br>・生活情報の活用<br>食料と人間<br>・人間と食料のかかわり<br>・現代の食生活<br>食品の特質と食生活<br>食品の衛生と安全<br>家庭と家族<br>・要する家族・家庭<br>衣服と人間<br>・現代の衣生活<br>生活時間<br>・生活時間の使い方<br>家庭の経済<br>・私たちの暮らしと経済活動<br>住生活と社会<br>・住生活の現状<br>・住宅政策<br>・生活環境の改善 |
| 10 期待される社会人となるために                   |   |  |                     |  | 私たちの人生<br>・どんな人生を送りたいか<br>・私たちとライフコース<br>・人生設計<br>・人生設計として生きる<br>・結婚と家庭<br>・母性の健康と父親の役割<br>生活設計<br>・生活設計の課題<br>・生活設計の考え方   |

## V 英会話学習の創造に向けた研究開発

### 1 はじめに

新学習指導要領によれば、小学校における外国語は次のとおり取り扱われる。

「国際理解に関する学習の一環としての外国語会話等を行うときは、学校の実態等に応じ、児童が外国語に触れたり、外国語の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習が行われるようにすること」（第1章：総則 第3 総合的な学習の時間の取り扱い 5-(3)）

本研究は、上記の総則を踏まえ移行期開始年度の平成12年度より実施可能な「国際理解に関する学習の一環としての外国語会話等」の進め方を支援するために行った。具体的には、「小学校における英語学習に関する研究開発」という創造的教育課程の研究に取り組んだ文部省研究開発学校（資料-2）の研究成果の分析を試みた。開発学校の研究成果から得られる知見には、今後、各学校において外国語（英語）会話等を導入した国際理解に関する教育課程全体を編成する上で貴重な示唆が含まれているからである。分析を行った項目は、指定校における「研究開発のねらい」「研究開発の実施内容」「研究の成果」そして「課題」である。ただ、実際に英会話の具体的な学習内容と指導方法等を考慮した教育課程を編成するには、英会話の指導に関するシラバス（指導項目の選定とその配列）、教材作成や指導方法のあり方等についても論ずる必要がある。しかし、それは、本研究全体のねらいが将来における教科等の構成の在り方に関わる教育課程研究にあるので本稿では扱わないこととする。

なお、分析対象校の選定については平成4年度から11年度まで取り組んだ研究開発学校（計62校）のうち、平成8年度までの研究開発学校に焦点を絞った。その理由は、全ての学校の研究成果に目を通したが、平成9年度以降の研究開発学校（47校）のほとんどが平成8年度までの指定校の研究成果を参考に研究を開始しており、平成8年度までの研究成果の中にそのエッセンスがあると判断したからである。詳細は、資料-1の要約に示すとおりである。

### 2 研究開発のねらい（詳細は資料-1を参照）

（1）開発の種類：次の3種類に分類できる。

- ① 教科（英語科）活動として取り組んだ研究校：B, D, E, F, I
- ② クラブ活動の中で取り組んだ研究校：G, K
- ③ 教科・特別活動（国際科／国際文化科／国際体験科／英語体験科／英語活動／体験総合活動）などを組み合わせて取り組んだ研究校：A, C, H, J, L

研究開発学校では、主に教科研究として行われたが、新学習指導要領では外国語は教科という取り扱いではなく導入される。

## (2) 開発のねらい

### ① 教科（英語科）活動として取り組んだ研究校のねらい

- イ 音声（主として聞くこと・話すこと）を中心とする基礎的な英語の運用能力を身につけるとともに、進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。
- ロ 外国の文化に親しみ、それらと積極的に触れ合おうとする態度を育成する。
- ハ 上記イ、ロの教育の推進は、結果として国際理解の基礎を培うものである。

### ② クラブ活動の中で取り組んだ研究校のねらい

- イ 外国の人々と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。
- ロ 英語を聞き、話すことに対する興味・関心を育成する。
- ハ 外国への興味・関心を広げると共に、主体的・積極的な生活態度などの豊かな国際感覚を培う。

### ③ 教科・特別活動などを組み合わせて取り組んだ研究校のねらい

- イ 世界の人々と交わる活動を通して、相手の考えや立場を理解・尊重し、国際社会をたくましく生きることができる基礎的な資質や能力を育成する。
- ロ そのためには、国際理解の視点から教科等の枠を越えた国際理解に関する共通の教育内容を創り出す。
- ハ 英語のための英語学習ではない。積極的にコミュニケーションを図る過程で英語が位置づけられる。したがって、体験を通して英語に触れることが大切である。
- ニ 子ども自らがさまざまな状況や場面の中で英語に親しみ、楽しさや喜びを味わいながら進んで相手を理解し、自分を表現しようとするにより、自分への自信を深める子どもを育む（自己確立）。

上記の内容をまとめると次のとおりである。

- a 自国文化と異文化の理解・尊重（国際化時代を生きる資質の育成：認知的・情意的側面）
- b 国際的諸問題への関心・態度（国際化時代を生きる資質の育成：認知的・情意的側面）
- c 英語でコミュニケーションを図る態度（a・bを支える資質等の育成：技能的側面）
- d 個の確立・個性尊重（国際化時代を生きる資質・能力の基盤づくり）

「小学校における英語学習に関する研究開発」に取り組んでいながら、技能としての英語の習得だけを目標に研究開発を行った学校は見当たらない。この点が、中・高等学校における外国語教育、また巷の英語塾や外国語専門学校等における教育のねらいとの大きな違いであろう。

## 3 研究開発の実施内容（詳細は資料－1を参照）

- ① 研究開発の対象学年：すべての学校が1学年から6学年までを対象としているわけではない。

イ 1～6学年を対象とした研究校：A, B, C, F, H, I, J, L

ロ 4～6学年を対象とした研究校：D, G, K

ハ 5 & 6学年を対象とした研究校：E

新学習指導要領によれば、外国語の学習は「総合的な学習の時間」の中で取り扱われるので第3学年以上の学年において行われる。

- ② 時間の確保：ある学校では標準時数に新教科の国際科や英語科等の時数を加えている。また、ある学校では全ての教科から1～5%の範囲内で研究開発科の授業時数を確保している。さらには、ある学校では国語、算数、理科、社会、道徳等から確保している。その場合、国際理解と関連する学習内容等を考慮している。

新学習指導要領に示されている「総合的な学習の時間」は、第3～4学年が105時間、第5～6学年が110時間配当されている。外国語の学習時間数については、各学校の教育課程の内容によって異なるであろう。

- ③ 時間配当：学年によって多少の異なりはあるが、月1～2時間から週1～2時間を配当している。

新学習指導要領によれば、弾力的な時間割編成が可能である。モジュールタイムを活用した活動案を考えるのも一案である。

- ④ 指導体制：主としてチーム・ティーチング（TT）によって行われている。

具体的には、次のとおりの組み合わせが考えられる（ALT：Assistant Language Teachers外国語指導助手／JTE：Japanese Teachers of English日本人英語教師／HT：Homeroom Teachers 学級担任）

○タイプA：ALT+JTE+HT（研究校：A, C, E, H, J, L）

○タイプB：ALT+JTE（研究校：D, H）

○タイプC：ALT+HT（研究校：A, D, F, C, G, H, I）

○タイプD：JTE+HT（研究校：A, C, D）

○タイプE：JTE（研究校：H, K）

○タイプF：HT（研究校：A, D, F）

○その他：ボランティアの外国人（研究校：K）

指導体制については、TTまたは学級担任のみによる指導が考えられる。ALTの常駐という可能性は薄いので、今後はボランティアによる外国人指導者あるいは海外生活体験のある日本人等の協力が必要となろう。

- ⑤ 学習内容：英語科として研究開発に取り組んだ学校では、どちらかといえば基礎的な英語の運用能力を身につけ、英語によるコミュニケーションを通して運用能力を身につけるための意欲を育成しようとしている（研究校：D, E, F, G）。一方、国際理解に重点をおいて英語学習の研究開発に取り組んだ学校では、国際感覚を身につけた心や姿勢の育成に重点をおいており、英語はコミュニケーションの手段として取り扱われている（研究校：A, B, C、一\*B校は英語科であるが学習内容は国際科の内容に近い）。さらには、H, I, J, K, Lの研究校のように、国際理解学習と英語学習の比重をほぼ同等において学習内容を設定している学校もある。その内容については、(2) 開発のねらいの③（イ、ロ、ハ、ニ）で示したとおりである。

新学習指導要領では外国語は教科ではない。したがって、中・高等学校における学習で求められているような実践的コミュニケーション能力を身につけるためのことばの仕組み（文法）等の習得がねらいではないはずである。「総合的な学習の時間」を利用して実施される小学校の英会話等の学習では、どちらかといえば積極的にコミュニケーションを図る過程で英語が位置づけられるという程度の考え方が望ましいのではなかろうか。そのことは、新教科として取り組んだ多くの研究開発学校の研究成果からも明らかにされた。

#### 4 研究の成果（詳細は資料－1を参照）

主として次のような研究成果が見られた。

〔国際理解学習に関する成果〕

- 国際文化への児童の興味・関心の高さと意欲的な取り組みが見られた。
- 日本文化への興味・関心の高揚も見られた。
- 外国と日本の文化の違いに気づくようになった。

〔英語学習に関する成果〕

- 外国人とのコミュニケーションを重ねるたびに、子どもたちは人とコミュニケーションを図ることの楽しさと必要性を強く感じるようになった。その結果、コミュニケーションに対する積極性も培われた：外国人と接することへの抵抗感の低下と、コミュニケーションの基盤となる心情や態度の向上が見られた。
- 自己表現が苦手だった児童の表現力に向上が見られた。
- 低学年ほどものおじせず、生き生きと英語を話す様子が見られた。反対に、学年が進むにつれて消極的な態度が見られた。
- 日々の英語指導の実践から、教師の意識が「聞く」「話す」の表現活動へと移行するようになった。
- 英語学習を通して日本語を見直す視点が培われた。

#### 5 課題と考察

最後に、今後も研究を積み重ね開発しなければならない課題について述べるとともにまとめとしての考察を行う。

小学校に英語学習を導入することにより、子どもたちはALT等とのコミュニケーション活動を通してコミュニケーションの楽しさを知りようになり、コミュニケーションの大切さと必要性を学んだ。また、ALTとの触れ合いを通して異文化レベルの目覚めも体験した。さらには、教師の意識も「聞く」「話す」の表現活動へと移行するようになった。このように、英語学習の導入は子どもたちや教師を大なり小なり変容させる結果となった。

しかし、いくつかの開発すべき課題も残した。その課題とは次のとおりである。

- 理論的に裏付けされた国際科や英語科等の目標設定とその学習内容において他教科

等との関連性を明確にする必要がある。また、目標の達成度をはかる評価の基準や方法についても検討する必要がある。

- その学習内容の学年間の関連性・系統性について明確にする必要がある。
- そのためには、基礎学力としてのコミュニケーション能力の発達段階に応じた内容についても明確にする必要がある。
- 国際理解と英語学習とのバランスや有効な実施学年について検討する必要がある。  
(低学年での調べ学習や異文化理解に限界が見られる)
- 英語学習の導入による児童の学習負担において他教科等との関わりについて明確にする必要がある。

研究開発に携わったほとんどの学校は、国際科や英語科等の目標設定とその学習内容において他教科等との関連性を明確にする必要性の難問に悩まされたようである。これは、将来における教科等の構成の在り方に関わる大きな問題である。したがって、この問題を解決するには今後も教育現場における理論的・実際的研究を積み重ねる必要がある。その意味では、教科ではない形での導入ではあるが「国際理解に関する学習の一環としての外国語（英語）会話等」を進める際には、上述の難問を解決するくらいの意識を持って取り組む必要があろう。

(渡 邊 寛 治)

研究校 A

1. 国際理解教育について

国際性（国際感覚、国際礼儀、異文化理解、人権尊重の態度、外国人とのコミュニケーション手段等の総合的な資質、能力）を育てることをねらいとし、理屈よりも人間相互の「感情理解」を重要視したものである。髪の色や目の色、肌の色の違いにかかわらず、幸せを求め、平和を願う、同じ願いを持った人間同士であることの意義を持たせるための「心」と「姿勢」づくりの国際理解教育。

「豊かな国際生を培いしかも、21世紀に対応して今日の地球規模の課題にたいする基礎的、基本的資質・能力を磨くにふさわしい体験単元を学ばせる体験総合活動に当てる。宇宙問題、環境問題、病気の問題、食糧の問題、人権や戦争の問題、福祉問題などについて体験を通して学ばせ、幅広い国際性を身に付けさせようとしている」

2. 英語（言語）教育について

「英語のための英語教育ではない。間違いを恐れずに、積極的に覚えたいいくつかの英語を使って話し掛けたり、聞き取れるようになればそれだけで十分である。それよりもなによりも外国人を笑顔で迎え、外国人とあたたかく交わり接する態度を重要視する。この「心」と「姿勢」づくりが大切で、その過程で必要に迫られてコミュニケーション手段として英語が位置付けられる。だから、生活英語、体験英語である」

・聞く・話すことを中心に英語に慣れ、親しみ、コミュニケーションを図ろうとする態度を養う

3. 実施内容

a) 名称…国際体験科（「英語活動」・「体験総合活動」）

「国際体験科」とは・・・「現状では各教科・道徳・特別活動のなかで国際理解教育に関わる内容を取り出して指導するという段階にとどまっているが、国際理解の視点から教科等の内容を見直せば、教科等の枠を越えた共通の内容が抽出できるのではないかと考えたのである。

そこで、全教育活動で行われる国際理解教育を構造化・焦点化したり、核になったりするものを教科「国際体験科」として仕立ててあげて、日課表に位置付け、指導するという明確な方法を取ることにしたのである。

この「国際体験科」は、英語教育と体験を主体にした地球や文化を学ぶ総合的な学習を重視した教科である」

b) 対象学年…1～6年

c) 時間配当…1～2年 週1時間  
3～6年 週2時間

d) 時間の確保…1～2年 総授業時数に付加（土曜日に実施）  
3～6年 社会科及び理科を週各1時間削減し、国際体験科（英語活動・体験総合活動）に当てる。（年間70時間）

e) 指導体制…3年生以上にはALTを月に一回程度配置し、学級担任とALT、学級担任とJETによるチームティーチングで行った。低学年では学級担任のみの指導。

f) 学習内容と方法

英語活動はコミュニケーション手段をねらいとするので聞く・話すが主体の生活英語、体験英語。口と耳だけではなく、体験活動の中で必要に迫られて使えるようにするという考え方から、手振り、身振り、動作等の総合的な身体的表現手段で対応する学習方法を取る。劇あり、ゲームあり、遊びありの活動主体の学習。さらに外国人と多く接する機会を使って、本物の英語体験をさせ、耳になれ、自然に口からでる英会話を体ごとマスターさせる。

「『楽しく学習できる』ということに主眼をおいている」

（全体目標）

「聞く・話すことを中心に、英語に慣れ、親しみ、コミュニケーションを図ろうとする態度を養う」  
「地球規模の課題に対する基礎的・基本的な資質・能力を育成し、幅広い国際性を身につける」

〈学年目標〉

1年…「英語のリズム・抑揚・調子に慣れる」

2年…「英語のリズム・抑揚・調子に慣れる」

3年…「英語の基本的な単語や簡単な会話を正しく発音できる」  
「地球、環境、食料の学習を通して、身近な自然から、地球や自然環境について調べようとする態度を育てる」

4年…「英語の基本的な単語や簡単な会話を使って話すことができる」  
「環境、森林、宇宙の学習を通して、広い視野を育てるとともに地域や身の回りから行動しようとする態度を育てる」

5年…「初歩的な英語の質問を聞いて、意味を理解して答えることができる」  
「福祉、人間、環境問題の学習を通して、生命の神秘性や人間の素晴らしさ、人の生き方を学び、広くやさしい心を育てる」

6年…「初歩的な英語の質問を聞いて、答えたり、簡単な事柄を話すことができる」  
「環境、国際の学習を通して、地球レベルの考え方を身につけ、国際人としてたくましく生きようとする態度を育てる」

g) 評価法…特に記載なし。(自己評価カードはあるが児童の評価に関連しているかどうかは分からない)

4. 成果

- 「こどものニーズにあった言語材料が選定できるようになった」
- 「体験総合活動の教材内容の領域を異文化理解、国際交流、国際親善に絞ったため、教材開発がし易くなった」
- 「A・L・Tの事前打ち合わせの時間の確保ができたため、役割分担も明確になり授業の充実が図れた。また、言語材料選定についてのアドバイスや簡単な表現方法について指導して貰えたことが内容にも大きな影響を及ぼした。とくに外国の行事、生活習慣等を授業の中で話して貰えたことは、英語への興味・関心・意欲を増すこととなった」
- 「学習内容に応じた学習形態をとることができるようになった」
- 「英語学習を導入したことによるプラス面での変容が子どもに表れつつある。日常の生活に繋がってきている」
- 「体験総合活動で外国人と接する場面の設定を重ねるたびに、子どもたちはコミュニケーション能力の必要性を強く感じるようになってきた」

5. 課題

- ・「低学年の授業時間の弾力的運用が集中力と学習内容から必要となってきた」
- ・「指導内容との関わりでA・L・T・J・T・Eの配当学年や指導体制の再考をしなければならない」
- ・「他教科と国際体験科とのかわりについて明確にする必要がある」
- ・「評価項目と評価方法について明確にし、子どもの変容をとらえていかなければならない」
- ・「国際体験科の学年間の系統性をどうとらえ、それを学習内容にどう反映させていくか、明確にしなければならない」



1. 国際理解教育について  
(全教育課程における目標)

国際人にふさわしい日本人としての資質・能力の基礎を育成する  
◎人権尊重の精神に基づき、豊かな心の育成  
◎進んで国際社会に参加し、信頼と尊敬の得られる日本人の育成

(全教育課程における視点)

- ①自国文化と異文化の理解・尊重  
〔国際化時代を生きる資質（認知的・情意的側面）〕
- ②国際的諸問題への関心・態度  
〔国際化時代を生きる資質認知的・情意的側面〕
- ③コミュニケーション能力・態度（表現力）  
〔①、②の資質を支える能力（技能的側面）〕
- ④個の確立、個性尊重  
〔国際化時代を生きる能力・資質の基盤〕

(国際理解教育の目指す子供の姿)

\*「世界の中の日本人」…「人権尊重の精神を基調として日本の歴史、風俗・習慣、伝統、文化等の理解を基盤に、世界の国々の異なる生活・文化等との違いを理解し分かりあえ・・・、自己をいろいろな方法で表現できる国際人」

2. 英語（言語）教育について  
(英語科の位置付け)

- ・「英語科は各教科で行われる国際理解教育の要としての役割を担う」
- ・Aの視点③にあげたように、「コミュニケーション能力を重視し、国際的に通用するコミュニケーション能力の基礎の育成を主要な目標とする」  
ここでいうコミュニケーション能力とは、「人と人のかかわりあいのなかで、自分の考えや意見をしっかり持ち、筋道を立てて積極的に表現できること。さらに、自分の考えや意見を人に伝えたり、相手の考えや意見を聞いたりして、コミュニケーションを円滑に発展させられること。」と定義されている。（かならずしも「外国語」でコミュニケーションを図ろうとしなくてもよいと考えている）

(英語科の目標)

「身近で初歩的な英語に親しみ、言語や文化・生活への関心を持ち、進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。」

3. 実施内容

- a) 名称…英語科
- b) 対象学年…1～6年
- c) 時間配当…1～3年 月1時間  
4年 月2時間  
5～6年 週1時間
- d) 時間の確保…標準時数に英語科の時数を加える
- e) 指導体制…担任、ALT、JETの三者でチーム・ティーチングを行っている。
- f) 学習内容と方法  
・音声言語による指導の重視（聞くこと話すこと）

- ・「英語を習得するためだけの英語ではなく、国際理解に向けての英語学習」

(学年目標)

- ・低学年…「遊びを通して、英語に親しむ」
  - ・中学年…「英語を楽しく学習しながら、自分から進んでかかかっていこうという気持ちを育てる」
  - ・高学年…「英語を通して、外国の文化や人々の生活に関心を持ち、自分から進んでかかかっていこうという気持ちを育てる」
- g) 評価法…主に授業中の観察と、ポストアンケートにより行われている。「英語の学習活動を通して見たとき、子ども一人ひとりにはどんな長所や良さ、特性などが発見できるか」という目を教師が持ち、子どもを見るのが大切」
- ・観察は授業中に担任が行い、子どもの反応を事実として記録した。一時間中に全員についてはとても無理なので、気付いた点をメモしておくようにした。また、VTRの記録を基することもある。
  - ・ポストアンケートは、子どもが自己評価した結果から、その子の意欲や関心が、どこにあったのかを探る一つの方法で、担任が必要と感じたときに、適宜行った。
- (\*通信簿などとの関連は特に記載なし)

#### 4. 成果

- 「日常生活の中で外国人と話してみたい、また実際に話したという児童が、学習後は約10%増加している」
- 「外国の人に知らない言葉で話しかけられたら、日本語であるいは外国語で答えると回答している児童が10~20%増加している」
- 「開始前は英語の勉強がたのしみと答えた児童が91%だった。実施後は、英語が楽しいと答えた児童は97%になっている」
- A L T (ネイティブ・スピーカー)の有効性と子供の耳のよさを確認

#### 5. 課題

- ・英語科導入による児童の学習負担、他教科等の指導の工夫、授業時数等の適切な設定についての検討。
- ・基礎学力としてのコミュニケーション能力の発達段階に応じた内容の明確化
- ・母語によるコミュニケーション能力育成の重視
- ・指導計画の見直しと多様化
  - (示唆) 留学生会館、国際ボランティア団体など、地域の実態に根差した多様な国際理解の活動の導入
  - 1~4年までは、月1時間の授業増加
- ・指導形態の工夫(チームティーチングの多様化)
- ・教材開発(自作教材)
- ・国際理解教育の4視点に基づく評価の明確化
- ・国際理解教育、及びコミュニケーション能力にかかわる研修の充実

### 1. 国際理解教育について

#### 〈異文化理解交流の目標〉

「世界の人々と交わる活動を通して、相手の考えや立場を理解・尊重し、国際社会を豊にたくましく生きることができる基礎的な資質や能力を育てる」

#### 〈領域のねらい〉

・「異文化理解交流では、進展する国際化の中で、日本の伝統文化を十分理解し、尊重するとともに、世界の国のそれぞれの歴史や風俗、異なった価値意識や行動様式を認識、理解、教授するグローバルな考え方を培い、国際社会を生きる主体性と柔軟性の基礎的な資質や能力を育てて生きたい。そのためには、世界の人々との交流を通して、相手の立場を理解、尊重しようとする心や態度が大切になってくる。

そこで、日常生活や学習の中から素材を取り上げて教材化し、身近な事象や問題を世界と結び付け、児童の心の中に世界を広げてやるのが大切であると考えた」

- ・国際的な新しい知識や課題を自らとらえ、自分の問題として解決していく能力の基礎を培う。
- ・異文化の理解と尊重、多様な見方、考え方を共有・共生する人間尊重の精神的基盤を培う。
- ・「心の国際化」

### 2. 英語（言語）教育について

#### 〈英語学習の目標〉

・「A L T や J E T あるいは英語教材によるネイティブな英語を聞く・話す活動を通して、英語に慣れ親しみ、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」

#### 〈領域のねらい〉

・「高学年は、低学年の異文化理解交流で国際理解教育の基礎となる『心の国際化』を図った上で、世界の公用語である英語に慣れ親しみ、主体的にコミュニケーションを図ろうとする表現力やディスカッション・ディベート等自己開示能力を育成し、国際社会で自己の思いを積極的に発揮する実践力・行動力を養っていききたい。そのために、英語を学習する活動を通して、体全体で表現でき自分の思いを十分に伝えることができるようにすることが大切であると考えた」

・自分の考えを相手に伝達することのできるコミュニケーションの能力の基礎を育む。

### 3. 実施内容

a) 名称…国際文化科

b) 対象学年…1～6年

c) 時間配当…1～3年 週1時間（年間35時間）「異文化理解交流」  
4～6年 週2時間（年間70時間）「異文化理解交流」  
& 「英語を中心とした外国語学習」

d) 時間の確保…1～3年 国語科配当時間より1時間を削減して充当  
4～6年 国語より1時間、理科・社会より0.5時間ずつ削減して充当

e) 指導体制…ほとんどはA L T ・ J T L ・ H R T か、J T L ・ H R T によるT ・ T

#### f) 学習内容と方法

##### 〈異文化理解交流〉

- ・「外国の文化・伝統に親しめる単元や地域の生活に密着した体験学習を中心とした単元を計画し、活動の中での自分のよさに気付き、友達の良さや思いを認める思いやりの心の育成指導を図る」
- ・「A L T、地域の外国人、海外生活体験者などを積極的に活用し、異文化に触れ合う活動を通して、自分と異なるものを認め、個性的なものを尊重し、相手の立場を理解し互いに思いやり、共に生きようとする心の国際化を図る。そのために意図的、計画的な体験を積み上げ、積極的にコミュニケーションしようとする意欲を高める」

#### 〈英語学習〉

- ・「英語の歌遊びやゲーム・劇等、英語に親しめる単元や生活に密着したスキット学習を中心とした単元を計画し、活動の中での英語力・コミュニケーション能力の育成・指導を図る」
- ・「A L T、J T Eを積極的に活用し、常に自然な英語を聞いたり、発音したりする音声言語による指導（オーラルメソッドスキット）と自然に英語にふれる環境を作り体全体を使って思いを表現させる指導に努め臆することなく積極的にコミュニケーションしようとする意欲を高める」

#### g) 評価法

〈異文化理解交流〉…児童一人ひとりの願いや思いを大切し、自ら持ち味や良さを十分発揮して、学び取っていくことができるように自己評価カードを活用した。授業後、関心、意欲、態度、の表れを把握して、個に応じた支援のあり方を工夫した。

〈英語学習〉…子供が自ら振り返り、自らの学習意欲の表れとなる自己評価カードを活用し次時への学習の参考として取り組んだ。しかし、量的なものをどのくらい覚えたかを評価するのではなく、あくまでも子供一人ひとりの内面や実態をつかむための資料として活用した。

（\*通信簿などとの関連については特に記載なし）

### 4. 成果

#### 〈異文化理解交流〉

- 「国際文化科の学習への児童の興味・関心の高さと意欲的な取組み」
- 「祭りや地域にある伝統的な習慣など日本文化への興味・関心の高揚」

#### 〈英語学習〉

- 「外国人と接することへの抵抗感の低下と、コミュニケーション能力やその基盤となる心情や態度の向上」
- 「自分の思いをなんとかして伝えようとする意欲や伝えるための表現力の向上」
- 「自己表現が苦手だった児童の表現力の向上」

#### 〈研究全般〉

- 「本校児童の言動に見られる豊かな完成の涵養・表出」
- 「周囲の環境や社会に関する視野の広がり実践意欲の高揚」
- 「国際文化科の教科としての成立」

#### 〈職員への効果〉

- 「職員の教育観・指導観の変容」
- 「外国人と接することへの抵抗感の低下と、コミュニケーション能力やその基盤となる心情や態度向上」
- 「新教科に対する理解と指導方法等の改善」
- 「教師の教育実践及び研究・研修活動への意欲と主体的な取組み」

### 5. 課題

#### 〈異文化理解交流〉

- ・「児童の発達段階にあった教材の内容・指導法の研究」
- ・「異文化理解交流と英語学習とのバランスや有効な実施学年についての検討」（低学年での調べ学習や異文化理解に限界）
- ・「学習内容の学年間の関連・系統」

#### 〈英語学習〉

- ・「英語材料の増加による個人差の発生とその対応、個に応じた指導のあり方についての研究」
- ・「チームティーチングでの指導における相互のコミュニケーションの図り方とチームティーチングの在り方について具体的に相談・検討する時間の確保」
- ・「A L T・J L T・H R Tの授業における役割の確立（チームティーチングの在り方）」
- ・「英単語・文法の習得や会話能力の量的な習得をねらいとしない、本校独自の英語学習における表現力や外国人とのコミュニケーション能力の評価・評定の在り方について」

#### 〈その他〉

- ・「削減教科の選定についての検証と削減部分の実証的な検証」
- ・「西小の目指す国際理解教育についての理論的な検討と共通理解」
- ・「3年間の指定が終了した後の研究の継続方法」
- ・「教育行政や近隣の教育期間との連携」

## 研究校 D

1. 国際理解教育について
2. 英語（言語）教育について

「本校では、国際理解教育の構成要素として、①人間尊重 ②コミュニケーション能力の育成 ③自国・他国文化理解 ④実践する態度の4点を考えた。この4つの構成要素を研究の視点ととらえ、全教育活動のなかで、国際理解教育に取り組んできた。特に、各教科のなかで、この4つの視点から、各単元や題材を見直して、カリキュラムを作成した。また、地域よさや特性を生かした地域教材の開発等も実践してきた。

英語教育は、上記の4つの視点の中の他国文化理解とコミュニケーション能力の育成との関連が極めて深い。しかし、英語教育が国際理解教育の手段に役立つことは確かであるが、英語教育だけで国際理解教育の目標が到達できるとは思えない。国際理解教育の構成要素を考えたとき、特定の教科や領域だけで達成できるとは考えにくいからである。

そこで、本校では、本年度も全教育活動を通じて上記の4つの視点から国際理解教育を実践していくことにした。英語教育はこの全教育活動の中の一つのことであり、英語教育イコール国際理解教育ではないと考える。

したがって、本校の英語教育では、コミュニケーション能力の育成を重点とした目標を設定した。」

### 〈英語科の目標〉

- 「外国の言語や文化に直接ふれさせることによって、外国語・外国文化に親しみ、それらと積極的に触れ合おうとする態度を養う」
- 「基礎的な外国語の運用能力を身につけ、将来さらに外国語によるコミュニケーションを可能にする外国語運用能力を身につけるための意欲を育てる」
- 「進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」

### 3. 実施内容

a) 名称…英語科

b) 対象学年…4～6年

c) 時間配当…週1時間（年間35時間）

d) 時間の確保

「英語科の時数は、各教科から5%程度時数を削減してこれに充てる。ただし、国語科、算数科は学力の基礎・基本を培う重要教科と考え、削減を行わない」

e) 指導体制…学級担任と外国人教師とのTTを1時限、担任、または日本人教師とのTTを1時限（クラスごとに体制は固定されており、ALTが入らないクラス、日本人教師が入らないクラスなどがある）

f) 学習内容と方法

「本校の英語教育に対する目標及び内容を次のように設定した。指導内容としては、音声言語を中心に指導する。文字言語については原則として指導しない。したがって「聞く」「話す」の2領域にしばって目標を立て、内容を検討した。」

### （各学年の目標）

#### 第4学年

##### 1. 目標

- 「外国の言葉や外国の文化に進んで関わろうとする態度を育てる」
- 「外国語の歌や外国語を使ったゲームやリズム遊びなど、全身を使った活動を通じて、主として音声としての外国語にふれさせる」
- 「進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」

##### 2. 内容（到達目標）

###### （1）聞くこと

- 「英語にはリズム、イントネーション、ストレスがあることに気付く」
- 「基本的な音の聞き分けができる」

- 「基本的な単語を聞きとり、その意味が分かる」
- (2) 話すこと
  - 「英語のリズム、イントネーション、ストレスに慣れる」
  - 「アルファベットを正しく発音できる」
  - 「基本的な単語をはっきり発音できる」

#### 第5学年

##### 1. 目標

- 「外国の言葉や外国の文化にふれ、自国の文化との違いを知る」
- 「外国語の歌や外国語を使ったゲームやリズム遊びなど、全身を使った活動を通じて、主として音声としての外国語に慣れ親しませる」
- 「進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」

##### 2. 内容（到達目標）

- (1) 聞くこと
  - 「英語にはリズム、イントネーション、ストレスに慣れる」
  - 「簡単な文を聞き取り、その意味が分かる」
  - 「簡単な日常の会話の大体聞き取ることができる」
- (2) 話すこと
  - 「英語のリズム、イントネーション、ストレスに慣れる」
  - 「簡単な文をはっきり発音して言える」
  - 「基本的な単語や簡単な文を正しく発音して言える」
  - 「身近な物事や絵などを見て、基本的な単語や簡単な文で言い表すことができる」
  - 「初歩的な英語の質問を聞いて、答えることができる」

#### 第6学年

##### 1. 目標

- 「外国の言葉や外国の文化を理解し、それを尊重しようとする態度を育てる」
- 「外国語の歌や外国語を使ったゲームやリズム遊びなど、全身を使った活動を通じて、主として音声としての外国語に慣れ親しませる」
- 「進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」

##### 2. 内容（到達目標）

- (1) 聞くこと
  - 「簡単な日常の会話を聞き取ることができる」
  - 「いくつかの文からなる簡単な物語の大意聞き取ることができる」
- (2) 話すこと
  - 「単語や文を正しく発音して言える」
  - 「物事や絵などを見て、単語や文で言い表すことができる」
  - 「身近なことや、自分の思っていることを伝えることができる」
  - 「簡単な日常の会話ができる」

g) 評価方法…特に記載なし。

##### 4. 成果

- 「小学校における英語教育の在り方について一応の方向性が定まった」
- 「月ごとに基本文型を設定したおかげで、授業の組み立てがしやすくなった。教材研究についても的を絞ってきたし、教材の開発もできた。また、児童の実態調査をみると、8割以上の児童が習った語彙や構文を覚えている」
- 「児童の実態調査をしてみると、指導者の英語免許の有無に関わらず、子供たちはほぼ同じような成果をあげている。意識調査についても差はみられない。英語免許の有無というよりも教師の資質、学級経営、指導力が最も重要な要素である」
- 「外国人講師が参加する授業を定期的にもできればさらに効果があがるであろう」

##### 5. 課題

- ・理論的に裏付けされた英語科の目標を設定する必要がある。また各学年の系統を考えた学年の目標についても見直しが必要
- ・「学習した内容を忘れてしまうことはあまり気にせず、数多く英語表現を耳にならしていったほうがいいのではなか」という指摘もあり、基本文型を含めた題材の検討は次年度の課題である」
- ・（1か月間一つの題材を扱っているので）月の第3時と第4時が同じような内容になりがちである
- ・「言語活動としての1時間は長すぎるのではないか。音声言語のみの指導であるので、短い時間で

も十分ではないか。特にコミュニケーション能力に育成に重点を置くならば、短い時間に集中して実施した方が効果があがるのではないか。ただし、国際理解教育の要素（異文化理解などの活動）をかなり入れて授業を組み立てる場合は45分間のほうがよいかもしれない」

- ・「45分の授業で児童の集中力を持続させるためには、上記の指導過程にしたがって、いろいろな準備や教材、教具が必要である。事前の準備ができていないと、45分をもてあましきみになる可能性が高い」
- ・「指導時間については、現在の週1時間では、効果があがるか疑問である。言語活動であるから繰り返し、数多く重視したほうがよいと思われる」

## 1. 国際理解教育について

〈国際理解教育とは〉

「国際理解教育とは、人間同士が国境・民族を越えてお互いに分かり合っていくことである。人間同士がお互いに分かり合う、そのためには、偏見や差別意識をもって見てはならない。世界の各国の国民・民族そして個人でさえ、考え方や生き方に違いがある。そうした違いをむしろ前提として認め、尊重し、理解していくことが国際理解の基本である。

国際理解の大切な要素に文化理解がある。世界の民族は、多様な文化を持っている。各々の文化は、その地域の自然や歴史的条件によって培われたものであり、それらの文化に違いはあっても優劣はない。自分の国の文化のみを唯一の基準にして、他の文化をみてはならないのである。それぞれの文化の優れた点を認め、共通性を見いだしていくことが、国際理解には重要である。二つめには、世界の現実の理解も重要な要素である。世界には急速に人的、物的交流が増加し、各国間の相互依存性が拡大している。そうした膨脹状況から、さまざまな地球規模の問題が発生している。人口・食料・環境破壊等の問題である。また、国と国との対立による戦争、人と人との思想・価値観の違いによる誤解・軋轢もある。そうした現実の世界を理解していくことが大切である。三つめには、人間同士がお互いに理解しあうためには、コミュニケーション力が大切である。外国語の習得だけでなく、表情や態度・物腰から相手の考えや態度を読みとり、また、伝える能力、説得力ある語り口などを身につけることが国際理解の推進には重要である。

つまり、国際理解とは、人間尊重、文化理解、世界の現実を基本的構成要素に、コミュニケーション力を含む概念である。したがって、国際理解教育とは、国際理解のための基本的資質を培っていくための教育である。」

「本校では、国際化にふさわしい人間育成のための基礎的資質づくりとして、国際理解教育を捕らえている。すなわち、国際感覚・国際礼儀・異文化理解・国際強調・外国人との交信など総合的な資質や能力の涵養である。

未来の社会を担う国際人としての児童が、教師の計画したルールに乗り教師の指示を待っているといった自主性の欠如・意欲の減退、自分さえよければ他人はどうでもよいといった思いやりの心の乏しさなどいくつかの問題となるべき点を放棄したままでよいはずがない。自らが創造的に考え、自主的に意欲的に実践し、しかも相手の立場を認めて思いやり、強調する気持ちを持つことが必要だと考える。

つまり、世界の人々と互いの立場を理解し、尊重しあうことのできるグローバルな視野と思いやりの心、そして、情報化の進む社会のなかで正しく判断し、新しいものを創造するちからの養成、さらには国際社会の中で国際間の理解を深めるための意志の伝達能力の向上を図ること、これらは、国際化社会に対応した人間教育の根幹をなすものと考えられる。

将来の国際社会にふさわしい、国際的視野に立ち、正しく判断し、臆せずに表示し行動できる国際人の育成を図ることは避けて通れない教育課題であり、本校のねらうべき主題である。」

## 2. 英語（言語）教育について

「英語を理解し、英語で表現する基礎的な能力を養い、英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに、言語や文化に対する関心を高め、国際理解の基礎を養う。」

「国際理解というコミュニケーションとは、単なる外国語の習得をいうのではない」

「外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養い、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てることは、言語や文化に対する関心を深め、結果として、国際理解の基礎を培うことになると考えるものである。」

## 3. 実施内容

a) 名称…英語科

c) 時間配当…週1時間

d) 時間の確保

国語の標準時数、週6時間を週5時間とし、「英語科」に充てる

e) 指導体制…英語専科教員、ALT、学級担任の三者によるティーム・ティーチング



#### （）学習内容と方法

「『話すこと』『聞くこと』の活動（オーラル・コミュニケーション）を中心に、英語になれ親しみ、コミュニケーションを図ろうとする態度の育成をめざすとともに、楽しく英語にふれ、英語のリズム感と発音の基礎を身につけることを目指す。そのため、児童の日常会話、興味関心、話題を中心とした教材を開発する。」

#### [5 学年英語学習目標]

- ア. 「身近で簡単なことについて話される初歩的な英語を聞いて、理解できるようにするとともに、英語を聞くことに親しみ、英語を聞いて理解することに対する興味を育てる。」
- イ. 「初歩的な英語を用いて、身近で簡単なことについてはなすようにするとともに、英語で話すことに親しみ、英語で話すことに対する興味を育てる。」

#### [学習内容]

- ア. 聞くこと
  - ・「語句や文の意味を正しく聞き取ること」
  - ・「質問、指示、依頼、提案などを聞いて適切に応ずること」
  - ・「数個の文の内容を聞き取ること」
- イ. 話すこと
  - ・「語句や文をはっきり正しく言うこと」
  - ・「あいさつ、質問、指示、依頼など適切に応答すること」
  - ・伝えようとすることを簡単な文で話すこと

#### [6 学年英語学習目標]

- ア. 「初歩的な英語の文や文章を聞いて、話し手の意向などを理解できるようにするとともに、英語を聞くことに慣れ、英語を聞いて理解しようとする意欲を育てる。」
- イ. 「初歩的な文や文章を用いて、自分の考えなどを話すことができるようにするとともに、英語で話すことに慣れ、英語で話そうとする意欲を育てる。」

#### [学習内容]

- ア. 聞くこと
  - ・「自然な口調で読まれたり話されたりする文や文章の内容を聞き取ること」
- イ. 話すこと
  - ・「相手の言うことを聞き取って、適切に質問したり応答したりすること」
  - ・「聞いたり読んだりしたことについて、問答すること」

#### g) 評価方法

- ・「学習効果を測定するため、『意欲』『態度』の高まりを質問紙調査法、チェックリスト観察法によって行う。」
- ・「自己評価カードにより関心、意欲、態度の変容を調査する」
- ・「知識、理解及び思考、技能面の測定を評定尺度によるチェックリストによって行う」

#### (評価にあたっての留意事項)

- ・1回の授業で5～6人を評価の対象として観察していく
- ・児童が言語活動しているときに、班ごとに観察し、個人評価表に観察結果を記入する。さりげなく行うようにする。
- ・学級担任が評価を行う
- ・生徒の学習意欲の向上につなげるように、随時、評価の結果を見ながら指導助言をしていく。

#### (その他の評価方法)

- ・作文

とあるが、通信簿の評定がこれとどう関わっているかは言及されていない。

#### 4. 成果

- 「興味・関心については、1時間の授業をととも楽しみにするようになった」
- 「ふれあいタイムの時間を楽しみにするようになり、教室内でゲームなどを通して学んだ英語を使っており、外国人や外国語に対する違和感や抵抗感はない」
- 「ふれあいタイムで、遊びやゲームを多く取り入れることで、英語に親しみ、英語の発音を自然に受け入れるようになった」
- 「子供は、年度当初に比べて英語を聞いても、臆せずに対応するようになった」

- 「毎週の英語の時間を楽しみにしている。特に活動を多く含んだ授業の場合は、生き生きと英語で表現できるようになった」
- 「ジャック・オー・ランタンやクリスマスカード、クッキーなどを作る作業を通して、体験的に英語を学んだことは、効果的だった」
- 「ハロウィン、クリスマスなどの単元のなかで、工作をしたり、クッキーを作ったり仮装したりして、自分たちの活動を通じて英語を表現し、楽しく参加できた」
- 「英語を聞くことに親しみ、英語を聞いて、理解しようとする意欲、英語を話すこと等については、児童は意欲的に取り組んでいる。英語の歌、ゲーム、外国の文化に対する興味が高い。とりわけ、英語の歌は、[10人のインディアン]など易しい英語の歌を『今月の歌』として位置付けて、全校で音楽集会の折に歌い、楽しみながら学んでいる」
- A・L・Tは、ネイティブな英語の発音に慣れたり、他国の文化や生活などを知る上で、効果的であった」
- 「1単位時間の学習過程を作成したことで、学習がスムーズに進められた」
- 「学級担任が英語の授業の中で、子供に直接関わることができるようになった」
- 「英語専科・担任・A・L・Tとの役割分担により3人で指導にあたるため、学級全体に目が行き届きやすくなった」
- 「オーラル（話すこと、聞くこと）を中心とした指導で、一斉指導や個別指導を適切に行い、発音場面を多く設定して、達成感や成就感を味わわせることができた」
- 「英語専科・A・L・T・担任の3人によるチーム・ティーチングは一人ひとりの子供を英語に慣れさせるために有効だった」
- 「子供を主人公とした体験的活動を教材として取り入れることにより、子供は意欲を持って活動した」
- 「英語専科教員やA・L・Tによる熱心な英語指導により、児童の英語への抵抗感が排除され、英語への関心も高まり、英語を身近に感じるようになり、自然に受け入れられるようになった」
- 「外国人であるA・L・Tが日本人に接するが如く、児童が他の外国人に対してごく自然な態度で接し、相手を受け入れる柔軟性が児童の心の中に育ちつつある」
- 児童は、英語に魅力を感じ始め、英語の授業では、生き生きと活動し、楽しみながら英語を学んでいる」
- 「高学年になると、周囲を意識して発話内容や発話自体に抵抗を示し始める児童がみられるようになるため、精神年齢にあった学習内容や発話したくなるようなゲーム、体験、競争を取り入れることにより、自発的な発話を促すことができた」
- 「先生が英語で話す内容のおおよその見当がつく児童が増えて、英語のインプット量が確実に蓄積されている」
- 「英語を勉強することで、人と会話をしてコミュニケーションすることに興味を持つようになった児童が増えてきており、コミュニケーションに対する積極性も育ってきている」

## 5. 課題

- ・「児童の生活により密着した月別の単元構成は、どのような内容が適切か、さらに考えていく」
- ・「自信がないと英語を使ってコミュニケーションしようとする意欲は高まってこないという高学年特有の意識を改革していく」
- ・「評価先でありきにならぬよう、関心・意欲などの具体的な評価について更に考え、検討していく」
- ・児童の意識調査によると、平成6年5月のときより、平成7年2月時のほうが英語に対する好意、関心、態度の面でよい結果が出ている。

研究校 F

1. 国際理解教育について
2. 英語（言語）教育について

「早期英語教育の必要性は、模倣能力が高い小学校低学年からの学習が適していると考えられているからである。また、英語学習と同じように異文化に対する柔軟性が失われていない早期に異文化・異民族に触れさせる機会を与えることは、国際理解に不可欠であると考えられる。このことから、英語学習は英語によるコミュニケーション能力を育てる上から、国際理解の上からも大変重要な学習である。

ただし、本校での研究開発は『英語学習』であると捉え、英語学習を展開していくなかで、当然の結果として国際理解についても付随してくるものであると考えられる。したがって、国際理解については全く触れない、取り上げないというのではなく、英語学習を展開していく過程で自然と触れさせていくこととし、研究開発の趣旨もそこにあると捉えた。即ち、『英語学習』とは、英語の学習活動を通して、英語を学びながら、一緒に付随して国際理解を図っていくものとする。

3. 実施内容

a) 名称…英語科

b) 対象学年…1～6年

|          |    | (英語) |    | (英) |    | (英) |    | (英) |        |
|----------|----|------|----|-----|----|-----|----|-----|--------|
|          |    | (英)  |    | (英) |    | (英) |    | (英) |        |
| c) 時間配当… | 1年 | 年間   | 24 | +   | 10 | =   | 34 | 時間  | (週1時間) |
|          | 2年 | 年間   | 25 | +   | 10 | =   | 35 | 時間  | ( " )  |
|          | 3年 | 年間   | 25 | +   | 10 | =   | 35 | 時間  | ( " )  |
|          | 4年 | 年間   | 60 | +   | 10 | =   | 70 | 時間  | (週2時間) |
|          | 5年 | 年間   | 60 | +   | 10 | =   | 70 | 時間  | ( " )  |
|          | 6年 | 年間   | 60 | +   | 10 | =   | 70 | 時間  | ( " )  |

d) 時間の確保（教科ごとの削減数）

|    | 国語 | 社会 | 算数 | 理科 | 生活 | 音楽 | 図工 | 家庭 | 体育 | 合計 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 1年 | -  | -  | -  | -  | -  | -  | -  | -  | -  | -  |
| 2年 | 4  | -  | 2  | -  | 1  | 1  | 1  | -  | 1  | 10 |
| 3年 | 4  | 1  | 3  | 1  | -  | 1  | 1  | -  | 1  | 9  |
| 4年 | 3  | 2  | 2  | 2  | -  | 1  | 1  | -  | 2  | 13 |
| 5年 | 5  | 3  | 4  | 3  | -  | 2  | 2  | 2  | 3  | 24 |
| 6年 | 8  | 4  | 6  | 4  | -  | 2  | 2  | 2  | 3  | 29 |

e) 指導体制…1～3学年-H TとA L TとのT T方式  
 4～6学年-H TとA L TとのT T方式およびH Tによる指導

f) 学習内容と方法

「小学校における『英語学習』では、日本語にない音声に慣れさせることが大切であると考えられる。したがって、本校では、『文字』より『音声』を重視し、『書く』『読む』活動を特に取り上げず、『聞く』『話す』中心の学習活動を展開することにより、コミュニケーションを図ろうとする態度を育成することをねらっている。」

(指導目標)

下学年…「聞くことを中心とした、日常生活の中のごく身近なことやあいさつの言い方、英語の歌や英語を取り入れた簡単なゲームを通じて、英語に慣れ親しませ、英語を話そうとする態度を育てる」

上学年…「聞く・話すを中心とした、日常生活の場面や状況に応じた英語に慣れさせ、簡単な会話を実践しようとする態度を育てる」

(各学年の目標)

- 1 学年…「簡単な日常のあいさつを中心とした会話や身近なものの名前を聞いたり、まねて話したりする活動になれ親しませる」
- 2 学年…「簡単な日常のあいさつを中心とした会話や身近なものの名前を聞いたり、まねて話したりする活動になれ親しませる」
- 3 学年…「英語のリズムや発音に慣れ、身近なものについて英語で話したり、簡単な会話をする楽しさを味わわせる」
- 4 学年…「身近な事柄や日常の簡単な動作などを進んで話す活動を通して、英語を聞いたり話したりする楽しさを味わわせる」
- 5 学年…「英語を学ぶことに関心を持ち、場面や状況に応じて英語による簡単な会話をしようとする態度を育てる」
- 6 学年…「英語を学ぶことに関心を持ち、場面や状況に応じて英語による簡単な会話を進んでしようとする態度を育てる」

g) 評価法…児童の興味・関心の高まりを観察したり、児童の学習の振り返りと次時への意欲付けを図るための自己評価カード、児童の学習の取組みを評価するためのチェックリスト等による評価

(通信票への対応) …「英語学習に対する『評定』のための評価は行わないこととしているが、通信票に下記のような文章記述で児童の学習の様子を記述し、家庭に連絡している」

・5年生の評価から

(上位群の例) 「英語の学習に自信を持ち、積極的に会話しようという意欲的な活動をしていました」

(下位群の例) 「あいさつや曜日の言い方を頑張りました。英語のゲームを楽しんでいました」

#### 4. 成果

- 「A L Tの参加により、A L Tの発音を熱心に聞く児童が増えてきている。」
- 「児童グループ学習などで、児童同士の会話練習を入れたことで、他の児童の発言も聞こうとする態度が見られてきている。」
- 「英語による指示や英語で問いかけることを繰り返すことにより、「よく聞こう」という態度やジェスチャーや声の調子、顔の表情から判断しながら「分ろう」という態度が育っている。」
- 「あいさつや、身近な物や身近な内容について、自分から英語で話そうとする様子が見られてきた」
- 「一人ではまだまだ声が小さいものの徐々に「話す」ことに慣れてきている。」
- 「低学年はどのおじせず、生き生きと英語を話している。」
- 「A L Tにジェスチャーなどを取り入れ、積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童が増えてきている。」
- 「英語学習に歌やゲームを取り入れたことは、児童に楽しく英語学習に取り組ませることに大変効果的であった。」
- 「英語学習の実践により、他国の文化や地図、国旗などに目を向け、国際的視野を広げようとしている態度が見られるようになってきた。」
- 「A L Tの英語学習への参加により、児童はネイティブな発音になれ音声重視の指導に大変効果的であった。」
- 「業前活動(イングリッシュタイム)での市販のビデオ視聴やA L Tの参加による自作ビデオは効果的であった。児童はたいへん興味を持って視聴していた。」
- 「日々の英語指導の実践から、教師の意識が「聞く」「話す」の表現活動へと移行し研究の深まりが見られるようになってきている」
- 「職員の英語力向上のための研修会(ワンポイント英会話)を行った結果、職員室等での英語の使用が増え研修の効果が十分に表れてきた」
- 「研究組織が確立し、校長を中心に全職員が一丸となった研究開発が実践された」

#### 5. 課題

- ・英語指導の中に教科、道徳、特別活動との関連をどれだけもたせられるか
- ・A L Tとの話し合いの時間を確保すること
- ・「A L TとのT T方式による指導と学級担任のみの指導とでは、児童の学習への取組みや興味・関心に違いが見られた。小学校段階では英語指導も学級担任が行うことが妥当であると考え、学級担任による指導を取り入れているが、英語免許を有する教師と持たない教師の指導力の違いが問題点としてあげられる。
- ・教材テープや自作ビデオ等の工夫・開発が急がれるが、それらの作成には限界があり、多くの時間

と労力を必要とすることが考えられる。

- ・歌やゲームを用いることは有効であったが、マンネリ化傾向も見られたので、今後独自のゲームの開発や教材・教具の工夫・開発を図る努力が必要。
- ・「英語によるコミュニケーションだけに重点を置かず、日本語で自分の考えを表現できる力や友達の話聞いて理解しようとする態度を育てていく必要がある。国語科との関連において「聞く」「話す」領域での指導が今後の課題として考えられる。」
- ・聴取力に差がみられ個に応じた指導の手立てや個への配慮に関する研究
- ・高学年ほど一人で話すことに消極的な児童が多いという実態がある。
- ・「自己評価等の試みはなされているが、それを事後の指導にどう生かすかについては今後の大きな課題である。」
- ・「自己評価カードやチェックリストによる観察法、抽出生徒による追跡調査や指導効果等、児童の学習意欲を高める評価や指導効果を判断するための評価に関して研究を深めることができなかった。今後の大きな課題として残された。」
- ・「今年度の6年生児童が中学校でどのように英語学習に取り組む、小学校での英語学習が中学校でどのように影響するのかを調査・検討する必要がある。そのためにも、面瀬中学校との連携を深めていかななくてはならない。」
- ・教室や廊下の環境構成だけでは限界があり、今年度購入した視聴覚機器を活用する工夫が急がれる。
- ・英語学習テープやビデオ等の保管・管理・日常的な活用に関する問題
- ・英語クラブと研究開発とが効果的に機能していない。

## 研究概観 G

1. 国際理解教育について
2. 英語（言語）教育について

「英語を母国語とする外国人講師（AET）を招き、英語という言語や身体的な動きによって自分の意志を伝えたり、相手の意志を理解したりできることに気付かせ、外国人と積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度と能力を養いたい」

### 3. 実施内容

- a) 名称…英会話クラブ
- b) 対象学年…4～6年
- c) 時間配当…週1時間
- d) 時間の確保…クラブ活動として
- e) 指導体制…ほとんどはAETとクラブ担当の教師で行われている
- f) 学習内容と方法  
「英会話クラブを設置し、クラブ活動の特質をふまえ、年間の活動計画は児童の希望をもとに、担当教師が立案する。その内容は、音声言語を重点にし、児童が親しめる日常会話を中心としたものにする。」
- g) 評価法…特に記載なし。

### 4. 成果

- 創作・造形的活動を取り入れた活動ではAETと一緒に作ることで必要感をもってコミュニケーションを取ることができた
- 「4、5、6年生の活動状況を見ると、4年生の児童が最もAETとの関わりが積極的で、学年が上に進むと消極的になる傾向にある」ことがわかった。年間活動として（月1回）の英語教室でも同様の傾向がみられる
- その他

### 5. 課題

- ・活動内容や時間の制約などのためAETや担当教師からの指示が多くなることもあり、受け身的な学習に陥る
- ・発表会へ向けての活動では、比較のおとなしい児童が多い場合、練習を強要してしまうと活動の意欲を高める点で逆効果となる
- ・その他

1. 国際理解教育について
2. 英語（言語）教育について

〔国際科の目標とする子供像〕

「英語や表情、身振りや手振り等を使いながら英語に親しむ喜びや楽しさを深める活動を通して、英語や外国人、外国の文化に対して正しく理解すると共に、お互いのよりよい人間関係づくりに、主体的に関わろうとする子供」

〔国際科の目標とする授業像〕

「子ども自ら、活動の中から学びたい英語を生み出し、状況や場面の中で英語に親しむ喜びや楽しさを十分に味わいながら、進んで相手を理解し自分を表現しようとすると共に、自分への自信を深め、言葉や人、文化への関心を高めることのできる授業」

〔国際科の目標〕

「外国人や外国の文化等に親しむ活動のなかで、英語を聞いたり話したりして、英語に対する興味・関心を高め、進んでコミュニケーションを図ろうとする子どもを育てると共に、言葉や文化に対する関心を高め、国際理解の基礎を培う」

3. 実施内容

a) 名称…国際科

b) 対象学年…1～6年

c) 時間配当…1年 年間28時間  
2年 年間29時間  
3年 年間29時間  
4年 年間43時間  
5年 年間43時間  
6年 年間43時間

〔参考〕国際理解教育に関する授業（H6. 6～H7. 3）

|    |          |                  |
|----|----------|------------------|
| 1年 | 年間64.5時間 | (=40分×62+20分×5)  |
| 2年 | 年間63.5時間 | (=40分×61+20分×5)  |
| 3年 | 年間66.5時間 | (=40分×65+20分×3)  |
| 4年 | 年間69.5時間 | (=40分×65+20分×9)  |
| 5年 | 年間71.5時間 | (=40分×65+20分×13) |
| 6年 | 年間77.5時間 | (=40分×71+20分×13) |
| 複式 | 年間39.0時間 | (=40分×39+20分×6)  |

d) 時間の確保… 国語を年間10～16時間、数学を7～11時間、他の教科を3～5時間程度削減した時間の大部分を国際科に当てている（一部は情報科に）

e) 指導体制…学級担任、学級担任とALT・JTEによるチーム・ティーチング

f) 学習内容と方法

- ・授業作りの視点…「1)COMMUNICATION 2)CULTURE 3)CONTEXT 4)CONFIDENCE」
- ・聞く話す为中心
- ・遊ぶ、歌う、ゲームをする、つくる、調べる、見る、聞く、知る、話す、読む、書く、握手する、比べる、探す、演じる、真似る、指示する、味わう、扮する等。
- ・70%を英語で進める（目標）

(各学年の目標)

- 1年…「歌う、踊る、遊ぶ、ふれる等の活動を通して、英語を聞きながら話しの概要をとらえると共に、具体的な名詞に興味を持つことができる」
- 2年…「歌う、踊る、遊ぶ、ふれる等の活動を通して、多くの英語を聞きながら話しの概要をとらえると共に、具体的な名詞や一まとまりの決まり文句の表現に慣れることができる」
- 3年…「歌う、遊ぶ、話す、ゲームをする等の活動を通して、簡単な会話の表現に慣れると共に、身振りや表情にも興味を持ち楽しく使うことができる」
- 4年…「歌う、遊ぶ、話す、ゲームをする等の活動を通して、簡単な会話の表現や身振り・表情などを伴った表現に慣れると共に、外国の生活習慣や行事、文化に興味を持つことができる」
- 5年…「歌う、調べる、話す、演じる等の活動を通して、いろいろな会話の表現にふれると共に、外国の生活習慣や行事、文化のよさに気付き、進んで理解することができる」
- 6年…「歌う、調べる、話す、演じる等の活動を通して、いろいろな会話の表現に慣れると共に、それぞれの国の生活習慣や行事、文化のよさに気付き、尊重することができる」

g) 評価法…特に記載なし。

#### 4. 成果

- 国際科の研究の方法や研究内容、「英語に親しむ喜びや楽しさ」を基にした国際科授業の基本的な考え方などを明らかにすることができた。
- 各学年の発達に応じた活動や学習内容が少しずつ明らかにされた。低学年はゲーム活動やA L T との遊び、中学年はゲーム活動、高学年は会話や劇。
- 英語だけの音声と映像を基にして楽しく(アニメの)視聴できることがわかった。
- ゲームに親しむ間に自然に英語を覚えていることに喜びを感じた子もいた。
- 低学年では英語の歌や聞き取り、物の名前等を言えるようになったこと、中学年では会話ができ、物の名前等を言えるようになったこと、高学年は会話や物の名前の外、外国人への親近感や自分への自信を得られたことを自分の変容として感じている(＊アンケート結果からは読み取れないので疑問)
- A L T とのT・Tの授業や教官の英語研修、多様な指導形態(担任、担任とA L T, A L Tのみ等)柔軟な授業時数の運用による効果的な指導のあり方等について研修を深めることができた。

#### 5. 課題

- ・国際科の目標の達成度をはかる評価の基準や方法について今後検討を深めていく必要がある
- ・全学年の活動や学習内容の系統性が不確定。聞く・話すのバランスや言語の習得過程、子どもたちの発達特性などもあわせてよく吟味される必要がある。
- 活動や学習内容については、本年度の試行授業を通して、英語の親しむことがないがしろになり、活動性にやや偏った授業が多く見られた点が課題である。子供の活動を重視する余り、英語での表現に必要感や興味・関心が向かなかったことをふまえ、授業のなかで英語へのかかわりのもたせ方を検討する必要がある。
- ・英語で進める授業に抵抗感を示す子どももいてどのように英語に関心を持たせるか手立てを十分検討する必要がある。
- ・T・Tの授業の進め方の場合、打ち合わせの時間がほとんど取れなかったのが実際問題として大きい。
- ・英語研修が定期的に行われていく必要がある。
- ・手づくり教材をつくる時間をどこでどのように確保するか。



1. 国際理解教育について
2. 英語（言語）教育について

（前年に同じ）

〔国際科の目標〕

- 「英語に対する興味・関心を高めること」
- 「進んでコミュニケーションを図る態度や心情を育てること」
- 「言葉や文化に対する関心を高めること」

3. 実施内容

a) 名称…国際科

b) 対象学年…1～6年

c) 時間配当…週1時間（年間35、1年生は34時間）

※ただし、1単位授業を40分とする。さらに、週の月曜日から金曜日の午前中に20分枠の時間（アルファの時間）を設定し、各教科の指導内容に応じて弾力的な運用ができるようにしている。

d) 時間の確保…国際科、情報科のための時間を合わせて各教科の標準授業数をそれぞれ5%削減

e) 指導体制…学級担任+ALT（40分、20分の週2回）/学級担任+ALT+専科/専科+ALT/専科のみ

f) 学習内容と方法

研究テーマ：「英語への親しみを深める子供の育成—英語への楽しみを深める学習内容の精選・構造化—」

「英語への親しみを深める」とは・・・

「英語に親しむ喜びや楽しさを十分に味わう過程及びその結果において、英語を学ぶことや学んだ英語そのものを、工夫、努力、連帯感、友情、恩恵感、可能性の自覚等の価値意識と関連させて意味や価値があるかどうかということを行い、「英語が楽しく学習できたのは友達やALTの先生のおかげだ」「英語は大切な」「英語を学習してよかったな」と思えるようになること」

〔学習内容の要件〕

- ①子供の生活経験に密着し、身近に感じることができるもの
- ②子供の発達特性や興味・関心に応じることができるもの
- ③子供に共通に身につけさせたいものと個人差に応じて身につけさせたいものに応じることができるもの
- ④他の生活や子供の生活に生かすことができるもの
- ⑤言葉や言葉の背景に生活習慣や物の考え方等を内包することができるもの

g) 評価法…特に記載なし。

4. 成果

- （学習内容の要件（p.16））はおおよそ国際科の学習内容の要件として妥当であることを確認した。
- 低学年では、基本的な英語表現や語彙が内容を少しずつ変えながら反復されていくような発展を持たせることが大切とわかった
- 高学年では、活動のために必要な基本となる英会話を持ち出し、活動の中で効果的に再構成されていくという学習内容の構造化の見通しができて来た。
- ALTとの接し方が自然な姿となり、あいさつや会話を見ていて違和感なく接している姿が見られる。
- 英語学習の中で外国のことについて調べようとする意欲や英語を将来の生活に役立てたいとする

## 研究校

1. 国際理解教育について
2. 英語（言語）教育について

- ア. 「音声（主として聞くこと・話すこと）を中心とする外国語（英語）学習を進めることにより、英語に親しみをもち、楽しく学ぼうとする意欲や積極的にコミュニケーションを図っていかうとする態度を養う」
- イ. 「自分たちとは異なる言語や文化に触れることを通して、国際理解の基礎を培う」

- 「自国語の他に意志を伝える手段が存在し、それにより同じ考えが表現できるということを知る」
- 「他国の言語や文化や習慣などの多様性を知る」
- 「外国語を通して言語に対する興味や関心を持つ」
- 「国際的な交流に対する興味、関心、意欲を持つ」

「親しみ」の具体

- ①英語という言葉に親しむ
- ②英語を話す人に親しむ
- ③英語を話す人の背景にある文化に親しむ

### 3. 実施内容

a) 名称…英語科

b) 対象学年…1～6年

c) 時間配当…1～6年 週1時間

d) 時間の確保…国語科から35時間削減

e) 指導体制…学級担任とALTとのチーム・ティーチング

f) 学習内容と方法

学習内容：

ア. 教材

- ・児童にとって身近なもの
- ・楽しく英語に親しめる活動が組めるもの
- ・文化の違いに気付く要素のあるもの

イ. 言語材料をもとに内容を配列するのではなく、題材に関連した簡単な語彙や表現を扱うようにする

方法：直接体験を重視した英語学習

(各学年の目標)

- ・障害児…「英語に親しむ」
    - 低学年 「身近な言葉に興味・関心を持ち、言葉に親しむ」
    - 「外国の人に親しみを持って接する」
  - ・中学年…「英語に慣れる」
    - 「日常の簡単な英語に親しみ、英語を聞くことに慣れる」
    - 「自国と他国の言葉の違いに気付く」
  - ・高学年…「英語を進んで使う」
    - 「日常の簡単な英語を進んで聞いたり話したりする」
    - 「自国や他国の良さを認め、広く世界に目を向けようとする」
- g) 評価法…「毎時間学習の終わりに、態度面と知識技能面において簡単に自己評価するようにした。教師側も指導にいかすものとして、観察や記録また簡単な聞き取りテスト等を通して評価してきた。（しかし、基本的に次の授業に生かすための評価ということを前提にしている。）」

#### 4. 成果

- 「自然な英語を聞くことにより、英語を聞く力がついてきた」
- 「体を通して英語表現を理解しようとしている」
- 「A・L・Tなど外国人に接する機会が多いため、外国人に対しても臆せずコミュニケーションする児童が増えている」

#### 5. 課題

- ・「・・・（研究校）指定終了後どのような形で研究の成果を実践していくかが課題である」
- ・本校の卒業生が、進学先の中学校においてどのように英語の学習に取り組むか、また、国際理解の立場からどのような伸長が見られるのか、その追跡調査をする必要はないか」
- ・「本質的に中学校での英語学習とは異なるが、その関連性を踏まえ本校の学習内容を検討する必要性はあるのか」

研究校

1. 国際理解教育について
2. 英語（言語）教育について

（研究のねらい）

- ・「多様な活動を通して英語になれ親しむと共に、みんなと手をつないで生きようとする子供を育てる」
  - －「身近な生活に関して英語で聞いたり話したりすることができる」
  - －「進んで人と交わり、心を開いて楽しく交流することができる」
  - －「国際的なもの事に関心を向け、進んで理解しようとする」
  - －「穏井沢の心（思いやり）を豊かにし、みんなと共に生きようとする」

（英語体験科の目標）

- ・「未知のものに興味を持ち進んで関わろうとする」
- ・「相手の意向を汲み取り、体全体を使って反応しようとする」
- ・「動作、身振り、表情、図、絵、数字、記号等具体的なものを使って自分の考えを表現できる」
- ・「既習の英語表現を積極的に使って自分の考えを表現しようとする」

3. 実施内容

a) 名称…英語体験科

b) 対象学年…1～6年

c) 時間配当…週一時間

d) 時間の確保…1～4学年は国語科の1時間を、5・6学年は学年裁量の時間を指導時間に当てる

e) 指導体制…H・T、JTE、ALTの3人で行う

f) 学習内容と方法

（学年目標）

- 低学年
- (1) 「ごく身近な英語にふれ、興味を持って楽しく学習することができる」
  - (2) 「外国人や外国のことに興味を持つ」
  - (3) 「誰とも仲良く遊んだり、活動したりすることができる」
- 中学年
- (1) 「身近な英語を喜んで聞き、自分でも話そうとする」
  - (2) 「外国の文化やできごとに関心を向け、進んで学習しようとする」
  - (3) 「外国人とも進んでコミュニケーションしようとする」
- 高学年
- (1) 「身近な英語を気軽に聞いたり話したりする」
  - (2) 「国際的なできごとや文化などに対する関心を高め、理解を深める」
  - (3) 「国際人を始め誰とも積極的に交流し、ともに生きようとする」

- ・「多様な活動」
- ・「身近な生活に関する英語」
- ・「英語を聞くこと・話すこと」
- ・「自国の文化と異文化の理解」
- ・「日本語を交えず、できるだけ多くの英語表現を使用した」
- ・「英語を使うことを強要せず、自然に発話できる状況をつくりだした」
- ・「全身を使って取組み、体感できる活動を取り入れた」
- ・「ペアやグループで取組み、英語が分かった喜びを一人ひとりが実感できるようにした」

g) 評価法…評価の観点は学年目標に対応して設けられているが（p.8）、具体的な評価法に関する記載はない。

#### 4. 成果

- 「低・中・高学年ごとに英語学習に対する児童の興味や活動に特徴があることが分かってきた」
- 「よく使う場があった英語表現は、よく身についたことから、多くの題材や日常的な場面で使える英語表現を中心に扱っていくことにした」
- 「ミーティングの様子にも学級担任の積極性が見られるようになった」
- 「1時間の流れがだいたい決まった」
- 「視聴覚教材に対する児童の関心の大きさとともに、コンピューターや視聴覚機器の活用可能な範囲が分かってきた」
- 英語学習を通して日本語を見直す視点となったものもあった。
- 「費やした時間や労力は大きかったが、多くの教師が外国の人や習慣に心が開かれ、英語教育への意欲を持った」
- ・「英語のリズムや言葉の言い回しが自然に身に付き、それを楽しんでいる」
- ・「コミュニケーションがうまくできることに楽しさを感じている」
- ・「日常生活の中でも英語を意識したり、使おうとするようになった」
- ・「習った英語で自然に挨拶する場面も見られ、外国人の人に対しての抵抗感が薄れた」
- ・「外国と日本の文化の違いに気付き、少しずつ国際理解が進んできたように思う」

#### 5. 課題

- ・学習内容や活動の系統性や他教科（主に国語、社会、生活科）との関連を探ること、「聞く」「話す」活動の工夫、評価、ティーム・ティーチングの在り方、教師の研修等。

研究校 K

1. 国際理解教育について

2. 英語（言語）教育について

- ・「英語になれ親しむ活動を広め、英語や外国人に対して、興味・関心をもたせ、相互に理解しようとする態度を身につけさせたい」
- ・「簡単な日常会話や歌、ゲーム、遊びを通して英語に親しみ、英語を聞き、話すことに対して興味、関心を育てる」
- ・「英語圏で生活している人々の考え方に触れることを通して、外国への興味・関心を広げると共に、主体的・積極的な生活態度などの豊かな国際感覚を培う」

3. 実施内容

a) 名称…英語クラブ

b) 対象学年…4～6年の希望者のみ（英語クラブとして）  
各学年5人ずつ、計15名

c) 時間配当…週1時間

d) 時間の確保…特別活動の時間（主にクラブ活動）

e) 指導体制…日本人教師と外国人指導助手や外国人ボランティアとのチーム・ティーチング（全部で4～5名）

f) 学習内容と方法

- ・ゲームや遊びをとおして、身近な単語を取り入れ、会話は日常的なものに限定し、外国の行事を取り入れた。また、ゲーム、歌、創作劇、野外活動などを積極的に用いた。

g) 評価法…特に記載はないが、「個人カルテ」が部員一人ひとりのために作られており、細かい観察が教師によって成されている。また児童のほうは自分の「英語クラブノート」にその日学んだこと、感想等を記録している

4. 成果

- 外国人にたいする緊張感が随分ほぐれた
- 挨拶を外国人インストラクターの目を見て堂々と言えるようになった
- 4年生のクラブ員が興味・関心が旺盛で、インストラクターや英語との関わり方においても積極的なことから学年が低いほど新しい言語を恐れなく受け入れるということが示唆される
- 耳からの英語習得は、個人差にもよるが、4年生のほうが吸収・理解が速いことが示唆された。高学年に連れて、いったん文字化（カタカナ）してから、記憶しようとする傾向が強くなっていった。
- 外国や日本の暮らし、習慣に重点を置いた活動が多かったために、国際理解が深くなり、外国や日本の暮らしぶりに興味・関心を示す児童が多くなった。

（その他の活動から）

- 進んで握手を求めたり、日本語を交えてしゃべりかけたりする姿が多くなった
- 低学年ほど耳からの英語になじみ、外国人にも溶け込み、楽しい活動が展開できた。

5. 課題

- ・一時限に与える言語材料の内容が多すぎたこともあり、児童の理解や定着をこえる嫌いがあった。
- ・児童への定着という観点から英語クラブの活動を見直す、定着のための試みはほとんどなかったと言っても過言ではない。次年度はこの点からの研究が大切であろう
- ・クラブ紹介やクラブ発表に追われて負担に感じたこともあった。
- ・指導員の受けてきた英語教育と小学校英語とのギャップがあった。指導員がまず *Aural English* の大切さを確認しなければならない
- ・日本人2名、外国人インストラクター2名をフルに生かせなかった。TTの在方や、日本人教師のみによる英語クラブの活動方法についても、今後研究を進めなければならないであろう。

## 研究校 L

1. 国際理解教育について
2. 英語（言語）教育について

「国際理解教育は、国際化に対応する教育という立場から、『国際理解に立った「ものの見方・考え方・感じ方の育成」「事象の認識の高揚」「体験の重視」が大切といわれている。そこで、本校では、具体的な資質として①人間尊重の精神 ②言語習得 ③積極的なコミュニケーション ④自国や他国の文化の理解と尊重 ⑤他国の人や文化に対する興味・関心と主体的な関わりといった能力や実践態度を育てることを大切にしている。特に英語教育はその中心であり、②・③・④を中心的なねらいとして、「外国の人や言語・その他の文化と直接に触れ合う」活動を重視して、「英語活動の時間」として位置づけ取り組んでいる。」

### 3. 実施内容

a) 名称…英語活動

b) 対象学年…1～6年

c) 時間配当…1・2年 月1～2時間程度 (年間14時間)  
3～6年 週1時間 (年間35時間)

d) 時間の確保

(1・2年) 国語・算数を除く総授業数(各教科、道徳、特別活動)を約2～5%程度削減し、英語活動の時間に充てた。

(3～6年) 国語・数学を除く総授業数(各教科、道徳、特別活動)を3・4学年では約3～6%程度、第5・6学年では約5～7%削減し、英語活動の時間に充てた。

e) 指導体制…ALTは毎回授業に参加している。JTEもいるが、具体的な体制については不明。

f) 学習内容と方法

「聞く・話すを中心とした英語の遊びやゲームを通して」

○全体目標

「英語になれ親しみ、英語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。外国の人と出会うことにより、自国文化・他国文化を理解する。」

○学年目標

低学年…「英語を聞いたり、英語を使ったゲームを楽しんだりする。ALTに自分のことを話したり、身近なことを聞いたりする。」

中学年…「英語の身近な単語や簡単な会話を聞いたり、話したりして英語に親しむ。外国の生活や言葉について興味・関心を持つ。」

高学年…「身近な事柄についての英語の質問を聞いて答えたり尋ねたりする。自国文化・他国文化について理解しようとする。」

g) 評価法…特に記載なし。

### 4. 成果

○「年度当初に作成した計画を児童の実態に合わせて学年により変更したので、無理がなかった」

○「ゲームは同じ内容で条件を変えて繰り返し行ったので、児童が意欲を失わずに反復する事ができた」

○「児童のアンケート、英語活動の感想などから題材を取り上げるようにしたことで、英語を身近に感じ挨拶など使うようになった」

○「指導題材は、具体的なものや時期を考慮して季節的なものを取り上げたので、児童の興味・関心が強かった」

- 「ALTがどの活動にも入り、ネイティブの英語に多く触れ、聞くことができたので、児童は恥ずかしがらずに外国の人に接するようになった」
- 「担任が児童と同じ学習者の立場で活動に参加したことが、児童の実態把握に役だった」
- 「複数の国のALTに会うことで、活動のなかで国際理解を深めることができた」

5. 課題

- ・「学年の発達段階を考慮し、児童の興味関心を重視した指導計画の見直し」
- ・「TTのあり方についての検討」
- ・「学年に応じた国際理解教育の指導内容の計画作成」
- ・「児童の自己評価、観察方法による評価についての研究」

(資料提供：渡辺一博氏)



国際理解・英語学習に関する研究と実践を先進的に行ってきた小学校を、文部省指定校・各都道府県教育委員会指定校を中心に紹介します。このほかにも、市町村教委の指定校、学校独自で研究を進められている学校など、実際にはもっと多くの小学校

で国際理解・英語学習に関する先駆的な実践が行われています。各学校間で実践経験や情報を交換しあうなど、本リストをご活用ください。

※学校名の●印は文部省指定の研究開発学校を、カッコ内の数字はその指定年度を表します。

| 学校名  | 住所   | 電話   |   |  |  |
|--|--|--|---|--|--|
| <b>■北海道</b><br>●旭川市立日童小学校(8~10)<br>浦川町立野深小学校<br>札幌市立真駒内緑小学校<br><br>札幌市立北栄小学校<br>鷹栖町立鷹栖中央小学校<br>標茶町立鉢栄小学校   | 旭川市六条通5<br>浦河郡浦河町野深1-1<br>札幌市南区真駒内幸町2-2-2<br>札幌市東区北12条6-5-8<br>上川郡鷹栖町17線12号<br>川上郡標茶町上多和原野50-6   | 0166-22-8301<br>01462-7-4061<br>011-582-2131<br><br>011-721-0377<br>0166-87-4573<br>01548-5-1281   | ●高山村立高山小学校(8~10)<br>昭和村立南小学校<br>東村立東小学校<br>板倉町立南小学校<br>妙義町立高田小学校  | 吾妻郡高山村大字中山2795<br>利根郡昭和村川額115<br>吾妻郡東村箱島1596-1<br>邑楽郡板倉町大高嶋1695<br>甘楽郡妙義町下高田1552   | 0279-63-2001<br><br>0278-24-6002<br>0279-59-3014<br>0276-82-1143<br>0274-73-2050   |
| <b>■青森県</b><br>むつ市立大湊小学校<br>●五戸町立五戸小学校(8~10)<br><br>青森市立千刈小学校  | むつ市桜木町19-1<br>三戸郡五戸町豊間内地蔵平1-276<br>青森市千刈1-10-20  | 0175-24-1810<br>0178-62-2228<br><br>0177-66-0946   | <b>■埼玉県</b><br>●越谷市立大沢小学校(6~8)<br>志木市立志木第四小学校<br>児玉町立共和小学校<br>●春日部市立柏壁小学校(9~11)<br>深谷市立桜ヶ丘小学校<br>川越市立川越西小学校<br>大宮市立大宮南小学校   | 越谷市大沢2-13-21<br>志木市館1-4-1<br>児玉郡児玉町蛭川895-1<br>春日部市柏壁東3-2-19<br><br>深谷市上野台508<br>川越市川鶴1-5<br>大宮市吉敷町3-84   | 0489-74-8522<br>048-474-7911<br>0495-72-1394<br>048-754-6321<br><br>0485-71-0967<br>0492-31-0181<br>048-641-0339   |
| <b>■岩手県</b><br>●岩手大学教育学部附属小学校(8~10)  | 岩手県盛岡市加賀野2-6-1   | 019-623-7275   | <b>■千葉県</b><br>松戸市立幸谷小学校<br>●成田市立成田小学校(8~10)<br>船橋市立夏見台小学校<br>船橋市立海神小学校<br>船橋市立海神南小学校<br>船橋市立葛飾小学校<br>船橋市立高郷小学校<br>船橋市立三山東小学校<br>大原町立東海小学校<br>●東金市立鶴嶺小学校(5~7)                                   | 松戸市幸谷212-2<br>成田市幸谷948-1<br>船橋市夏見台2-12-1<br>船橋市海神2-6-5<br>船橋市海神町南1-1510<br>船橋市印内1-2-1<br>船橋市西習志野1-47-1<br>船橋市三山6-32-1<br>夷隅郡大原町若山1042<br>東金市東岩崎24-1  | 047-344-6765<br>0476-22-1334<br>047-438-2000<br>047-731-2551<br>047-433-2177<br>047-431-2722<br>047-465-5252<br>047-478-5533<br>0470-62-0269<br>0475-52-3402                                 |
| <b>■宮城県</b><br>●塩竈市立第二小学校(9~11)<br>●気仙沼市立面瀬小学校(6~8)<br>山元町立山下小学校<br>仙台市立木町通小学校<br><br>涌谷町立涌谷第一小学校  | 塩竈市小松崎10-1<br>気仙沼市松崎下赤田58<br><br>亘理郡山元町山寺樋12<br>仙台市青葉区木町通1-7-36<br>遠田郡涌谷町立町15  | 022-362-2221<br>0226-22-7800<br><br>0223-37-0018<br>0222-223-3480<br>0229-42-3005  | <b>■東京都</b><br>葛飾区立柴又小学校<br>江東区立第三大島小学校<br>世田谷区立上北沢小学校<br>千代田区立富士見小学校<br>台東区立柳北小学校<br>品川区立宮前小学校<br>品川区立清水台小学校<br>●文京区立城之小学校(9~11)<br>●豊島区立池袋第一小学校<br>北区立赤羽台西小学校<br>●目黒区立駒場小学校(6~8)<br>目黒区立東山小学校 | 葛飾区柴又4-30-1<br>江東区大島7-38-6<br>世田谷区上北沢4-22-29<br>千代田区富士見1-10-3<br>台東区浅草橋5-1-35<br>品川区戸越4-5-10<br>品川区旗の台1-1-17<br>文京区西片2-14-6<br>豊島区上池袋4-28-1<br>北区赤羽台2-1-34<br>目黒区駒場3-11-13<br>目黒区東山2-24-25 | 03-3658-5167<br>03-3682-0023<br>03-3302-0485<br>03-3263-1006<br>03-3851-2552<br>03-3781-4386<br>03-3781-4541<br>03-3811-7171<br>03-3916-3435<br>03-3907-2475<br>03-3467-4461<br>03-3719-2694 |
| <b>■秋田県</b><br>井川町立井川小学校<br><br>横手市立栄小学校<br>●秋田市立旭北小学校(8~10)<br>秋田市立上北手小学校<br><br>大館市立有浦小学校<br>男鹿市立船川第一小学校<br>田代町立山瀬小学校<br><br>能代市立澤城第三小学校<br>雄和町立川添小学校<br><br>六郷町立六郷小学校 | 南秋田郡井川町坂本三嶽下170<br>横手市大屋寺内長谷下6-3<br>秋田市山王3-1-35<br>秋田市上北手猿田館ノ下38<br><br>大館市有浦4-6-55<br>男鹿市船川港船川漆畑35<br>北秋田郡田代町岩瀬上軽石野39-18<br>能代市若松町2-24<br>河辺郡雄和町榊川長者屋敷38-1<br>仙北郡六郷町六郷赤城1 | 0188-74-2772<br><br>0182-33-5210<br>018-823-8544<br>018-839-2150<br><br>0186-42-2833<br>0185-24-3231<br>0186-54-3036<br><br>0185-52-5329<br>0188-86-3333<br><br>0187-84-1009 | <b>■神奈川県</b><br>川崎市立桜本小学校<br>●相模原市立相模台小学校(8~10)<br>大和市立林間小学校  | 川崎市川崎区桜本1-9-15<br>相模原市南台6-5-1<br><br>大和市林間1-5-18   | 044-266-4601<br>042-744-1439<br><br>0462-74-3218   |
| <b>■山形県</b><br>●山形市立第十小学校(8~10)  | 山形市やよい2-6-1  | 023-643-4102   | <b>■新潟県</b><br>中条町立中条小学校<br><br>●長岡市立大島小学校(8~10)  | 北蒲原郡中条町大川町16-56<br>長岡市大島新町5-甲1000  | 0254-43-2042<br>0258-27-1477   |
| <b>■福島県</b><br>二本松市立二本松南小学校<br>●表郷村立表郷小学校(8~10)  | 二本松市亀谷2-123<br>西白河郡表郷村大字金山瀬戸原108   | 0243-23-0049<br>0248-32-2220   | <b>■富山県</b><br>高岡市立横田小学校<br>●氷見市立海峰小学校(8~10)  | 高岡市宮田町9-1<br>氷見市阿尾1015   | 0766-23-0774<br>0766-74-8430   |
| <b>■茨城県</b><br>つくば市立二の宮小学校<br>笠間市立南小学校<br>水海道市立水海道小学校<br>●水戸市立橋が丘小学校(8~10)   | つくば市二の宮4-11<br>笠間市南吉原1188<br>水海道市天満町2516-1<br>水戸市姫子1-827-2   | 0298-55-7746<br>0296-72-1383<br>0297-22-1155<br>029-253-0098   | <b>■石川県</b><br>●金沢市立南小立野小学校(8~10)   | 金沢市涌波2-5-1   | 076-261-9414   |
| <b>■栃木県</b><br>宇都宮市立豊郷中央小学校<br>宇都宮市立藻瀬小学校<br>●小山市立小山第二小学校(8~10)  | 宇都宮市間掘町337<br>宇都宮市南大通り2-6-6<br>小山市宮本町2-9-20  | 028-624-8202<br>028-633-0363<br>0285-22-0079   | <b>■福井県</b><br>●福井市湊小学校(8~10)   | 福井市学園1-4-8   | 0776-22-8805   |
| <b>■群馬県</b><br>伊香保町立伊香保小学校   | 北群馬郡伊香保322-1   | 0279-72-2032   | <b>■山梨県</b><br>●玉穂町立三村小学校(6~8)<br>勝沼町立祝小学校  | 中巨摩郡玉穂町成島2140<br>東山梨郡勝沼町下岩崎960   | 055-273-8711<br>0553-44-0179   |

|  |  |  |   |   |  |
|--|--|--|---|---|--|
| 昭和町立西条小学校<br>身延町立身延北小学校<br>早川町立早川南小学校<br>大月町立笹子小学校<br>都留市立旭小学校<br>● 葦崎町立葦崎北東小学校<br>(9~11)  | 中巨摩郡昭和町西条2222<br>南巨摩郡身延町下山2324<br>南巨摩郡早川町高住524<br>大月町笹子町吉久保196<br>都留市旭馬場544<br>葦崎町藤井町駒井1912  | 055-275-6100<br>05566-2-5170<br>0556-20-5015<br>0554-25-2201<br>0554-48-2008<br>0551-22-0235   | ● 岡山県<br>岡山市立開成小学校<br>岡山市立平福小学校<br>● 瀬戸町立平福小学校(8~10)  | 岡山市金田1524<br>岡山市平福1-7-1<br>赤穂郡瀬戸町鍛冶屋391   | 086-948-2042<br>086-263-7621<br>08695-3-0604   |
| ● 長野県<br>塩尻市立塩尻西小学校<br>● 軽井沢町立軽井沢東部小学校<br>(5~8)<br>● 塩金村立塩金小学校(9~11)   | 塩尻市大門5-4-55<br>北佐久郡軽井沢町軽井沢1245<br>南安曇郡塩金村高川3000  | 0263-52-0147<br>0276-42-2684<br>0263-72-2013   | ● 岡山県<br>● 岡広島県<br>● 廿日市市立金剛寺小学校<br>(8~10)<br>廿日市市立宮園小学校<br>福山市立多治米小学校  | 廿日市市地御前2-22-1<br>廿日市市宮園1-1-2<br>福山市多治米町5-15-15  | 0829-31-1124<br>0829-38-1776<br>0849-53-1265   |
| ● 岐阜県<br>岐阜市立白山小学校<br>● 大垣市立中川小学校(9~11)<br>● 穂積町立生津小学校(6~8)  | 岐阜市白山町2-1<br>大垣市中川町2-460<br>本巣郡穂積町馬場上光町2-108<br>恵那郡明智町吉良見560-1   | 058-264-6241<br>0584-81-1016<br>058-327-5406<br>0572-65-2609   | ● 山口県<br>● 阿知須町立阿知須小学校<br>(8~10)<br>下関市立関西小学校<br>岩国市立天尾小学校<br>岩国市立羅河小学校<br>山口市立小嶺小学校<br>小野田市立高千帆小学校                       | 吉敷郡阿知須町浜4251<br>下関市関西町12-1<br>岩国市天尾262<br>岩国市多田1365-2<br>山口市下小嶺2519<br>小野田市東高泊1092                          | 0832-22-3166<br>0827-47-3215<br>0827-41-0774<br>0839-27-0051<br>0836-83-2642                                 |
| 明智町立吉田小学校  |  |  | ● 徳島県<br>松茂町立長原小学校<br>● 徳島市立新町小学校(8~10)   | 坂野郡松茂町長原535<br>徳島市東山手町2-16  | 0886-99-5513<br>0886-22-3348   |
| ● 静岡県<br>裾野市立富岡第一小学校<br>● 浜松市立西小学校(6~8)<br>● 富士市立吉原小学校(9~11)   | 裾野市御宿600<br>浜松市鶴江町70-1<br>富士市高嶺町6-1  | 0559-97-0343<br>053-452-1171<br>0545-52-4190   | ● 香川県<br>● 仁尾町立仁尾小学校(9~11)<br>● 蓮島町立蓮島小学校(6~8)  | 三豊郡仁尾町仁尾西1736<br>香川郡蓮島町1600   | 0875-82-2049<br>087-892-3007   |
| ● 愛知県<br>● 西尾市立花ノ木小学校<br>(8~10)  | 西尾市高島6-1   | 0563-57-2658   | ● 愛媛県<br>● 松山市立高浜小学校(8~10)  | 松山市梅津寺町1352-2   | 089-951-0321   |
| ● 三重県<br>● 鈴鹿市立合川小学校(6~8)<br>● 鈴鹿市立樺小学校(9~11)  | 鈴鹿市三宅町3694-2<br>鈴鹿市山本町750  | 0593-72-0014<br>0593-71-1014   | ● 高知県<br>香我美町立岸本小学校<br>高知市立江ノ口小学校<br>三原村立三原小学校<br>大野見村立大野見小学校<br>大野見村立北小学校<br>● 田野町立田野小学校(8~10)<br>土佐山田町立紫藤小学校            | 香我美郡香我美町岸本95<br>高知市新本1-8-12<br>幡多郡三原村袖ノ木47<br>高岡郡大野見村吉野9-1<br>高岡郡大野見村吉野109<br>安芸郡田野町924-1<br>香美郡土佐山田町紫藤2091 | 0887-54-2639<br>0888-75-8251<br>0880-46-2628<br>0889-57-2446<br>0889-57-2227<br>0887-38-2109<br>0887-57-9204 |
| ● 東京都府<br>● 久御山町立御牧小学校<br>(8~10)   | 久世郡久御山町相島曾根19  | 075-631-2275   | 南国市立大湊小学校<br>南国市立日章小学校  | 南国市前浜1614-1<br>南国市田村乙267-1  | 0888-65-8238<br>0888-64-2726   |
| ● 大阪府<br>● 河内長野市立天野小学校<br>(8~10)<br>● 大阪市立真田山小学校<br>(4~6)<br>● 大阪市立味原小学校(4~6)  | 河内長野市下里町365<br>大阪市天王寺区玉造本町14-41<br>大阪市天王寺区味原町8-19  | 0721-52-2528<br>06-6761-0902<br>06-6768-2288   | ● 福岡県<br>春日市立春日東小学校<br>● 小郡市立東野小学校(9~11)<br>● 福岡市立飯倉中央小学校<br>(6~8)  | 春日市若葉台裏1-15<br>小郡市小郡2409-4<br>福岡市早良区飯倉3-6-35  | 092-501-0211<br>0942-73-1780<br>092-845-5425   |
| ● 兵庫県<br>三木市立口吉川小学校<br>社町立社小学校<br>西宮市立小松小学校<br>福崎町立福崎小学校<br>● 和田山町立糸井小学校<br>(8~10)<br>和田山町立大蔵小学校                                       | 三木市口吉川殿崎666<br>西宮郡社町社1550<br>加東市小松東町1-3-59<br>神埼郡福崎町馬田169-4<br>朝来郡和田山町高生田4-1<br>朝来郡和田山町宮田210   | 0794-88-0224<br>0795-42-0004<br>0798-47-0051<br>0790-22-0101<br>0796-75-2821<br>0796-73-2800   | ● 佐賀県<br>● 伊万里市立滝野小学校<br>(8~10)   | 伊万里市東山代滝川3132   | 0955-28-0023   |
| ● 奈良県<br>● 橿原市立耳成西小学校<br>(8~10)  | 橿原市上品寺町455-1   | 0744-22-6567   | ● 長崎県<br>● 多良見町立伊木力小学校<br>(6~8)<br>● 長崎市立西坂小学校(9~11)  | 西彼杵郡多良見町舟津郷1107-1<br>長崎市御船町6-53   | 0957-44-1022<br>095-823-2684   |
| ● 和歌山県<br>● 田辺市立福成小学校(8~10)  | 田辺市福成町780  | 0739-22-0682   | ● 熊本県<br>● 宇土市立宇土小学校(6~8)<br>● 七城町立七城小学校<br>(9~11)  | 宇土市高柳町104-1<br>菊池郡七城町甲佐野33  | 0964-22-1101<br>0968-25-2629   |
| ● 鹿児島県<br>会見町立会見小学校<br>● 鹿野町立小鷲河小学校<br>(8~10)<br>西伯町立西伯小学校<br>青谷町立青谷小学校<br>赤碓町立安田小学校<br>鳥取市立修立小学校<br>泊村立泊小学校<br>米子市立佳吉小学校<br>名和町立庄内小学校 | 西伯郡会見町宮前658<br>霧島郡鹿野町小別所355<br>西伯郡西伯町法勝寺336<br>霧島郡青谷町青谷3459<br>東伯郡赤碓町苅津318<br>鳥取市立川町5-389<br>東伯郡泊村泊280<br>米子市旗ヶ崎5-17-1<br>西伯郡名和町古御堂177 | 0859-64-2015<br>0857-84-2651<br>0859-66-2215<br>0857-85-0303<br>0858-55-0201<br>0857-23-3361<br>0858-34-2692<br>0859-29-3124<br>0859-54-2052 | ● 大分県<br>● 大分市立苜場町小学校<br>(8~10)   | 大分市苜場町3-49  | 097-532-2540   |
| ● 島根県<br>● 松江市立城北小学校(8~10)<br>松江市立本庄小学校<br>八雲村立八雲小学校   | 松江市東奥谷町229<br>松江市愚生町76-3<br>八雲郡八雲村西岩坂947   | 0852-21-4944<br>0582-34-0520<br>0852-54-0089   | ● 宮崎県<br>● 宮崎市立学園木花台小学校<br>(8~10)   | 宮崎市学園木花台南2-13   | 0985-58-4820   |
|  |  |  | ● 鹿児島県<br>国分市立国分南小学校<br>鹿屋市立寿北小学校<br>● 鹿児島大学教育学部附属小学校<br>(5~7/8~10)<br>西之表市立榕城小学校<br>川内市立平佐西小学校<br>枕崎市立枕崎小学校<br>名瀬市立奄美小学校 | 国分市下井2109<br>鹿児島市礼元1-17-10<br>鹿児島市部元1-20-15<br>西之表市西之表7545<br>川内市平佐町2193<br>枕崎市千代田町124<br>名瀬市久里町15-10       | 0995-46-0221<br>0994-44-5748<br>099-285-7962<br>09972-2-0010<br>0996-23-7169<br>0993-72-9881<br>0997-52-0155 |
|  |  |  | ● 沖縄県<br>● 浦添市立浦添小学校(8~10)  | 浦添市仲間318  | 098-877-2064   |

(『カリキュラム編成ガイド』pp.126-27. 開隆堂出版より引用)

---

「教科等の構成と開発に関する調査研究」  
研究成果報告書（1）

昭和62～平成10年度  
文部省研究開発学校における研究開発の  
内容に関する分析的検討(1)  
—教育課程の全体的な再編、情報教育、  
「総合学科」高校、英会話をめぐる研究開発—

平成12（2000）年3月

発行者 国立教育研究所

住 所 〒153-8681

東京都目黒区下目黒6-5-22

TEL 03-5721-5150（代）

---